

歯学部ニュース

平成30年度第1号（通算133号）

特集 歯学部入学おめでとう
歯学部生の活動

目 次

特集1 歯学部入学おめでとう	
・入学を祝して……………	1
学部長 前田 健康・副病院長 小林 正治	
・入学者のことば……………	3
歯学科1年 森田 小径	
歯学科1年 安藤 まな	
歯学科編入2年 北原由加里	
口腔生命福祉学科1年 阿部 京華	
口腔生命福祉学科1年 渡部 彩花	
口腔生命福祉学科編入3年 徳竹 妙香	
口腔生命科学専攻博士課程1年 笠原 映	
口腔生命科学専攻博士課程1年 堀 頌子	
口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年 沖津 佳子	
・入学おめでとう 入学者名簿……………	9
平成30年度 歯学部歯学科	
平成30年度 歯学部口腔生命福祉学科	
平成30年度 歯学部歯学科 2年次編入生	
平成30年度 歯学部口腔生命福祉学科 3年次編入生	
平成30年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻(博士課程)	
平成30年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻(博士前期課程)	
平成30年度 大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学専攻(博士後期課程)	
・新入生合宿研修を終えて……………	11
小児歯科・障がい者歯科・助教 村上 智哉	
特集2 歯学部生の活動	
・歯学部生の今……………	13
歯学科 2年 菅沼 雄大/歯学科 2年 小林 雅/歯学科 3年 坂田 政貴	
歯学科 3年 山田 果歩/歯学科 4年 齋藤 瑠郁/歯学科 4年 渡部 清人	
歯学科 5年 山本 静香/歯学科 5年 園辺 悠/歯学科 6年 川勝あかり	
歯学科 6年 宮城 一真/口腔生命福祉学科 2年 山下 綾菜	
口腔生命福祉学科 3年 白倉 未唯/口腔生命福祉学科 4年 増澤 美有	
・歯学部運動会を終えて……………	27
柴田 瑛治	
・歯と口の健康フェアを終えて……………	29
郡司 敏宏	
・部活動紹介……………	31
茶道部 久保田瑞穂・軟式野球部 永島 和裕	
総務委員会だより……………	34
前田 健康	
学年担任制……………	45
小野 和宏・照沼 美穂・大島 勇人・齋藤 功・秋葉 陽介・藤井 規孝	
教授に就任して……………	48
口腔病理学分野教授 田沼 順一	
准教授に就任して……………	50
歯科麻酔学分野准教授 岸本 直隆	
素顔拝見……………	52
岸川 咲吏・大竹 正紀・枝並 直樹	
活動の場を海外に広げて……………	55
ウィスコンシン大学留学報告 堀 一浩・加来 賢	
SSSV報告 金子 和幸・小林 由奈・草塩 奈央	
連載:「大学院に行こう」……………	63
山田 実生・吉原 翠・渋谷 瞳	
研修医プログラムを修了して……………	68
市川 優・今井 有蔵	
学会受賞報告……………	70
竹井 絵理・高橋功次朗・中田 樹里・齋藤 一誠・岩瀬 陽子	
佐藤 拓実・枝並 直樹・中谷 暢佑・市川 佳弥・Farah Ali Al-Omari	
真柄 仁・吉田 謙介	
新潟歯学会報告……………	85
永田 昌毅	
同窓会だより……………	87
野内 昭宏・内藤 義隆・山口 洋美・小田 陽平・野中(青木)由香莉	
診療支援部便り……………	93
後藤 早苗	
歯学部を支える方々……………	95
歯学部総務係長 小林 江里・歯学部総務係 山下 啓太	
教職員異動……………	97
平成30年度歯学部内委員会……………	103
歯学部各種委員会……………	106
編集後記……………	107



入学を祝して

歯学部長 前田 健康

平成30年度新入生の皆さん、入学おめでとうございます。新潟大学歯学部に入学された皆さんに、新潟大学歯学部の教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。また保護者ならびにご家族の皆様の方々にも心からお慶び申し上げます。皆様方のご期待にそえるべく、新潟大学歯学部でその能力をさらに大きく伸ばすことができるよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。

国立大学法人は第三期中期目標・中期計画期間に入り、今年度は第三期の3年目にあたります。緊縮国家財政が続く中、文部科学省は各大学、各大学の使命を明らかにするため、ミッションの再定義を行いました。その中で、私ども新潟大学歯学部の強みとして、「問題解決能力を持った歯科医師養成と国内外の人材養成モデルの構築」、「口腔のQOL向上を目指した基礎・臨床研究」、「有病・高齢者への対応や歯科再生医療の実践」があげられました。私ども新潟大学歯学部の教育スタッフは、課題探求・問題解決能力の育成を重視し、その後続く学習を通して、主体的に専門性を向上させる人材を養成することを目指しています。新潟大学歯学部の教育目標は、歯学・口腔保健福祉学の分野に貢献する専門職業人の育成ですが、新潟大学歯学部では「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としていますので、教育への諸君の積極的な参加が求められます。新潟大学歯学部の教育の主役は、教員ではなくて、学生諸

君であるということです。自ら努力して勉強しなければ、皆さんが望む成果を得ることができません。自己の目標達成のために、切磋琢磨し、たゆまぬ努力をお願いします。

また、新潟市は1858年の日米修好通商条約により、函館・横浜・神戸・長崎ともに世界に向けて開港した海港都市で、進取の精神に基づいた町です。現代はグローバル社会となり、ボーダーレスな環境の中での人材育成が期待されています。私ども新潟大学歯学部でも在学中から夏期、春期休暇を利用した学生の短期海外派遣を行い、毎年、約30名の学生がアジア各国、アメリカ、カナダ、スウェーデン、さらに今年はブラジル等の諸外国に出かけ、自己研鑽を行っています。是非、在学中にthe enterprising spirit of a port city opened to the worldを持って、海外に旅立ち、広い視野を持って下さい。一步を踏み出す勇気が必要で、自発的な気持ちがなければ、意義のある大学生活を送ることはできません。

勉強の話ばかり致しましたが、20代前後のこの時期、勉強ばかりだけでなく、クラブ活動、ボランティア活動などさまざまな社会経験をし、歯学部以外にも多くの友人を作り、教養のある社会人となるよう人間性を磨いてください。そして、社会の期待に応える医療人を目指し、これから充実した学生生活を過ごし、卒業時に、平成30年度新入生および保護者の皆様全員でまた朱鷺メッセで喜びを分かち合いたいと思っています。



歯学部入学おめでとう

医歯学総合病院 副院長 小林 正 治（歯科担当）

難関を突破され歯学部歯学科ならびに口腔生命福祉学科に入学された平成30年度新入生の皆さん、入学おめでとうございます。これからの歯科医療ならびに社会福祉を担うべく全国から集まってきた皆さんを心より歓迎いたします。

皆さんは今、大学入学という一つの目標を達成し、晴れて新潟大学歯学部の学生となったわけですが、これはあなた方が1枚の切符を手に入れたということでもあります。この切符の終着駅は卒業式になります。この切符を使って何をすべきか、そして自分が何者になりたいのかを、よく考えてください。大学での生活は、皆さんがこれからの人生を生きていくための基礎を固める時期になります。是非、高い志を持って、学業に励んでいただきたいと思います。

新潟大学医歯学総合病院は、特定機能病院として地域の中核的医療及び高度医療を担う基幹病院でありますとともに歯学部医学部の教育病院でもあり、多くの優秀な医療人を輩出してきました。本院の理念は、「生命と個人の尊厳を重んじ、質の高い医療を提供するとともに、人間性豊かな医療人を育成する」というものであります。われわれは、優秀な医療人を育てたいと考え、様々な教育プログラムを用意し、全国モデルとなる充実した歯学教育を実施しています。皆さんにも、1年生の時から早期臨床実習として実際の医療の現場に立っていただきます。ここでは、医療人になる

ための心構えを形成し、医療の本質である「患者さんの視点に立つ」という意味を実感していただく目的があります。また、見学実習を通して、医療行為に必要な知識や技量を観察し、これからの基礎歯学・臨床歯学学習に対するモチベーションを向上させ、医療人としてのあるべき態度を肌で感じ取ってほしいと考えています。

シェークスピアの言葉に、「人は心が愉快であれば、終日歩んでも嫌になることはないが、心に憂いがあれば、わずかな歩みでも嫌になる。人生もこれと同様で、人は常に明るく愉快な心をもって人生の行程を歩むべきである。」というものがあります。是非、歯学部にとどまらずサークル活動やボランティア活動など様々な経験を通して幅広い多くの友人を作ってください。そして、仲間と大いに食べ、大いに飲み、大いに語らって、愉快な心をもって大学生活を送っていただきたいと思います。そして、挫折を恐れずに様々なことに挑戦していただきたいと思います。挫折は、挑戦した人だけが味わえる特権です。また、その経験が自信と勇気になり、人間として大きく成長させてくれます。知識や技術だけでなく、心も豊かになるよう自分自身を磨いていただきたいと思います。皆さんが、大学での歩みの中で、良き友に巡り合い、良き師に恵まれて、自らの豊かな道を切り拓き、そして皆そろって卒業式の日を迎えることができることを願っています。

入学者のことば

入学者のことば

歯学科1年 森田小径



4月3日に入学式を迎えてから早3カ月が経ちました。毎日授業の課題やレポート、部活などに追われ、この3カ月は振り返ってみるとあっという間でありました。しかし、大変だからこそ自分のできることをしっかりとやろうと思えるものです。集中して取り組むことほど楽しいことは無く、毎日が充実していることを実感しています。入学してから新しい友達、先輩方、教授の先生方と出会い、様々な話を聞くことができます。そんな中でまだまだ成長しきれていない自分を感じることも多くあります。入学したばかりのころは、初めての一人暮らしで戸惑うこともあり、しっかりとした大学生としてやっていけるのか不安な気持ちもありました。そんな中で、自分の周りにいる人たちに協力していただきながら日々を過ごしていくうちに少しずつ大学生活にも慣れたのだと思います。それが今では楽しさに変化し、たくさんの発見をしたり、私にとって新しいことばかりと出会ったりする毎日に感謝するまでになりました。

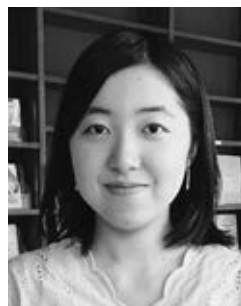
さて、普通の大学生活の中身についても簡単に話したいと思います。私たち1年生は現在一般教養科目を履修しています。専門科目とは異なり、歯学の勉強はあまりできていません。せっかく歯学部に入ったのと思う人もいないことは無いと思います。しかし、個人的には決して残念だとは思っていません。なぜなら教養科目が学べるのは、1年生の今だけだからです。教養科目を学ぶ意味をグループワークを通して考える、密度の高い授業もあり、多くの意見を聞くうちに私自身の

考える幅も広がっていると嬉しいです。

最後になりますが、歯学部は歯学科と口腔生命福祉学科の合わせて60人程ですごく人数の少ない学部だと思います。しかし、それが仲間同士の結束力を生むはずで、困ったときはお互いに助け合ったり、相談しやすい雰囲気が自然とできます。そのみならず、自分の意見を主張しやすい環境が整ってくると思います。少人数の強みとはここにあるのではないのでしょうか。拙いながらも、以上で入学者のことばとさせていただきます。

入学者のことば

歯学科1年 安藤まな



新潟大学歯学部に入入学して早3ヶ月。新たな環境での生活に不安もありましたが、それは杞憂でした。入学早々に懇親会や合宿があったため、すぐに友達ができました。今では楽しくおしゃべりをしたり、勉強を教えあったりしています。

1年次は五十嵐キャンパスで教養課程の勉強をします。高校までとは異なり、多様な形式の授業に大学生らしさを感じています。中でも私が毎週楽しみにしているのは、留学生との授業です。与えられたテーマについてグループごとに英語でディスカッションをします。たくさんの意見が飛び交うので新たな発見があり、とても充実した時間です。様々な国籍の方とお話できるのは貴重な機会だと思います。総合大学らしい五十嵐キャンパスでの生活を有意義に過ごしたいです。

また、週に1回、医歯学総合病院で早期臨床実習があります。各診療科での治療見学や新患者

さんの誘導、自らが患者役になる体験をしています。歯科を学ぶ前に医療現場の実態を肌で感じられたこの特別な経験を、今後の学習に役立てたいです。

課外活動としては、今まで音楽系の部活をしていましたが、新しいことに挑戦したいと思い、歯学部バスケットボール部に入部しました。良き先輩に恵まれ、基本から教えていただき、頑張っています。また、全学のESSにも入り、多様な志の先輩や友達と仲良く活動しています。私はスピーチコンテストで決勝に進んだので、優勝に向け、現在練習中です。

岡本太郎さんの『私は、人生の岐路に立った時、いつも困難なほうの道を選んできた。』は私の座右の銘です。すべてが自分の思い通りにならないかもしれないけれど、歯科医師という新たな目標と自分の決断に責任を持って突き進んでいきたいです。努力を惜しまず、幅広い知識を身につけ、その中から自分らしさを探していけたらいいなと思います。

最後に、たくさんの人に支えてもらって今の私があります。周りの人への感謝の気持ちを忘れず、勉学に勤しみ、6年間の大学生活を謳歌したいです。

入学者のことば

歯学科編入2年 北原由加里



歯学科に編入してから、早くも3ヶ月が経過しました。社会人経験を経て、再び「学生」という立場になり、久々の試験やレポートにドキドキ、ソワソワしながらも楽しく充実した日々

を過ごしています。

先日、英語の授業で「BUCKET LIST」といったテーマでディスカッションをしました。映画「最高の人生の見つけ方」でご存知の方もいると思いますが、アメリカでは「BUCKET LIST」という、死ぬまでにしたいことを書き留める習慣

があるそうです。いつかやりたいなぁと漠然と思いつかべていた夢、人生を左右するかもしれない大きなビジョン、自分の中に秘めている願望。少し大げさかもしれませんが、私にとっての歯学科編入はこの「BUCKET LIST」の一つでした。

編入学をする前は、大学で口腔保健学を学び、卒業後は歯科衛生士として都内の医学部附属病院に勤務していました。がん患者の口腔管理に興味を持ったことがきっかけで就職した医学部附属病院でしたが、他にも口唇口蓋裂など先天性疾患を有する患者や、移植を施行する患者、大学の授業では聞いたことがない疾患も多く、歯科衛生士として貴重な経験を積むことが出来たと感じています。編入学のきっかけは、疾患の理解の前提となる基礎を学びたいと思った事と、もっと患者さんに出来ることを増やしたい、歯科衛生士の役割を真に理解する歯科医師になりたい、という思いが次第に強くなっていったからです。

現在2年生で学んでいる生理学や生化学、解剖学、微生物学、発生学などといった基礎分野は、臨床で見てきた部分と繋がる内容があり、とても興味深いです。少し遠回りをしてきましたが、こういった気持ちで学べるのが嬉しく、非常に有難いと感じています。これまで、沢山の患者さんや医療人との出会いの中で、思わぬ出来事に感動したり、自分達の無力さを痛感したり、沢山の感情を共有してきました。きっと、この学生生活も自分にとって、そんなかけがえのない時間になるに違いありません。クラスメイトと沢山の楽しい思い出を作り、全員が自分にとっての「BUCKET LIST」を叶えることの出来るよう、後悔のない大学生活を送っていきたいです。

入学者のことば

口腔生命福祉学科1年 阿部京華

新潟大学に入学し、早くも3か月が過ぎました。4月からはそれまでとはまるっきり違う生活になり、一人暮らしや学校に対して不安しかなかった日のことを遠い日のように感じています。初めての一人暮らしや、履修登録の仕方、授業の

課題など、高校のときとの違い一つ一つに戸惑いを覚え、余裕がなかった最初のころと比べると、ずいぶん大学生活にも慣れてきました。入学当初はほとんど知っている人がいませんでしたが、今では友達もたくさんでき、毎日楽しく充実した日々を送っています。

入学してすぐ行われた合宿研修では、グループディスカッションを通して歯学科も口腔生命福祉学科も関係なく親睦を深めることができました。それまで仲のいい友達ができるか心配でしたが、新しくできた友達と食事をとったり、部屋で遅くまでおしゃべりしたり、とても楽しい2日間を過ごしました。この合宿を通して仲良くなった友達と4年間付き合っていくうえで、互いに助け合いながらいい関係を築いていきたいと思います。

合宿が終わるとすぐに授業が始まり、金曜日の早期臨床実習も始まりました。まだ何の知識もなく、歯科医療人になる実感も湧いていませんでしたが、ユニフォームを着て実習に臨むたびに少しずつ意識が高まったように思います。初めてユニフォームをきて病院に出たときは、目に映るものすべてがとても新鮮で歯科衛生士に一步近づけたうれしさでいっぱいだったのを覚えています。理想の歯科衛生士になれるよう、この時の初心を忘れずに頑張りたいです。また、病院を見学させていただく中で、コミュニケーション力が大切であることを学びました。1年生は時間がたくさんあると聞いたので今のうちにいろんなことに挑戦して、多くの人と話してみたいと思います。そして培った経験を将来につなげていきたいです。

新潟大学に入学して3か月でまだまだ始まったばかりの大学生活、これから苦しいことやつらいこともあるとは思いますが、4年間悔いのないよう頑張りたいと思います。

入学者のことば

口腔生命福祉学科1年 渡部 彩花

新潟大学に入学してから、早いことに3か月がたちました。合格した時の嬉しさを胸に、地元を離れ生活する不安や大学生活への期待など、さま

ざまな思いを抱えて入学式に出席したことを今でも鮮明に覚えています。そして、歯科衛生士・社会福祉士になるという将来の目標へ向かって仲間と努力し、充実した毎日を送っています。

4月から始まった早期臨床実習では、私にとって多くのことを学ぶ機会になりました。病棟へ出るうえでの身だしなみや時間を守ること、コミュニケーションを取ることの大切さなど、すべて当たり前ではありますが改めてその大切さを認識することができました。もちろん患者さんとコミュニケーションを取るのは容易ではありませんが、さまざまな人と会話をする楽しさを学ぶことができました。同時に、実際に病院へ出て患者さんと接することで、将来自分が医療現場で働くのだと実感が湧きました。この先実習をしていく上で、つらいと感じることも多々あると思いますが、仲間と協力し、どんな問題にも立ち向かっていきたいです。

また、部活動では歯学部卓球部に所属しました。初心者なので技術的にはまだまだ未熟ですが、先輩やOBの先生方に教えてもらい日々楽しく練習に取り組んでいます。歯学部卓球部という名前ですが、歯学部だけでなく、医学部の方、他の県の歯学部の方とも触れ合う機会があるため、交流の幅を広げることが出来ます。多くの方と接することで、たくさんの知識を得ることも出来ます。なので、部活動での集まり一つ一つが私にとって貴重な機会です。

大学生になり今まで挑戦したことのない活動に多く取り組んでいます。卓球部や口腔生命福祉学科の幹事、一人暮らしなどです。どの活動も初めてになるので、失敗することや苦戦することがあ



と思います。しかし、それらを自分自身の成長へとつなげ、すべての活動を価値あるものにしたいです。

入学者のことば

口腔生命福祉学科編入3年 徳竹 妙香

私は、この3月に短期大学を卒業し、歯科衛生士免許を取得後、さらにステップアップを考え、新潟大学口腔生命福祉学科に編入しました。

私が編入を考えたきっかけは、短期大学での臨床実習で特別養護施設などに伺い、高齢者の方々やさまざまな障害をもった方々と接した際に歯科衛生士としての技術を身に付けるだけでは患者さんの気持ちに寄り添った口腔ケアを行うことが出来ないと感じました。そこで、歯科衛生士と社会福祉士のダブルライセンスを取得することで、患者さんによりよいサポートができるのではないかと考え、入学を決めました。

いざ入学が決まってみるとクラスになじめるだろうか、勉強についていけるだろうかなどの不安がありました。しかし、クラスの仲間は和気藹々としていて活気のあるクラスで、分からないことがあると声をかけてくれたり、助けてもらったりしながら日々充実した生活を送ることができています。講義は学生自ら問題を見つけ、グループディスカッションを行い、問題解決をするPBL形式が多くあります。PBLは学生主体で最初から最後まで学生たち自身で解決していくという授業スタイルなので、初めは戸惑いもありましたが、グループのみんなに教えてもらいながら課題に取り組んでいます。今後、社会に出た際にこの授業経験を生かせるように毎回の課題に一生懸命取り組み、自分の力を伸ばしていきたいと思っています。また、私は専門科目以外にも週2回五十嵐キャンパスで講義を受けています。旭町キャンパスとはまた違った、これぞキャンパスライフという環境で勉強ができ、他の学部の方々と関わることができるのも楽しみの一つになっています。

この3か月間で、自分が積極的に行動すればいくらかでも道は開けてくる恵まれた環境であるとい

うことを、様々な先生方のお話を通して実感しています。2年間という短い学生生活ですが、充実した生活を送るために勉学に励んで行きたいと思っています。

入学者のことば

口腔生命科学専攻博士課程1年 笠原 映

今年の4月より顎顔面口腔外科学分野の大学院に入学しました笠原映と申します。私は新潟市の出身で、中学、高校、大学、研修医ともう10年以上も同じような川沿いの通学路を使っています。今回入学以来初めて執筆の機会をいただきました。大学院入学にあたり考えていたことなど、拙い文章ですが書いてみたいと思います。

研修医時代は、4月～9月は県庁近くの新潟中央病院、10月からは顎顔面口腔外科学分野で学びました。研修後は県外で働いている自分の姿を思い描いていましたが、研修を通し自分の知識・技術不足を痛感し、何が正しいのか判断できないような状態で外に出ることに不安を感じるようになってきました。また、口腔外科の色々なことを教えていただくにつれ、研修医の時の単なる経験や体験で終わらすのではなく、ご指導くださった先生方に近づけるようにもっと勉強したいと思うようになり顎外科の大学院進学を決めました。

執筆している今、大学院に進学し3か月が過ぎようとしています。この間、学会発表を初めて経験しました。準備も発表も手取り足取りご指導いただき私はとても勉強になりましたが、きっとご指導くださった先生方は発表が終わり私以上に



ホッとされたのではないかと思います。お忙しい中日々熱心にご指導くださる先生方には心より感謝しております。また、口腔外科の大学院生は4か月の麻酔科研修があり、私は今まさに麻酔科研修中です。他科の先生にも熱心にご指導をいただける機会も本当にありがたいと思います。さらに、相談しあえる同期がいるのもとても心強く、彼らの頑張っている姿を見るとモチベーションが上がります。

今はできないことばかりですが、目標としたい先生がすぐ近くにたくさんいらっしゃる、自分のやる気次第で多くのことを勉強できる恵まれた環境にいることに感謝しながら卒業する時に大学院に進んでよかったと思えるよう毎日を過ごしたいと思います。

入学者のことば

口腔生命科学専攻博士課程1年
堀 頌 子

今年包括歯科補綴学分野大学院に入学した堀頌子です。

今回“入学者のことば”というテーマで原稿依頼を頂いたのに当たり、大学院進学を決意した理由と、現在の生活についてお話したいと思います。私が義歯に関して興味を持った最大の源は、元々自分が“食”に執着が強いという所にあると思います。

昔から食べるのが大好きで、大学に入り義歯に関して初めて学んだ時の印象は、例えば極端に言えば無歯顎の人にしっかりした総義歯を装着したら、ご飯を食べれなかったのに美味しく食べれるようになる、それってなんて凄いな、という単純な感銘でした。そして食べれるようになる手伝いを出来る補綴に自分が携われたら嬉しいな、というのが始まりでした。

その後講義、基礎・臨床実習を通し義歯に関して理解を深めていくうちに、常に新たな疑問点が浮かび、その奥深さにもっと知りたい。学びたい。と考えるようになりました。

そんな私ですが、院進学を決意したのは願書提

出締め切りの真近でした。

流されやすい私は、4年間という長い未来を見据え、かつ周りがこぞって開業医の見学に勤しむ中、本当にこの道でいいのか、と明確な理由なく漠然と不安を感じるようになったのです。しかし悩みぬいた結果、行かないで後悔するのが一番嫌だ、なら、とりあえず行ってみよう！という考えに至りました。

入学した今となっては、日々学ぶことの多さ・また素晴らしい先生・先輩の下で専門的に学べる環境に大変感謝しています。

毎日の生活に関しては、英語・統計の授業、診療、学生の基礎実習の手伝いなどに参加させて頂いています。

診療については日々色々な症例に出会い、指導医の先生その他沢山の先生方・先輩方に様々なことを教えて頂き、新たに吸収できることの多さを嬉しく思います。

基礎実習に関してはお手伝いをさせて頂く、という形で参加させてもらうことで自分の理解していなかった部分を再度確認できたり、臨床に向けて土台を固める・技工操作の見直しを出来る、という点から逆に私自身の方が色々と学ばせて頂いています。

研究に関しては、私は具体的な内容についてはまだ決定していないためこれから本腰を入れていきたいと思っています。

まだ入局して3か月ではありますが、考えようによってはもう3か月、と捉えることもできます。せっかく悩み抜いて選んだ環境、4年間経っ



た後に学生の頃より何周りも大きくなった自分で胸を張って修了できるように、これから一生懸命頑張りがながらも自分のペースで着実に成長していければと思います。

入学者の言葉

口腔生命福祉学専攻博士前期課程 1年 沖津佳子

この度、口腔生命福祉学専攻博士前期課程に入学した沖津佳子です。社会人大学院生として大学院に通いながら新潟大学医歯学総合病院で歯科衛生士として勤務しています。

大学を卒業してあっという間に3か月ほど経ちました。大学時代の友人とは少し前までは毎日顔を合わせていたのに今では県外に行った友人も多く、なかなか会うことができなくて寂しい気持ちでいっぱいです。しかし会った時にはお互い仕事の話をして励ましあっています。そんな中で大学時代4年間一緒に勉強してきた友人によく言われることは私が大学院に進学するなんて意外だということです。私自身もまさか自分が大学院に行くとは予想していませんでした。

大学時代の私は周術期口腔ケアについて学びたいと考えていたので病院勤務を希望していました。また、その当時は大学院へ進学して研究をしようという考えはありませんでした。このような私の考えを変えてくれたのは大学院の先輩方でした。大学4年時に先輩方のお話を聞く機会があっ

たのですが、この時に社会人大学院生として仕事と勉強の両立をしているというお話を聞いて私の中で選択肢の幅が広がりました。病院で臨床経験を積みながら研究を行うことができるのは自分の糧になるのではないかと感じるようになりました。

まだ入学して3か月ということもあり本格的に研究を行っているわけではありませんが、講義の中で論文を読む機会が増え、それぞれの分野の先生方からのお話を聞いて仕事につながる部分も多いです。

歯科衛生士としてまだまだ未熟な私は歯科衛生士の先輩や先生方から多くのことを教えていただき、学びと反省の日々を過ごしています。このような中で大学院の勉強、研究を並行していくのは時に大変なことがあると思います。しかし将来の自分が大学院に進学してよかったと思うことができるように努力していきたいと思いますのでこれからよろしく願いいたします。



新入生合宿研修を終えて

小児歯科・障がい者歯科・助教 村上 智哉

平成30年4月7日（土）、8日（日）の2日間、新潟市西区赤塚のメイワサンピアにて新潟大学歯学部新入生合宿研修が開催されました。本研修の対象は、歯学科・口腔生命福祉学科の新入生およ

び3年次編入生を対象として行われているもので、本年度は歯学科39名（2年次編入生5名含む）、口腔生命福祉学科20名（3年次編入生3名）の計59名の新入生が参加しました。

【日程】

4月7日（土）		4月8日（日）	
8:10	歯学部出発	6:30	起床
9:00	会場到着・写真撮影	7:00	朝食
9:35	全体ガイダンスⅠ	7:45	学生によるガイダンス
10:10	PROGテスト	8:15	全体ガイダンスⅡ
12:00	グループ作業	9:00	BLS講習会
12:30	昼食	11:30	閉会式
13:20	アイスブレーキング	11:45	メイワサンピア発
14:30	自己研鑽セミナー	12:15	歯学部着・解散
17:30	入浴・自由時間		
18:15	夕食		
20:00	教員との懇談		
22:00	就寝		

4月7日（土）

生憎の雨となってしまいましたが、メイワサンピアに到着してすぐに集合写真を撮影するため玄関前に集合しました（写真1）。その後、セミナー室に移動して全体ガイダンスⅠを行いました。まず、前田歯学部長にごあいさつ頂き、次いで参加教職員の自己紹介などを行いました。

次に、PROGテストというペーパー試験を行いました。PROGテストは、専攻・専門に関わらず、社会で求められる汎用的な能力・態度・思考を測定・育成するものです。皆さん真剣な表情で筆記試験を受けていました。その後、自己紹介などの簡単なグループ作業で午前の部は終了となりました。

午後はアイスブレーキングからスタートしました。今年度の司会進行は生体歯科補綴学分野の秋葉奈美先生が担当してくださいました。「砂漠で遭難したらどうするか」と題したコンセンサス

ゲームが行われました。どのグループもみんなが意見を出し合い、グループとして1つの回答を作り上げることができていました（写真2）。続いて行われた自己研鑽セミナーは、歯周科の小松先生が担当してくださいました。簡単に内容を説明するとK-J法（挙げられた項目全てを同列に列挙し、図解等にまとめる方法）を用いて質問に対する答えのグループ分けをしました。「どんな医療人になりたいか」、「それを実現するために学ばべきこと。」についてグループで意見を出し合い、まとめていきました（写真3）。最後にグループ発表を行いました。納得のいくプレゼンができたグループもあれば、時間がなく悔しがっているグループもいましたが、どのグループもとてもいい経験になったのではないかと思います。

自己研鑽セミナーが終わると新入生達は自由時間となり、大浴場でゆっくりしたり、部屋で話を

したりしていたようです。午前のアイスブレイキングや自己研鑽セミナーの効果で、夕食では、教員の先生達と打ち解けて話しができたようです(写真4、5)。夕食後は、教員も含めての懇談を行いました。これからの大学生活などについて、教員の先生や学生アシスタントからアドバイスももらったりと有意義な時間が過ごせたようです。

4月8日(日)

2日目の学生ガイダンスでは、クラス幹事選出などが行われました。次に行われた全体ガイダンスⅡでは、学生支援・セクハラ相談についてのお話や、学務委員長、臨床実習実施委員会委員長よりこれから始まる学生生活についての注意点などについて説明がありました。

その後、瀬尾教授によるBLS (Basic Life

Support) 講習会が行われました。初めて講習を受ける学生もいましたが、動画を使っただけの丁寧な説明をはじめにさせていただきましたので、理解しやすかったのではないかと思います。その後、マネキンを使って人工呼吸、心臓マッサージやAED(自動体外式除細動器)の使用を実際に行いました(写真6)。

BLS講習が終わると閉会式を行いました。無事に合宿が終了し、新入生は送迎バスに乗り帰途につきました。なお、2018年9月20日で今回会場となったメイワサンピアが閉館との発表があり、来年度は他の場所での新入生合宿研修となります。学生生活の最初の大きなイベントとして、新入生同士の結束が深まる機会ですので、今後も続けていって欲しいと思います。以上、簡単ですが今年度の新入生合宿研修の報告とさせていただきます。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

歯学部生の今

歯学科 2年 菅 沼 雄 大

「歯学部生の今」ということで、今年度になって変わったことについて2つ書こうと思います。

1つは学習環境と学習内容の変化です。2年生へ進級して春から旭町キャンパスで学習することになりました。1年生の時は五十嵐キャンパスで学習し、教室も授業ごとにばらばらでしたが、旭町キャンパスでは学年ごとに教室が決まっており、同期と話す機会が増えました。去年までは全員が一緒に取っている授業が少なかったため、同期内でも話すことが少ない人もいましたが、今年から教室内に全員がいるため自然と話す機会も増えたと思います。また今まで頻繁に話していた人の新たな一面も見ることができ、今後も仲を深めていきたいと思います。また旭町キャンパスでの授業になり、授業の内容も専門性が少し高くなりました。1年の時は授業を自分で選択していたため、必修の授業だけでなく自分が受けたい授業や文系科目の授業も多く取れました。2年生になってからは人の身体に関することが多くなり、徐々に専門性が高くなっているのを感じます。自分は高校の時に生物の授業を受けていたのもあり、ある程度は知っているつもりでしたが、やはりすべてをカバーできているわけではないので頑張らなければならないと思いました。今はまだ口腔内や歯について詳しく勉強しているわけではないですが、国試に直接出る内容でもあるのでしっかり勉

強したいと思います。

2つ目は部活についてです。学年が上がりと、まだ2年ではあるものの部活の運営をする立場に徐々になってきました。高校までとは異なり、大学の部活では自分たちで日程の調整や予算の管理をしなければならず、しっかりと管理しなければ部活全体の運営にかかわることばかりなので、上の学年になるにつれて部活全体を見て活動しなければならないと思いました。また部活の顧問の先生方へ連絡する際の礼儀も学ばなければならないと感じました。電子メールで先生方とやり取りする際の書き方や、お話しする際の態度にも当たり前のことではありますが、気を付けなければなりません。そういった運営や礼儀を知らなければならないというのは、自分が社会人に近づいている証拠であり当たり前身にしているべきものであるので、歯学部の先生方と接する機会が増えたからこそ今後さらに礼儀等が必要だと思います。

まだ自分たちは2年生に進級したばかりで口腔内や歯に詳しいわけではないですが、国試に合格するためにも今から頑張ろうと思います。2年次はテストが多く、1つ1つが重いので毎回の授業を大切に、いい点が取れるよう頑張りたいです。また部活でも徐々に自分たちが中心となっていくので、後輩の見本にもなれるようにも勉強と部活の両立を大切にしたいと思います。

2年生の今

歯学科2年 小林 雅

わたしたち2年生はこの春無事に五十嵐キャンパスから旭町キャンパスへと移ることができました。五十嵐キャンパスでの1年間は、教養科目や他学部向けの講義を取りながら、部活やバイト、遊びなどそれぞれがやりたいことに時間を費やし、あっという間に終わってしまいました。そして4月からは新たな環境であることに加え、学年に新しい仲間が増え、自然と気持ちも入れ替わり充実した日々を過ごしています。

キャンパスが変わり、この4月からは様々な変化があります。なかでも旭町キャンパスにきて一番の変化はやはり講義の内容です。講義で学ぶ内容が教養科目から専門科目に変わり、昨年に比べると講義の時間も増え、加えて予習復習のためにも勉強に割く時間が大きく増えました。基礎科目とはいえ、歯科の専門性が高くなり、はじめは理解すべきこと、覚えるべきことの多さに驚きました。しかし、講義の中で先生方から、学年が上がってから受けるCBTや国試にも出題されることや、臨床とどのように関連しているのかということを知ると気持ちが引き締められ、2年生の今から、しっかり積み上げていかなければならないと感じています。そのような中で、日々の授業後や試験前の休み時間・放課後には、それぞれわからないところを教えあったり、問題を出しあったりといった姿が多くみられ、意識の高い仲間たちに刺激をもらうことができます。加えて、部活などで交流のある先輩方に、試験の形式や勉強の仕方など、多くのアドバイスをいただいて、何とかこれまでの3か月を乗り切ることができました。

しかしながら、私たちはまだまだ歯学部生として専門科目を学び始めたばかりで、これからも身に付けるべきことはたくさんあります。いまでも試験勉強やレポートに追われて逃げ出したくなることもあります。学年が上がれば上がるほど勉強や実習、部活の運営など忙しくなると聞きます。それでも、大変そうな様子を表に出さず、やるべきことをしっかりとこなして何事にも意欲的に取り組む先輩方の姿を見ると、改めて先輩方の偉大さを実感しますし、自分もそうなりたいと思います。

また、この4月からの変化に後輩ができたということがあります。昨年1年間は、頼りになる先輩方に甘えっぱなしでしたが、今年は後輩たちが見習おうと思えるような姿を見せられるように、そして昨年先輩方から学んだことを伝えていけたらと思います。

最後に、これからも同学年の仲間たちと助け合いながら、よい歯科医師となるべく、勉強にも課外活動にも励みながら、楽しんでいきたいと思えます。



歯学部生の今

歯学科3年 坂田政貴

歯学科3年生の坂田政貴です。僕たち歯学科52期はこの春、新しい仲間を加えて3年生へと無事に進級することが出来ました。3年生も早いもので、本日4回目の口頭試問を終えて、長かった人体解剖学実習も残すところあと一回となりました。昨年白衣を着て、解剖室へ向かう先輩を目の当たりにして、不安と同時に尊敬の念を抱いていたことが思い出されます。

前期で最も印象に残っていることとして、例年先輩方も挙げられているように人体解剖学実習が挙げられます。実際に御献体を前にしていくと、昨年2次元的であったものが複雑に絡み合い、組み合わさり3次元的に構造をなしていることに驚きました。そして当然のことながらその中には、個体差などの差異が存在しており、暗記に頼った知識だけでは通用しないことを痛感しました。もちろん知識を持つことは重要ですが、それを如何に目の前にある事象や、今まで学んできたことと結びつけていくのが重要であるかを学びました。

また、数年前まで僕は看護師として勤務していました。当然のことながら、当時は入院されている方の治療やQOLの向上を目的に看護業務を行っていましたが、中には亡くなられる方も少なくなく、一晩で何人も看取ることもありました。とてもやりがいがある一方で、死をとても間近に感じる職業でもありました。そのため人体解剖学実習を通して、久方ぶりに人の死と向き合うこととなり、とても身が引き締まる思いがしました。入学試験の際に「医療の限界は患者が死んでしまうことである。」と面接官だった宮崎先生が仰っていたことが思い出されました。個人的には人体解剖学実習を通して、人の死や御献体となることを発意された方々の尊厳などが最も印象的であり、今後医療人として真摯に人と接していかなく

てはならないと自覚させられました。

3年生となり人体解剖学実習と同時に、「歯科〇〇」と「歯科」を冠する授業が増えてきました。昨年度までと異なり、どんどん専門的な科目が増え内容の濃さも一段と増してきております。それに従い、一步ずつですが歯科医師に近づいているように思え、嬉しくもあります。早期臨床実習Ⅱでも、1年次の実習の時よりも少しずつですが分かるが増えてきました。

ところで、多忙を極める中であっても、なんだかんだやってこられているのは周りの環境に恵まれたからだと感じさせられます。家族は言わずもがなののですが、特に同じ状況の中で一緒に頑張ってくれている友達の影響が大きいです。今年度も既に数回の試験が実施されているのですが、その度に深夜までファミレスに集まり夜な夜な勉強したりと、一人では決して上手くいかない事も、周りの人に教えてもらったりと助けをもらいながらなんとかやってきています。僕たち52期はその点はとても上手く機能しているように思えます。半年も経てば学生生活も折り返しに差し掛かります。学年が上がっていても、みんなで楽しく充実した学生生活が送れるよう、感謝の気持ちを忘れずに日々を過ごしていきたいです。



3年生の今

歯学科3年 山田果歩

憧れの旭町キャンパスに来てから早一年、気が付けば3年生になっていた。先輩に「解剖頑張ってくださいっ！」なんてのんきなことを言っていたところが懐かしい。この原稿を書いている今、通りかかった後輩に言われた。「先輩、解剖頑張ってくださいっ！」

そうだ、解剖だ。私たち3年生の生活は解剖学実習を中心に回っていると言っても過言ではない。今は、実習の終わりが近づいてきた7月あたまであるが、4月・5月は中々ハードであった。慣れない作業と想像以上の力仕事に皆疲労困憊といった状態で、手元はペンホルダーのまま固まっていた。しかし、ひとたび実習が始まれば皆真剣そのもの、目をかっぴらいてひたすらにピンセットを動かしていた。某医療ドラマの女医はどうしてこんなにも目を見開いて手術をしているのか疑問を抱いていたが、なるほど、自然とそうなるらしい。徐々に実習にも慣れてきた6月、実習後に班のメンバーで晩ご飯を食べに行くことが恒例となった班もある。実習の方はいよいよ頭頸部に差し掛かった。それはそれは複雑である。そんな時には、メンバー同士のコミュニケーションが非常に重要だと感じる。各々が、予習してきたことや実習中に得た知識をいかに共有できるか、各班で試行錯誤しながら口頭試問を乗り切ろうとする様子が見られる。我が8班の様子を紹介すると、担当個所の剖出を終えた者が「○○を説明しま

す！」と一声かければメンバー全員が手を止め、実習書片手に頭を突き合わせて確認している。不思議なことに、こうして皆で確認すると1人で勉強しているときの何倍も頭に残り、理解が深まるのである。また、私の個人的な感想ではあるが、表情筋の研究をされている医学部の大学院の方のご指導の下、表情筋の剖出を行ったのが大変印象に残っている。表情筋の付き方は人それぞれで、一人一人笑顔の作り方が異なる理由が良く分かった。この人はどういう笑顔だったのか、想像しながら解剖をしているとその方はおっしゃっていて、そうした想いを持って研究をされている姿が素敵だと感じた。

こうした経験を経て、7月に入った。もうすぐこの実習も終わろうとしている。思い返せば実習が始まる前は大変ドキドキしていたが、ここまであっという間であった。この原稿依頼をいただき、4月からの解剖学実習を振り返ってみて、本当に貴重な経験をさせていただいているということに改めて実感している。実習での経験や学びをこれから先、大切にしていきたい。最後になるが、我が8班ののんびりペースに合わせて、遅くまでお付き合いいただいた女神のような先生をはじめ、本実習でお世話になったすべての先生方にこの場をお借りしてお礼を申し上げたい。本当に、ありがとうございました。

4年生の今

歯学科4年 齋藤瑠郁

こんにちは。歯学科4年齋藤瑠郁です。自宅から大学まで約45分間、部活代わりの自転車登校も4年目、もう当たり前のことになりました。周りの友人たちは3年後期のテスト続きの1ヶ月の方が辛かったと言いますが、私にとっては、皆で集まってあれこれ議論しながら勉強したあの時よりも、週2日とはいえ一日中実習室で過ごす日がある今の方がずっと大変だと感じます。自分はこんな調子で今後やっていけるのか、と実習の度に不安になります。不安や大変さを表すかのように、立て続けに風邪をひき、肌荒れは治らないまま。高田のお花見も、GW恒例だった高校時代の部活の手伝いも、ムロツヨシ出演の映画も、話す時点から興奮する焼肉も、気づけばここまで全然行くことができいていません。唯一、色々な美容室を巡っては、ロングが見たいという友人の意見に逆らってショートヘアをさらに短くしているくらいでしょうか。

さて、本当は面白いページを作りたいと考えていましたが、ここからは少し真面目に、「歯学部生の今」を書きます。現在私たちは月曜日に歯冠修復学、水曜日に有床義歯学の実習を行っています。楽しいというより大変だと感じます。体力には多少自信があるので体力面ではなく精神面で、です。去年の方が、と言う周囲からは不思議がられますが、とにかく言えることは実習が苦手だということです。実習中コツを見つけるのが人より遅く、また、コツを自分のモノにするのも遅いと感じます。先生方が用意してくださるデモ動画を見たりテキストを読んだりして、その日の工程や注意事項を予習してから実習に臨むのは当然です。しかしいざ実習が始まると、自分の不器用さや効率の悪さが、予習で頭に入れた知識や理解の量をはるかに越えていることに落胆します。また、去年より増えたグループ学習も、成功も失敗も自分

だけの話ではなくなる分個人学習より大変だと感じます。グループ学習では互いに知識を共有し深められるため、とても有意義な時間になるはずですが、すでに複数のテーマで行なってきましたが、自分の知識不足から、有意義な時間かと言えば譲れないところがあります。

ここまでの話を含め残念ながら今のところ色々な事がうまくいっているとは言えません。それでも、そうだからこそ、頑張ろうと思えます。今までも何かと人よりうまくいかないことが多かったおかげか、私は自分のことを諦めが悪く努力は得意だと思っています。また、それを認めてくれる人も周囲にたくさんいると思っています。尊敬している先生がよく仰る「皆さん必ずできるようになります」を信じて決して諦めず努力していきます。

最後に、このページを読んでも実習の様子からもクラスの皆が分かっている通り私は全く器用ではありません。ぜひたくさんのアドバイスをください。代わりに、ではありませんが、自分の得意な分野を見つけて、助けられるばかりではなくクラスの役に立てるよう努力します。大きな事件も起きない平凡な、けれど毎日一緒に過ごすのが楽しい、そんな歯学科4年生が大好きです。これからもよろしくお願いします。立派な歯科医師になれるようお互いに高め合っていきましょう。



歯学部生の今

歯学科4年 渡部 清人

早いもので、我々51期生が新潟大学歯学部に入学してから3年半が経ちました。学年は4年生となり、1年生のころのようなフレッシュで、希望に満ち溢れていた自分は、もういません。毎日、勉強やアルバイトに励み、また、部活動等では幹部学年として部をまとめなければならず、皆、心身ともに疲弊し、彼らの目に輝きはありません。そんな慌ただしい今日この頃です。

そんな中、本格的に実習も始まったことで、これまでの座学のように受動的なものとは異なり、自ら考えながら能動的に考え、行動する機会が増えました。実習と座学の一番の違いは予習の重要性という点にあると思います。予習は、座学の講義においても非常に重要であることは間違いありません。しかしながら、実習においては予習ができていないとその日の実習で何をしたいか、またその行為に何の意味があるのかということが全く分かりません。講義時間という決められた時間の中で、決められた量の作業を終わらせるためには、予習が不可欠なのです。講義に関しても、4年になり各科目の専門性がこれまで以上に高まりました。より臨床を意識したものとなり、これまでの知識を詰め込むだけでよかった学習と同様に受け身の姿勢で授業を受けていても根本的な理解にはつながらず、授業で出てきた疑問点を見出し、自分なりに調べることはもちろん、レジュメや教科書に書いてある事実に関して、なぜその事象が成り立つのかということについて、今まで蓄えてきた知識で説明できなくては根本的にわかっているとは言えません。これまで学んできた解剖学や生理学など、歯と直接的に関係ないと思っていた基礎的な知識も、知らなければ授業を

完全に理解することは難しく、3年生までに学んできた科目の重要性を今更になって痛感しています。そのおかげで授業の復習に割く時間は増え、睡眠時間は減る一方です。皆、眠い目をこすりながら授業を受けています。

さて、今年もそろそろオールデンタルの時期がやってきました。各部活、デンタルに向けて練習を頑張っています。私はバレーボール部の一員として7月31日から鹿児島県に行ってきます。九州地方に赴くこと自体が初めてなので、バレーボール以外にも観光など楽しみがたくさんです。今年は4年生ということで、各部活口腔生命福祉学科の同級生が引退します。バレー部には僕を含め、4年生が3名いますが、僕以外の二人は口腔生命福祉学科なので、二人は今年で引退しています。引退してしまう2人と臨む最後のデンタルを思い切り楽しめたいと思います。

このように、我々は、勉強や部活動などで忙しくも充実した毎日を、素晴らしい仲間たちとともに、支えあいながら戦い抜いています。

毎日一歩ずつ歯科医師に近づいていることを自覚し、学業に精進したいと思います。



5年生の今

歯学科5年 山本 静香

はじめまして。歯学科5年生の山本静香です。「歯学部生の今」がテーマということで、今回は5年生のカリキュラムについて紹介させていただきます。

編入学から早くも2年が経ち、5年生の今、実習やCBTの対策などに追われ、気がついたら3ヶ月が過ぎていました。新潟大学では4年生までに大方の臨床科目の講義が終わり、5年生のカリキュラムではそれぞれの知識を統合し体系化を行うことが主眼に置かれています。それぞれ特徴的な科目について紹介させていただきたいと思います。

まずPBLについてです。クラスを6グループに分け、各グループごとにシナリオの症例について討論し、検査結果や所見から仮説を立て、学習課題を設定しその課題について自主学習をして再度討論といった流れです。この科目の面白いところは、各グループの討論の方向性や内容によって、仮説・学習課題が変わるということです。グ

ループで話し合うことで、理解や知識が足りない部分が明瞭となり、その部分について学習をすることで、各分野の知識を集積し患者さんの訴えや問題を分析して、解決に導いていく能力が身についていると実感しています。

次にポリクリについてです。班ごとに各診療科を周り、その診療科独自の実習を行なっています。このポリクリの最も大きな特徴は、相互実習を行うことです。これまで模型上で行なっていたこと、この先臨床で行うことをお互いの生身の身体で練習していきます。伝達麻酔、浸潤麻酔、採血など、痛みや侵襲を伴うことも相互に行なっていきます。そのため、これまでとは比べものにならないほどの緊張感があり、予習にも力が入ります。実際に友人の口腔内や身体に触れてみると、模型実習では分からなかった、唾液、舌の動き、体動、痛み、言葉遣いや目を見て話すといった接し方、どのくらいの時間口を開けていられるかを感じ学ぶことができます。また自分がされる側に



なると、患者さんの気持ちがとてもよくわかります。この経験は確実に臨床実習に活かされていくと感じています。

5年生の夏には、大きな関門であるCBT、OSCEが控えています。基礎科目から臨床科目まで全ての科目が範囲になっているので、3年生の頃の授業ノートを見返す機会も増えていますが、そこには《CBTに出やすい》などのメモがありました。当時は意識していませんでしたが、先生方はCBTや国家試験を見据え指導してくださっていたということを感じ、大変有り難く思いました。4年生以下の皆さんは、まだまだ先のこと、と思っているかもしれませんが、今自分たちがしている勉強は必ずCBTや国家試験、その先

の臨床に繋がっているということ意識し学習し、一つ一つの授業を大事にしてもらえたらと思います。

また、学年担任である摂食嚥下リハビリテーション学分野の先生が中心となり、CBTへ向けた事前指導も始まりました。私たちの班では定期的に面談を行い、進捗状況の確認などを行っており、とてもいい刺激になっています。国試の問題の解説と解答の導き方なども指導していただき、CBTだけでなくその先の国家試験にむけてモチベーションを高めています。CBTに向けて個々の勉強はもちろんのこと、クラスで一丸となって取り組み、全員でCBTに合格し、秋から始まる臨床実習に臨みたいと思います。



5年生の今

歯学科5年 園 辺 悠

歯科の知識をほとんど持たずに入学してからはや5年。想像していたキャンパスライフの偶像是すっかり消え失せ、日々勉強と部活の毎日です。いまではほとんどの臨床系科目の講義も終え、半年後には病院に立って歯科治療を行うという立場になりました。

5年生の前期では総合的な学習や実習がほとんどを占めるのですが、そのなかでも大きなウエイトを占めているのは総合模型実習とポリクリ（臨床予備実習）だと思います。

総合模型実習では様々な疾患を想定した顎模型を用いて半年間かけた治療を行います。今までの実習では個々の歯に対しての治療しか意識してこなかったものが、治療手順や治療方法、それに関しなければいけない時間といった、実際の臨床では必ずぶつかるであろう問題を意識しなければいけなくなり、それを踏まえた実習を行わなければなりません。手際の悪さのせいか期間内に想定した治療を終わらせることができるか不安ですが、臨床実習に出る前の最後の練習だと気を引き締めて実習に臨みたいと思います。

ポリクリでは、グループごとに各診療科を回り、主に相互実習などを行います。相互実習の際は、スケーリングひとつ取っても「痛くないだろうか」「なにか傷をつけてしまってはいないだろうか」と緊張し、いままでいかにマネキンに対して雑に扱ってきたかを痛感させられています。また実際に生身の人間に触ることで清潔・不潔を常に意識するようになりました。近年特に衛生について社会問題になっているので意識した実習を行なっていきたいです。

また、ポリクリの最後にはCBTとOSCEが待っています。今まで遊び呆けていた土日や放課後が一変し、友人とともに図書館に籠る日常になってしまいました。今までの講義を総復習することに

なるのですが、意外と記憶に残っているもの、学習した記憶はあるものの全く覚えていなかったものなどを再発見することができ、また友人と勉強することでお互いが問題を出し合い、分からないところを教えあいとても有意義な学習ができています。友人と勉強しているといつのまにかスマホアプリを起動し、勉強時間が削られてしまうのが玉に瑕ですが…(笑)当時は教科書上での知識でまいちぼんやりとしていたイメージも、実習を経たことで納得や理解できるものが多くあり、より深い学習ができていていると感じています。

私たちの学年はなぜか様々に先生方に心配される学年のようです。そんな下馬評を覆し、半年後には最高の学年だったと言われるよう、一丸となって目の前に迫るCBTやOSCEを突破していきたいと思います。

入学時にはとても長い時間を感じられた6年間の大学生活も3分の2以上を終え、CBT、OSCE、臨床実習や国家試験を残すのみとなりました。のこり少ない学生生活を謳歌しつつも、歯科医師になるための知識や技能を習得するため、一つ一つの実習や経験を大切に日々精進していきたいと思います。



ポリクリ登院式にて

歯学部生の今

歯学科6年 川 勝 あかり

新潟での6度目の夏を迎えます。早いもので、気が付けば最高学年となり、卒業まで残り半年に迫っています。

私たちの日々の生活は、臨床実習を中心に回っています。朝は8時ごろに登校し、9時からお昼を挟み16時までは診療、または係の仕事、口腔外科などの専門診療科での分散実習を行います。その後は技工室で診療前のレポート作成や技工物製作などを行い、20時近くまで学校にいることも少なくありません。本当にこの治療でよいのか、もっと良い方法があるのではないかと…知識も技術も不足する中で治療方針を考え、当日の診療の予習をし、診療後反省をするといった生活で日々が過ぎていきます。今の担当の患者さんを見るようになって早くも10ヶ月が経とうとしています。それぞれの患者の経過を追っていく中で、生活習慣や性格、口腔内の状態などによってTBI一つとってもどの様に指導すれば良いか一人一人異なることを実感しています。たった一年間ではありますが、患者さんの生活背景も踏まえて口腔内全体の経過を追うことができるのはとても良い機会だと感じています。臨床実習は患者さんを担当させていただくことから責任が重く悩むことばかりですが、やはり患者さんの嬉しそうな顔を見ることができたり、感謝の言葉を頂けるとやりがいを強く感じます。忙しい日々ではありますが、恵まれた環境で臨床実習を行え、充実した毎日を送っています。

一方で臨床実習中に不安なのは、国家試験の勉強とのバランスが上手く取れていないことです。勉強をしなければならないことは理解していますが、毎日の実習やレポートに追われているというのが正直なところではあります。私たちの学年は、クラスを5人ずつのグループに分けて学習グループを作成しています。私の班は週に1回ほど集まり、勉強会を開いています。班により取り組み方はそれ

ぞれですが、お互いの進展状況を確認する良い機会となっています。

6年目にして、日々の生活の中で同級生の存在がとても大きいことを実感しています。朝早くに技工室に行くとならぬと技工用バキュームの音が聞こえ、技工物を製作している人がいたり、難しい症例を担当し頭を悩ませている人がいたり、そういった同級生の姿に自分も頑張らないかという思いが強くなります。ここ最近は同級生同士で誰からともなく研修やその後の進路についてなどの話が多くなってきて、病院見学で欠席している人もちらほらと見受けられます。また学内でも各医局の説明会が毎週のように開かれており、卒業後のことが現実味を帯びてきました。それぞれ目指す道は異なりますが、各自がどのような歯科医師になりたいか目標を持ち始めています。6年間ともに過ごしてきた仲間と離れ離れになるのは寂しいですが、5年後10年後仲間たちの活躍を聞けることを楽しみにしています。

最後になりますが、この1年は学生最後の1年となります。実習に勉強に、将来への不安も多いですが、同期と過ごすことのできるこの1年間を悔いのないようにしていければと思います。残すところ、臨床実習は約2ヵ月、学生生活は約7ヵ月。初心を忘れずに一日一日精一杯勉強させていただきたいと思っています。



6年生の今

歯学科6年 宮城 一 真

平成が終わる最後の一年というこの機会に、私達も新潟大学の歯学部生として最後の一年となりました。5年生の秋から始まった臨床実習も、もう夏が明けると2ヶ月しかなく、昨年の秋に患者さんを目の前にドキドキしながら診療に立ったことが昨日のこのように思えるほど早く、また、懐かしくも思えます。新潟大学では1年間の臨床実習を通して、指導医の先生のもとに患者さんの診療に携わることができます。治療計画の立案から、診療、メンテナンスまですべて自分で考え、自分で行います。5年生までで学んできた講義や実習での知識をフル活用し、どのようにより良い診療をできるのか、患者さんのことを考えて診療ができるのか直接感じることができる貴重な時間です。患者さんが目の前におられるからこそ、先生方の目も基礎実習の時よりも厳しくなり、私達も緊張感を持って日々診療に臨んでいます。その臨床実習も昨年の10月に先輩から患者さんを引き継いでから、もう自分が次の学年へバトンを渡す時になりました。

3月にSVプログラムという短期留学に参加し、スウェーデンのマルメ大学とWHOに約2週間派遣していただきました。マルメ大学の学生実習と一緒に参加し、アシストを行うなどしました。新潟大学において日々臨床で学んでいるからこそ海外の学生と遜色なくアシスタントとしての仕事を行うことができました。いかに新潟大学での実習が充実しているか実感することができました。

後輩へバトンを渡した後は、春に待ち構える国

家試験に向けてひたすら勉強に明け暮れる日々です。合格するとようやく歯科医師としてのスタート地点に立つこととなります。今までは先生の下で行ってきた患者さんへの治療や、口腔内疾患の予防など、すべての仕事をこれからは、自分で考えて行うことになり、大きな責任感とともにやり甲斐も生まれると思います。病院の診療ユニットに入ると、いつも背筋が伸びます。自分が中途半端な心構えで診療をすることは、何よりも患者さんに対して失礼です。それは患者さんの為の医療行為だからです。自分の診療に時間を割いてまで来てくださる患者さんの協力があってこそ、成長させていただいているのだと常に感じます。

その重みと、責任と、慕ってくださる患者さんの思いに応えるためにも、今の時間を充実したものにし、卒業まで駆け抜けたいと思います。卒業までの残り少ない時間を仲間たちと一緒に過ごし、励まし合いながらクラス全員で国家試験に合格ができるよう頑張ります。



歯学部生の今

口腔生命福祉学科2年 山下綾菜

口腔生命福祉学科2年生として旭町キャンパスに通い約3ヶ月が経ち、1年生のころには週に1回しか通うことのなかった歯学部の構内にも慣れてきました。一年生の頃は自由に使える時間がとても多く正直ゆるゆるとした生活を送っていましたが、二年生になり毎回課題やレポートが課され一年生の頃とは比べ物にならないくらい生活が忙しくなりました。しかし、歯科の専門的な講義が始まって初めて知ることばかりの日々を送る中で歯学部生としての自覚がより身に付き、私生活が充実するようになりました。最近では実習前の実習器具の確認を行いました。スケーラーやプローブ、デンタルミラーなど今までは歯科医院でしか見たことのない器具を自分専用のもので持つことがとても嬉しく、後期からの早期臨床実習へのモチベーションが上がり楽しみになりました。

他にも、ワックス棒から歯の形へと型取っていくカービングの実習を行い、その実習では歯の形態的な特徴について学ぶことができました。今まで歯はほとんど同じ形なのだろうと思っていましたが、しっかりと観察することでその歯が上下左

右どこに位置しているのかを判断することができくらいそれぞれの歯に特徴があり、役割ごとに形が変わっているのが興味深いと感じました。

また、私は歯学部バレーボール部にマネージャーとして所属しています。マネージャーの仕事は基本的に球出しと球拾いしかしませんが、プレイヤーのみんなに混ざってウォーミングアップやパスの練習を一緒にさせてもらうなど部員みんなで楽しく活動しています。バレー部は部員数が少ないのですが少ないからこそ先輩後輩関係なく活動でき雰囲気の良い部活動ができています。また先輩方から授業やテストについてのアドバイスをいただくことができ事前にすべきことや実習の心構えをすることができ縦の繋がりの大切さを感じています。

先日、二年生になって初の口腔生命福祉学科の親睦会を開きました。一年の頃にはあまり話したことがなかった人とも話す機会が増え、今まで知らない人柄を知ることができ口腔みんなの仲がより深まったと感じました。これから約三年間一緒に学校生活を歩む仲間たちなので切磋琢磨してともに励んでいきたいです。



歯学部生の今

口腔生命福祉学科3年 白倉未唯

私は今年の春で歯学部に入學してから2年がたち3年生になりました。3年生になり、変わったことは歯科の実習が増えたことです。2年生の頃は、講義やPBLが中心で相互実習が少しあるだけでした。しかし、3年生になると相互実習の回数が増え、実習が中心となりました。また、春に行った幼稚園での歯科保健指導や、夏に行った病院実習、そして冬に控えている保健センターでの実習など、学生同士での実習だけでなく、実際に人と関わる実習が増えたと感じています。特に、幼稚園での実習はとても印象に残っています。この実習では、みんなで園児に対しての劇や歯磨き指導の内容を考えました。園児がどこまで理解し、どうやったら楽しく取り組んでくれるのかを考え、指導をすることはとても難しく感じました。しかし、みんなで何度も練習し、本番で園児が楽しそうに劇を見てくれたり、「きれいに磨けたよ。」と自分の歯を見せてくれた時、とても大きな達成感を感じ、自分たちの指導が、人の行動に良い影響を与えることが出来ることを実感し、その喜びを感じる事が出来たと思います。幼稚園実習を通し、不安はたくさんありますが、実際に臨床に出て患者さんと関わる事が楽しみになりました。

また、3年生になり大きく変わったことは、社会福祉士の資格を取るための福祉に関する科目が始まったことです。福祉に関する講義やPBLは年金や児童手当、生活保護など複雑な制度や支援などが多く、またそれらを覚えなければならないのでとても難しく、大変だなと毎日感じています。しかし、2年生までは歯科にしか興味がありませんでしたが、春に行った特別養護老人ホームや児童相談所での実習、授業中に見るビデオなど

を通し、自分自身の知識の少なさや、知っていたつもりでいた問題の複雑さや重要性を認識するとともに、福祉にも興味を抱くようになりました。また以前と比べ、様々な問題に対する考え方が変化したと感じ、より身近な問題と捉えることが出来るようになったと感じています。最近では講義に関しては、難しく感じることは変わりませんが、興味を持ち、身近な問題として捉えることで、講義の中に少しずつ面白さを感じる事が出来るようになってきました。

3年生になり、歯科や福祉の実習や、国家試験のこと、将来自分がどこでどのように働くかなど様々な不安や悩みごとを感じる事が増えました。先生方に支えられながら、病院や福祉の実習に備えて、勉強をし、実際に行動に移す事が出来る知識を身につけなければならないと感じています。また勉強を頑張りながら、編入生が加わった愉快的な25人で残りの学校生活1日1日を楽しみながら充実した毎日を過ごしていきたいと思います。



歯学部生の今

口腔生命福祉学科4年 増澤美有

これまでは教室の窓から眺めているだけであった外来棟へと続く廊下を歩いていると、とても不思議な気持ちになります。今年度の初頭までは、ユニフォームを着て患者さんを目の前にしている自分の姿を想像することができなかったからです。4年次から本格的に始まる病院実習への不安を抱きつつも、まだ先のことであるとばかり考えていました。そんな私も気が付けばもう4年次を迎えていました。外来棟へと向かう途中の廊下を、「今日は何なことをするのだろう」と考えながら歩き、不安で心がいっぱいになっていると、あっという間に外来棟の入り口がみえてきます。

私たちは現在、1週間のうちの4日間を、臨床実習として外来棟で様々なことを学んでいます。これまでの2年間で学んだ知識や技術を用いて、診療のアシストや患者さんへの保健指導、そして、実際に自分が術者となって予防処置を行うこともあります。また、このような実習を終えると、ポートフォリオを作成しています。このポートフォリオでは、その日の診療の内容や、その際に自分ができたことや、逆にできなかったことをまとめます。すると、毎日の実習を終える度に、自分自身の課題がたくさん見えてきます。その度に、自分の知識不足や技術不足を痛感し、それと同時に、その課題を乗り越えなければいけないという気持ちが奮い立たされます。しかし、その課題を解決しようとする、自分の目の前には、学習して身に付けるべき知識や技術が山積みであり、そんな現状にまだまだ戸惑う毎日です。3年

次にも、臨床実習として、外来棟へ行き、見学をさせていただいていました。しかし、4年次のこのような経験を通し、半年前の自分が、初心者であることを前面に出して、その当時の4年生に頼り切っていたことを振り返ると、どれほど自分が甘い考えをしていたのかということを実感しました。非常に反省をしています。

さて、その臨床実習の傍らでは、福祉実習が行われています。これがこの学科の4年次における大学生活のもう一つの特徴と言えます。この福祉実習は、ソーシャルワークが実施されている様々な施設において、1カ月間の実習を行い、ソーシャルワークの実際を学ぶことを目的として行われます。私は、福祉について学習するまでは、対象者をその時点の姿でしか捉えようとしていませんでした。ですが、対象者一人ひとりがどのような生活歴を持ち、その経験から、どのようなことを大切に、価値観を持っているのかというような、その人のバックグラウンドを知ることのソーシャルワークにおける重要性を学びました。そして、現在行われている福祉実習において、これを重要とする理由を体験的に学んでいます。

最後になりますが、現在は、臨床や現場での実習に追われる毎日で、その中では、上手くいくことよりも、そうではないことの方が圧倒的に多く、自分の未熟さを日々感じています。ですが、自分を支えてくださるたくさんの方々への感謝の気持ちを忘れずに、日々成長していけるように、有意義な学生生活を送りたいと思います。

● 歯学部運動会を終えて ●

歯学科 5年 柴田 瑛治

5月26日（土曜日）、旭町グラウンドにて運動会を開催致しました。当日は天気にも恵まれ、晴天の中気持ちよく運動会を行うことができました。沢山の学生や先生、さらには学務の方々にまでお越しいただき、運動会は大盛り上がりでした。

今回は慣例となっていた実行委員である5年生を優勝とする制度を自ら廃止にし、厳格な採点の元に優勝を決定するようにしました。それにより、各学年一位を目指し、一層白熱した運動会となりました。

開会式では5年生を含む男子バレー部全員が女子部員の協力のもと、バブリーメイクとミニスカ女装を施し登場。ダンス部と見間違ふほどのキレイのバブリーダンスを披露し、大いに盛り上がる開会式となりました。最後のサビでは1年生の後藤崇くんが海パン一枚になり会場を沸かせてくれました。まさか5年生になってまでミニスカの女装をして、大衆の面前で踊るとは思いませんでしたが練習を含め良い思い出です。

運動会では玉入れや障害物競争などの7種目がありますが、私たちは障害物競争に向けある計画を実行しました。その計画とは5年生の森川雄太を改造し、人型戦車を作るというものです。運動会前夜、戦車は無事完成しました。当日、後は彼がゴールテープを切るだけ……そう思っていたの

ですがそれはかないませんでした。理由は簡単です。第一の障害である飴探し（小麦粉の中から口で飴を探すとというもの）で砲塔が邪魔をし、飴を食べることができなかったからです。（写真2）来年は改良を加え、確実に1位を狙えるような出来にしたいと思います。

運動会で一番の盛り上がりを見せるのはなんといっても学年対抗のリレーです。この学年対抗リレーに向け、5年生は血の滲むような努力をし、さらには学務が誇るスポーツマンである櫻井さんを加えることにより、優勝をより強固なものとなりました。結果は明白、櫻井さんの助けにより半周以上差をつけて5年生が優勝しました。リレーに出た学生たちでとった集合写真、櫻井さんの笑顔が眩しいです。（写真3）

結果、総合では6年生に惜しくも敗れてしまい2位でしたが、立て看板賞と敢闘賞をいただくことができました。来年は優勝できるようさらに努力したいと思います。

全学年で協力して運動会を無事開催出来、最高の思い出となりました。運動会を開催するにあたり協力してくださった先生方や学務の方々、学生の皆さん、そして共に運動会の実行を手伝ってくれた5年生の実行委員の皆へ感謝の意を表したいと思います。



写真 1



写真 2



写真 3



歯と口の健康フェアを終えて

歯学科6年 郡 司 敏 宏

6月10日（日）にイオンモール新潟南にて新潟市・新潟市歯科医師会主催の「歯と口の健康フェア」が開催されました。参加団体は主催団体に加え、県歯科衛生士会、市歯科技工士会、県栄養士会新潟支部、市薬剤師会、日本歯科大学新潟生命歯学部、新潟大学歯学部で、本学からは大島邦子先生（小児歯科学分野）と歯学科6年生5名が参加しました。

今年のテーマは『健口（けんこう）になろう！健康のために!!』でした。市民の方々に歯科医療を身近に感じていただき、自身やご家族の口腔内の健康と全身の健康について考えていただけるよう、各団体がそれぞれブースを出し合い、様々な企画を実施しました。

本学の歯学科6年生は、総合案内およびアンケート調査、歯に関するクイズ、口臭測定と口臭相談、フェア参加者募集のための呼び込みを担当しました。クイズコーナーは学生が皆で考えた〇×クイズを持ち寄り、参加者に答えていただきながら解説するというものでした。今回、僕は主にクイズコーナーと参加者募集を担当しました。

今回のフェアの参加者は、会場の関係でファミリー層が多く、子どもからその祖父母の世代まで幅広い年齢層の方々がいらっしゃいました。そのため、クイズの問題も易しいものから少し難しいものまでさまざま用意し、その解答を通して健康について一緒に考えていきました。クイズを出すだけでなくその解説もするのですが、様々な年齢の方がいるので、特に子どもたちにクイズを出すときは、どんな言葉で伝えればわかってもらえるか、普段の臨床実習とはまた違った形で、使う言葉を選ぶ必要がありました。戸惑うこともありま

したが、非常に勉強になる機会でした。参加者の方々とクイズのやり取りは和気あいあいとしていて、楽しみながら口と全身の健康について考えていただくことができたのではないかと思います。

参加者の募集、呼び込みはただ道行く人たちに声をかけるだけでなく、トッキッキというキャラクターの着ぐるみを着て行うこともありました。そのような活動の甲斐があっただけでなく、多くの方に参加していただけただけでなく、参加はしなくても、フェア自体の存在を知ってもらい、コーナーの外にあるパネルや映像を見るなど、少しでも関心をもってもらうことにつながることでもできたと思います。声をかけてみると、ブラッシングの齲蝕予防効果についてのビデオを熱心に見てくださる方もいれば、娘さんの歯並びについて気にしている方もいました。また、口臭測定に興味を持たれる方もいました。その事実を通じて、市民の方々が歯科に対して抱いているニーズはそれぞれであることを僕は改めて知りました。また、患者さんのニーズに歯科医療が応えることができるということを知ってもらう為にも、今回のフェアは非常に意義深いものだと思います。

フェアを通じて、また参加者との交流を通じて、普段の実習では学べない、市民の方々が歯科にどのようなイメージを持ち、どのようなことを望んでいるのかについて、わずかながら知ることができました。また、普段お話しすることのない開業医の先生方や、歯科衛生士の方々、技工士の方々とお話しでき、自分の知らないことを学んだり、逆に知識不足を実感したり、また将来について考える機会をいただきました。この経験は、残りわずかとなってしまいましたが、臨床実習や、

その先にある実際の診療の現場で生きるものだと思います。今回、フェアに参加させていただいた

ことを感謝するとともに、今後もこのような活動を継続していただきたいと思います。



お子さんたちにクイズを出す筆者



トッキッキと筆者



本学からの参加者 5 名

茶道部「今、茶道部が熱い！」

歯学科4年 久保田 瑞 穂

新潟大学の江戸千家茶道部、それは、茶道を深く愛し、賑やかに活動し、大いにお茶会と飲み会を楽しむ部です。今回は、知られざる茶道部の実態をお伝えしたいと思います。

現在私たちは、歯学部8名、医学部13名、理学部1名の計22名で活動しています。歯学部ニュースのバックナンバーを見たところ、茶道部が寄稿した平成25年度号の部員数は10名だったようです。私が入部してから早3年、今ではなかなかの大所帯となりました。私たちは、毎週木曜日に約3時間、池原会館2階の和室で活動しています。

のんびりお抹茶を飲むだけだと思われがちな茶道部ですが、この3年間だけでも重大イベントが沢山ありました。最も大きな変化は、指導者の先生が変わったことです。部の創立者であり、長年にわたってご指導くださった澁谷后雪先生が昨年引退され、今年度から鈴木宗裕先生が引き継いでくださることになりました。なかなか後継の先生が見つからず、一時は廃部という言葉が頭をよぎる時期もありました。しかし、澁谷先生のご尽力と鈴木先生のご厚意により、廃部の危機を免れ、先日無事に春の開学記念茶会を終えることができました。

茶道部は、春と秋の学生茶会、医歯学祭でのお茶席という年3回の発表の場を軸に、東京のお茶会に参加したり、先生のお宅へお稽古に行ったりしながら、日々練習に励んでいます。お茶会ではただお抹茶を出すだけではなく、茶花を自分たちで入れたり、お菓子を選んで注文したりしています。また、茶道で使う道具決めや使用する部屋の下見など、お客様のことを第一に考え、入念な準備を行います。余談ですが、湯を入れたお釜はとても重く、女子は持ち上げられないほどです。茶道は、長時間の正座に耐えるという精神力に加

え、以外と体力も必要とされます。

また、昨年度は、部員達で笹団子作り体験に行きました。このように、茶道と離れた場面でも小さなイベントを開催しています。昔は、器作りや合宿まで行っていたそうなので、驚きです。

茶道部の1番の魅力は、自由な環境の中で極めたいことに没頭できる点だと思います。難しいお点前を勉強したり、着物の着付けを学んだり、手作りの和菓子を作って差し入れしたり等、興味のあることに集中できる環境が整っています。

茶道には、「湯気は最高の御馳走」という言葉があります。これは、釜から上り立つ湯気を見る



だけで、おいしいお抹茶が出されることが想像できるために言われ始めた言葉だそうです。(お抹茶は熱い湯で点てたものが最もおいしいと言われています)。現在の茶道部は、湯の温度も部員のやる気もまさに「熱い」、そんな活気あふれる部

となっています。50年以上続く部の伝統を受け継ぎながら、これからも部活動に精進してまいりたいと思います。この文章を通して茶道部に興味を持っていただけたならば幸いです。



軟式野球部「部活動手記」

歯学科4年 永島和裕

この度は、歯学部ニュースで私たち野球部の紹介を取り上げて頂けるということで、誠に光栄であります。ありがとうございます。以後、稚拙な文章となってしまうかもしれませんが最後まで読んでいただくと幸いです。

私たち野球部は、プレーヤー13人、マネージャー7人計20人の少数精鋭（たとえば聞こえはいいですね。）で活動しています。しかも約半数は初心者であり、部員の個性の強さを考えると、さながらルーキーズといったところでしょうか、はたまた、弱くても勝てますと言ったところでしょうか。

さて、他の部活動の方や先生方から、しばし言われるのですが、「あれ、野球って9人でやるスポーツだよな？部員少なくない？」「マネージャーさんで野球チーム作れそうだね」まったくもってその通りでありまして、返す言葉もございません。ですが、人数が少ないことで部員同士、先輩後輩の垣根無く会話ができ部活は和気藹々としています。

昨今、若者の野球離れが深刻化しております。それは、ここ新潟大学歯学部にも例外なく訪れています。先述した通り私たち野球部のプレーヤーのうち約半数は未経験者です。こんな状況を何とか打開したい。では、野球の楽しさについて少しばかり書いていきたいと思います。

野球はタウンボールを原点とし、日本では中馬庚がそれを命名したともいわれ…とここまでwiki風に書いてみましたが文章で野球の楽しさを知っていただくのは正直難しいです。ですので、まずは皆さん野球を見てください。そして次に野球を試してみてください。「野球って難しいよね？」そんなことはありません。日本人は完璧を求めすぎです。海外の人に日本語をしゃべれるか尋ねると

中八九Yesといい。「こんにちは。寿司。」など言います。日本人は対して英語を話せないと言います。野球は、完璧さを求めないスポーツです。10回中3回でもヒットを打てば大打者と言われる世界なのです。完璧を求めすぎる日本人にはこれほど心の余裕をもって、楽しくできるスポーツは無いと個人的には思います。その中に繊細な戦略があり、弱いと言われるチームでも強いチームに勝つこともある。また、誰かがホームランを打てば感動する。ピンチになれば応援する。人と人とのつながりをプレーしている人も、周りで見ている人も感じられるのが野球です。見ているすべての人が熱く、感動できるスポーツが野球です。

さて、言葉足らず、野球の楽しさが伝わったか分かりませんが、最後。私たちがこうして楽しく野球ができているのは、顧問である前田学部長をはじめとするOB・OGの先生方のご支援、さらに常に黄色い声援で精神的なことを含めて、多くの面においてプレーヤーを支えてくれるマネージャーさん方、また、部員同士の支え合い、野球をさせてくれる両親の支え。様々な方に支えられていることを忘れず、これからも楽しく野球をしていきたいです。



人件費管理のポイント制の導入について

新潟大学は教員人件費管理のため、ポイント制の導入を行いました。このポイント制は教授1人当たりの人件費を1,000、准教授807、講師739、助教624のポイントとして管理していくもので、各部局の教員ポイントを各学系（歯学部の場合、医歯学系）で管理し、本部から配分されたポイント数内で教員を採用していく方法です（病院教員は除く）。平成29年度は口腔生命科学系列の教員（4月からは歯学系列に名称変更：歯学部担当教員）の使用ポイント計は74,573ポイントでしたが、平成30年度の配分基礎ベースは69,852ポイント、これに学長裁量経費分（准教授2名+若手女性枠1名）が2,238ポイント、そして機能強化経費から基幹運営交付金化された分（教授1名+助教1名）が1,624ポイントの計73,714ポイントとな

りました。すなわち、昨年度から859ポイント減となっています。配分基礎ベースが平成31年度67,074ポイント、平成32年度64,545ポイント、平成33年度61,613ポイントの予定で、平成30年度から平成33年度までで8,283ポイント減となる予定です。ただし、現時点で学長裁量経費分2,238ポイント、基幹経費化分1,624ポイント、計3,862ポイントがありますので、現時点では4,377ポイント減（助教7名分の定員削減）しなければなりません（ただし、大学設置基準による法令遵守分の定員数の縛りがありますので、この数値は最悪値です）。分野の教員数、教員採用基準の見直しや特任教員からの承継教員への採用等の検討を行っていく必要があります。

教授の選考について

平成30年7月18日に開催された歯学系列教員会議で、予防歯科学分野担当教授として、小川祐司先生、歯周診断・再建学分野担当教授として、多部田康一先生、口腔保健学分野担当教授として、吉羽邦彦先生が選考されました。歯学系系列教員会議の推薦を受け、7月24日開催の医歯学系教授会議にて承認されました。発令は10月1日付け予定。

また歯学教育開発学分野担当教授として、前田健康教授（現高度口腔機能教育研究センター）が選考されました（8月1日付け発令）。なお、本ポストは平成30年度概算要求で機能強化促進経費から基幹経費化が認められた新設ポストで、同経費により歯学教育開発室を設置しました。

名誉教授称号の授与について

平成30年3月31日で定年退職された宮崎秀夫教授と吉江弘正教授は教育研究評議会の議を経て、名誉教授の称号が授与されました。6月22日に松

風会館にて名誉教授授与式が行われました（吉江名誉教授は欠席）。



タイ・マヒドン大学歯学部ならびにインドネシア・マラナタクリスチャン大学歯学部との部局間交流協定の締結について

かねてより、姉妹校締結の依頼が寄せられていたタイ・マヒドン大学歯学部ならびにインドネシア・マラナタ大学歯学部との部局間交流協定の締結を行いました。

4月23日に前田歯学部長、魚島副学部長（国際担当）がマヒドン大学歯学部を訪問し、Waranun Buajeebマヒドン大学歯学部長ほかマヒドン大学歯学部執行部の参列のもと、部局間交流協定式が行われました。交流協定式の後は、前川知樹助教（高度口腔機能教育研究センター）が交流協定締結を記念した特別講演を行いました。

また、部局間交流協定を受け、タイ・シリントーン王女が臨席されたマヒドン大学歯学部50周年記念式典（6月6日開催）に前田歯学部長が招待されました。マヒドン大学は1943年にタイで初めて医科大学として設立された国立大学で、現在では17学部、8研究所、6カレッジ、5センターを有する総合大学へと発展し、バンコクを中心に4つのキャンパス持ち、約26,000人の学生を擁しています。QS World University Rankingsの医学分野では世界のトップ100の大学にランクされています。



交流協定調印式後の記念撮影



記念講演を行う前川助教



マヒドン大学歯学部50周年記念式典での記念写真（中央がシリントーン女王）

また、5月11日に、前田歯学部長、魚島副学部長（国際担当）がマラナタ クリスチャン大学歯学部（インドネシア・バンドン市）を訪問し、部局間交流協定を締結しました。マラナタ クリスチャン大学は1965年に医科大学として設立され、現在9学部を有する総合私立大学で、バンドンに2つのキャンパス持ち、約10,000人の学生を擁し

ます。歯学部は2008年に設置され、2012年にプログラムの認可を受けた比較的新しい学部です。学生ならびに教員交流に加え、歯学教育カリキュラムの改善の協力依頼を受けました。インドネシアの歯学部としては、ガジャマダ大学、インドネシア大学、アイルランガ大学に続いて4校目となります。



W. Suwindere歯学部長との調印式



マラナタ クリスチャン大学執行部との記念写真

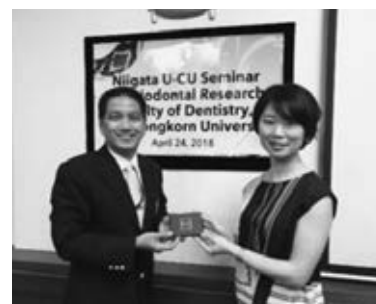
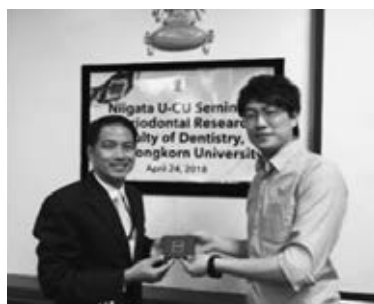
また6月7日にはタイ・チェンマイ大学歯学部との部局間交流協定の更新が行われました。なお、現在、カナダ・University of Toronto歯学部、米国・University of Washington歯学部、

タイ・University of Payao歯学部、ペルー・Universidad Científica del Sur歯学部の計4校から、部局間交流協定締結の申し出があり、締結可否の検討を進めています。

タイ・チュラロンコン大学歯学部との 学術交流について

歯学部はタイ・チュラロンコン大学歯学部と部局間交流協定を締結しています。この度、同大学歯学部長Suchit博士からの依頼を受け、若手研究者による研究ネットワークの構築を目指し、4月24日にチュラロンコン大学歯学部で若手研究者セミナー（Niigata U-CU Seminar in Periodontal Research, Faculty of Dentistry,

Chulalongkorn University）に、高度口腔機能教育研究センターの若手教員3名が参加し、情報交換を行いました。Suchit歯学部長と前田歯学部長、若手研究者を交えた懇談会で、今後も若手研究者交流を継続していくことが合意されました。若手教員レベルでの国際共同研究の進展が期待されます。



左から、前川知樹助教、高橋直紀特任講師、山田友里恵助教とSuchit歯学部長

平成30年度科学研究費助成事業の内定について

4月1日付けならびに6月29日付けで平成30年度科学研究費助成事業の内定が行われました。歯

学系の採択状況は以下の通りです。

		基盤	基盤	基盤	挑戦的研究			若手	若手	若手	総計
		(A)	(B)	(C)	挑戦萌芽	開拓	萌芽	(A)	(B)		
新規	院（歯）	1	3	13	-	0	3	-	-	5	25
	病（歯）	0	0	3	-	0	0	-	-	9	12
継続	院（歯）	2	12	23	2	1	-	1	8	-	49
	病（歯）	0	0	20	0	0	-	0	15	-	35
計		3	15	59	2	1	3	1	23	14	121

本原稿執筆時には挑戦的研究（6月29日付け内定）を含めた採択率、課題保有率のデータは本部

より示されていませんが、新規採択率は35.5%（院）、31.6%（病院歯）、基盤（B）以上の課題

割合（新規）は3.7%（院）、0%（病院歯）、課題保有率（新規+継続）は68.2%（院）、52.2%（病院歯）、基盤（B）以上の課題割合（新規+継続）

は21.5%（院）、0%（病院歯）でした。大学院所属教員の新規採択率および課題保有率（新規+継続）は全学で1位の成績でした。

文部科学省高等教育局医学教育課眞鍋馨 企画官によるFD講演会の開催について

7月4日、文部科学省高等教育局医学教育課企画官の眞鍋馨氏をお迎えし、「歯学教育の動向について」と題してFD講演会を開催しました。本FD講演会は、近年、歯科をとりまく環境と状況が変化し、これに合わせて厚生労働省は「歯科保健医療ビジョン」を発表しており、歯科医学教育に携わる本学教員は、基礎、臨床の教室を問わず医学教育改革と歯学教育の課題について学び、今後の教育プログラムへの反映を図る必要があることから、開催されました。講演では、眞鍋企画官から、歯学教育モデル・コア・カリキュラムの改

訂に係るこれまでの取組や概要、歯学教育における診療参加型臨床実習実施のためのガイドライン（案）の構成や考え方、評価の在り方などについて詳細な解説が行われました。また、歯学教育の質保証に関して、我が国における評価制度、分野別評価の確立に向けた取組などについても説明がありました。翌5日は、歯学部歯学科のカリキュラム改革、臨床実習システムおよび評価方法の改善について意見交換が行われ、医歯学総合病院での臨床実習現場及び実習設備などの視察が行われました。



講演する眞鍋企画官



藤井教授から臨床実習の内容の説明を受ける眞鍋企画官

アライアンスラボの整備について

歯学部では文部科学省概算要求採択事項「若手研究者が集うレジリエンスな口腔保健教育研究拠点の形成ーネットワーク型教員組織の構築と実質化による総合的な機能強化ー」による機能強化

を行っています。この取組は新潟大学基本戦略③「健康長寿と安全・安心社会の未来科学創生に向けた超域研究ネットワーク形成」の取組の1つとして取り上げられています。機能強化経費によ

り、昨年度から全学共有スペースE301で整備を進めてきたアライアンスラボが完成しました。歯学部の機能強化の方向性に沿った口腔生化学分野の照沼美穂教授らのグループが中心となって、先端的かつ学際的な研究が推進されることとなっています。このE301のアライアンスラボの整備により、第2期中期目標・中期計画期間から進めてきたアライアンスラボの整備が完了したことになります。



新たに整備されたE301アライアンスラボ

デジタルセミナー室の設置について

平成29年度学長裁量経費（将来構想実現促進費）「増収・経費節減推進経費」の採択を受け、C101,C102の整備を進め、この度、「eWSルーム」2室が完成しました。このセミナー室には部屋ごとに最新式の大型モニター2台とホワイトボード、什器類が設置されています。また教授にはデジタルペーパー（Sony社製）が貸与され、ICTペーパーレスソリューション指導ができる体制が

整えられました。このセミナー室の設置目的は、一元管理化した外部資金申請体制確立と若手研究者の申請書作成能力の育成であり、すでに、若手教員向けの科研費申請書づくりセミナーが前田歯学部長、寺尾副学部長（研究担当）で開催されています。また各部屋16名分の什器類が整備されていますので、少人数のセミナー等にも利用できます。



eWSルームの設備



若手教員を対象にした科研費獲得セミナー

歯学部納涼会の開催について

恒例の歯学部納涼会が7月18日（水）にホテル日航新潟で開催されました。この会は数年前までは教授会納涼会として開催されていたものです

が、准講会、助教会の先生方、さらには大学院生にも参加を呼びかけ、本年は約100名の参加者となりました。教員、大学院生の親睦を深めるため

席順は抽選とし、短い時間ながら職種を超えた会話を進み、有意義なひとときを過ごすことができました。

新潟高校理数科「新潟大学歯学部訪問」 — Professionを学ぶ —

平成30年8月3日（金）、新潟高等学校理数科（メディカルコース）2年生の訪問を受けました。新潟高等学校は、歯学部前の西大通りを西へ1km進んだ場所に立地する県立高校です。創立120年を超える伝統を誇る一方で、「けんたか」の愛称で親しまれています。元来、医歯学系への進学率が高い傾向にあり、本学医歯学部にも卒業生が数多く輩出されていますが、12年前に理数科が設置され、さらに新潟県内の医師不足を解消する目的で、理数科にメディカルコースが導入された沿革を有します。このメディカルコースでは、1年生後半に医歯学系の特別講義を受講し、2年生で

はグループ学習を通じて医歯学系職種への理解を深めます。その2年の夏季期間中に、新潟大学の医歯学部を訪問する課題が設定されています。

さて、今年度の歯学部訪問は、4つの企画でプログラムが構成されました。はじめに、前田健康学部長から「歯学部の概要」等が説明されました（写真左上）。さらに、10年先の人口動態や医師および歯科医師数の予測データを示し、時勢ではなく自ら進路を客観決定する重要性が解説されました。続いては、基礎系科目の模擬講義を寺尾豊教授が行いました（写真右上）。科学的な論拠に基づく歯科診療には、ベースとなる基礎知識を生



新潟高校理数科「新潟大学歯学部訪問」の様子

涯学び続ける必要性があると説かれました。3番目の企画は、井上誠教授による臨床系科目の模擬講義でした（写真左下）。高齢社会における健康寿命の延伸とQOLの維持には、歯科臨床が非常に重要になってくることが論理的に解説されました。2つの模擬講義では、指名される場面があったうえ、最初に学部長から“Profession”を目指す自覚と責任が求められていたため、全員が熱心に聴講する姿を見せてくれました。最後の企画

は、「けんたか」OBの研修歯科医との懇談でした（写真右下）。やはり「けんたか」OBの小野和宏教授が司会を務め、活発な質疑を引き出し、全てのプログラムが終了しました。

訪問した高校生たちは、学務係の手厚く丁寧な準備と運営を感じてくれたように思われます。当日の教員・研修医・学務係の全ての姿から、本学歯学部“Profession”を学び、真の医歯学志望を育ててくれたことを願い、標題の報告を終えます。

新潟大学歯学部オープンキャンパス2018

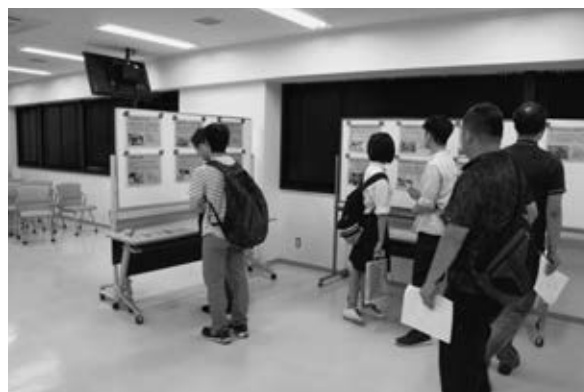
今年度も、平成30年8月9日、10日の両日、新潟大学旭町キャンパス歯学部校舎内の講堂をメイン会場として、オープンキャンパスを開催いたしました。昨年度の参加者アンケートで「在学生と直接話をしたい」「校舎を見学したい」等の意見をいただき、また、歯学部にある歯学科と口腔生命福祉学科の2つの学科についてバランスよく紹介させていただくために、今年度はプログラムの内容を一部変更するとともに、高校生の皆さんが自分の興味にしたがって主体的に参加できるよう配慮した計画としました。

午前中は、学務委員長の小野和宏教授から歯学部全体説明、入試実施委員長の高橋英樹教授から入試概要説明を行い、参加した高校生に歯学部での学生生活についての全体像をイメージしていた

いただいたのち、実際に歯学部の授業を体験してもらうために、2つの模擬講義を実施しました。一つは、歯学科の授業で、摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授による「食べることの大切さを知る」、もう一つは、口腔生命福祉学科の授業で、口腔保健学分野の葭原明弘教授による「お口の健康で元気に長生き」と題した講義で、ともに、超高齢社会での歯科保健・医療における課題解決につながるトピック満載な内容でした。また、模擬講義に並行して、「校舎内見学ツアー」が催され、講義室はもちろん、少人数グループ学習のためのPBL（Problem-Based Learning）室、臨床技能実習室をはじめとした各種実習室、学生自習室や学生交流室等を見学いただきました。新潟大学歯学部は50年以上の歴史をもちます



井上誠教授の模擬講義（講堂）



歯学部紹介展示コーナー（講義室）



校舎内見学ツアー（臨床技能実習室）

が、校舎は大型改修がなされ、最新の教育設備が完備されています。

午後は、「歯学部学生（歯学科および口腔生命福祉学科）との座談会」「短期海外派遣プログラム報告会」「シミュレーション実習（デンタルトレーナー体験）」が実施され、高校生の皆さんは、それぞれの催しに積極的に参加していました。とくに、昨年度の参加者アンケートにありましたが、「歯学部学生との座談会」には多くの高校生が集まり、歯学部学生の年齢が近いことあるのでしょうか、受験から大学生活に関するさまざまなことについて、活発に本音での話し合いがなされてい



歯学部学生との座談会（マルチディスカッションルーム）

ました。また、「短期海外派遣プログラム報告会」を聴く高校生も多く、海外留学への関心の高さを示していました。なお、今年度から、オープンキャンパスを一日楽しんでいただくために、休憩できるスペースを確保し、そこに歯学部紹介の展示コーナーを設けました。

前日まで台風の影響が心配されましたが、オープンキャンパスへの来場者は、2日間で高校生226名、保護者の方や高校の先生方を含めると336名と、外の暑さに負けない熱いオープンキャンパスになりました。

ひらめき☆ときめきサイエンス実施報告

日本学術振興会では、科研費により行われている最先端の研究成果を、中学生、高校生の皆さんが直に見て、聞いて、触れることで、科学のおもしろさを感じてもらおうプログラム（ひらめき☆ときめきサイエンス）を毎年実施しています（<https://www.jsps.go.jp/hirameki/>）。平成30年度の本プログラムでは、新潟大学歯学部を含めた全国約300の大学・研究機関の取り組みが採択を受けました。8月9日に新潟大学歯学部で実施

した内容をご紹介します。

歯学部では、平成28年に続き2度目のプログラム実施となりました。今回は「味わうこと・飲み込むこと・食べることの不思議を体験しよう」と題して、食べるために重要な口腔の機能を、実験を通して考えてもらうことを目的とした実習を行いました。当日の参加者は6名でその内訳は高校1年生2名、中学3年生1名、中学1年生3名でした。1日のスケジュールは以下の通りです。

- 9:00 - 9:30 受付
- 9:30 - 9:40 開講式（オリエンテーション、科研費の説明）
- 9:40 - 10:20 講義（食べる機能と食べることにかかわる病気の話）
- 10:30 - 10:50 講義（食べる機能を知ること・測ること）
- 11:00 - 12:00 実習 食べる機能の計測（実験1）
- 12:00 - 12:45 ランチタイム（大学生、大学院生との触れあいタイム）
- 12:45 - 14:45 実習 食べる機能の計測（実験2、3）
- 15:00 - 15:45 ディスカッション・解説
- 15:45 - 16:00 修了式（アンケート記入、未来博士号授与）
- 16:00 - 16:15 記念撮影、終了、解散

午前9時半の開講式、科研費の説明に続き、超高齢社会の中で「食べる」機能に問題を抱える高齢者が増えている日本の現状、摂食嚥下障害の原因疾患から、その病態像にいたるまでという内容で講義を行いました。次いで、午前から午後にかけて3つの実験を行いました。実験1では、2人1組となって1) 最大咬合力、2) 最大舌圧、3)

ピークフロー（最大呼気力）、4) 握力を測定し、これらの値に互いの相関があるかどうかについて、全員のデータを集めた議論を行いました。実験2では、「筋電計による生体信号記録」として、顎口腔顔面筋から様々な表面筋電図を記録して咀嚼時の筋電図学的評価について学びました。実験3では、「おいしさを感じるしくみ」として、ミ



講義風景



実験1の説明



歯学部の学生さんとともに咬合力の測定



昼食を食べながら、将来の相談？

ラクルフルーツやギムネマ茶を用いることで味やフレーバーが大きく変化することを実感してもらいました。実習を通して、大学スタッフである実験分担者や歯学部生の実験協力者が十分にフォローを行い、参加者には楽しい時間を過ごすことができました。最後に未来博士の学位記を授与し、皆で記念撮影を行って終了となりました。

参加者からは、「今まで見ていた世の中を違った視点からみることができておもしろかった」、「今の世の中は間違っただけの情報や理解が広まっていることもあることを知り、とてもためになった」、「実験の結果をグラフにまとめてもらい分かりやすかった」、「自分たちで実験し、自分たちで結果をまとめる作業が体験できてとても良かった」、「皮膚には痛点や冷点などがあり感覚が分かるが、味覚となると、甘、酸など役割が異なるけれど、

同じ感じなのかなと思った」、「やわらかいものは安全だという理由のみでペースト状のものを老人の方や病気の方に食べさせることを知っておどろいた」、「誤嚥のメカニズムが分かった」、「口の中に長く残ってまとまりにくいもので誤嚥が起こりやすいのは呼吸をするからだと思った」、「実際に自分で研究をしたりして考えられて楽しかったです」、「来年も来たいです」など多くの意見が寄せられました。前回（平成28年度）実施時の参加者から、2名の生徒さんが新潟大学歯学部に入学されました。今回のプログラム参加を機会に、一人でも多くの生徒さんが将来の志望として歯学部や歯科医師を目指してくれると嬉しく思います。

なお、本プログラムの取り組みは以下のURLにてご紹介しています。

<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/dysphagia/hirameki.html>



実験2にて、自分の筋活動を筋電図の音と波形で観察



実験3にて、ミラクルフルーツのミラクルの体験



未来博士の学位記授与式の後、皆で記念撮影

学年担任制

歯学科の学年担任制について

歯学部学務委員長 小野和宏

歯学部歯学科では、平成29年度の3年次編入学から2年次編入学への変更を機に、学年担任制を開始しました。これまでも学務委員会のもとに学生支援委員会を設けて活動してきましたが、さまざまなバックグラウンドをもつ学生に対して、学生支援委員会のみでは対応に限界があり、どうしても何かあった後の事後支援が中心とならざるをえませんでした。また、学問を教授することだけが大学教員の仕事であるとの昔ながらの偏った考えも、一部とはいえ存在することも否めません。そこで、教員の意識改革を促し、事後支援から事前支援への転換を図ることを目的に、学生サポート体制の充実・整備に取り組みました。

学年担任は、右の表に示すように、当該学年に授業科目をもつ分野とし、各分野の教授を責任者とした教員チームが日々の学習支援や生活指導を行なっています。また、学生の進級にともない、次の学年担任に学生支援上の情報を伝達するなど、学年間での教員の情報交換も行なっています。そのなかで、おむね4月、7月、11月に開催される学生と教員の懇談会は、学生の生の声を聞ける機会であり、有効な学生支援を実施していくうえで貴重な場となっているようです。詳しくは、以下の学年担任からの報告をお読みいただければと思います。

なお、1年生については、これまで通り、学務委員会ならびに学生支援委員会が対応しています。

学年担任制は始めたばかりの取り組みですが、学生の皆さんが楽しく有意義な大学生活をおくることができ、歯科医師を目指す者に求められる資質・能力をしっかり身につけるうえで、役立つものになることを期待しています。

学年	担任（分野）
2年	生体組織再生学 微生物感染症学 口腔生化学 口腔解剖学 口腔生理学
3年	硬組織形態学 口腔病理学 歯科薬理学 予防歯科学 う蝕学
4年	歯科矯正学 小児歯科学 包括歯科補綴学 歯周診断・再建学 顎顔面口腔外科学
5年	生体歯科補綴学 摂食嚥下リハビリテーション学 顎顔面放射線学 組織再建口腔外科学 歯科麻酔学
6年	歯学教育研究開発学

下線は平成29年度主担当分野

学年担任制について

口腔生化学分野 照沼美穂

平成29年度より歯学部歯学科の新しい試みとして、学年担任制が始まった。学生にとっても相談する先生がいるという点で心強いと思うが、我々教員側としても教員同士の交流が深まる良い制度ではないかとの1年を振り返って感じている。2学年の担任を持ち回りで担当するのは、口腔解剖学、口腔生理学、生体組織再生学、微生物感染症学、そして口腔生化学である。

担任としては、夏休み前の中間試験による学力判定や学生面談などの個別指導を通して、本格的に始まった歯学の勉強に学生がきちんと向き合えるようにと対応してきた。加えて学生へのサポート体制を充実させるべく、2-3ヶ月に1度は担任会議や講義担当教員会議を開催することにより、情報の共有と対応の是非を話しあってきた。今後はこれらの情報や経験を上学年担当の先生がたとも共有することで、より一層の学生サポートができるのではないかと考えている。

平成29年度第3学年担任

硬組織形態学分野 大島 勇 人

3年生の主任担任として、10月に人体解剖学実習試験結果をもとに事前支援が必要と思われた学生と面談を実施し、歯科医師になること、成績、学業上での問題点、課外活動、友人関係、生活上の問題点等について、聞き取り調査を行った。さらに、翌年1～2月に上記学生の2回目の面談とその他の学生全員と面談を実施し、上記と同じ聞き取り調査を行った。そして、学務情報システムを利用して面談項目を用いた学生実態調査アンケートを実施した（回収率97%：34/35）。学生の成績に関して、自分の担当科目の結果しか分からないので、他の科目の評価については自己申告の情報をもとに面談した。正確な面談を実施するには、GPA 評価等の客観的な学生の成績の把握が必要であると感じた。学生全員と面談を実施することで、日々の生活の中で学生が抱える問題点を把握すると共に、学生との距離感が近づいたことは担任制の効用であった。



懇談会のスナック

平成29年度 歯学科4年生クラス担任実施報告

歯科矯正学分野 齋藤 功

歯学科4年生のクラス担当は、歯科矯正学、小児歯科学、包括歯科補綴学、歯周診断学、顎顔面

口腔外科学の5分野で、責任分野（主担当）は順次交代で務めることになりました。初回29年度は、歯科矯正学分野が主担当になりました。主担当は、学生集会や懇談会の日程調整、内容と方法の検討および学生からの相談窓口を担当しますが、各分野から教授と協力教員1名にも随時協力いただくこととしました。

平成29年4月12日に第1回学生集会と懇談会、7月7日に第2回学生集会と個人面談、12月8日に第3回学生集会をそれぞれ開催しました。第1回学生集会では、クラス担任の役割、4年次の履修時間割、担当5分野の教育スケジュールならびに5年次に受験する共用試験、特にCBT合格に向けた心構えについて説明しました。集会後はスナックとソフトドリンクを提供し、学生と5名の教授および協力教員と懇談する場を設けました。第2回学生集会では、夏休みの心がけについて全体説明を行った後、5つの部屋に分かれ、教授一人につき8～9名の学生について5分間の個人面談を行いました。第3回学生集会では、第一学期総括試験の結果に基づきそれぞれの分野からの講評と担任制の感想を含めた質疑応答の時間を設けました。学生からは、CBTに向けた学習方法についての質問、懇談会や面談実施へのお礼の言葉がありました。

クラス担任制の実践により、学生の履修状況や支援が必要な事項を分野あるいは教員間で共有し、必要に応じて対応策について意見交換できたことから、本制度は学生、教員双方にとって有意義な取り組みと感じました。



学年担任制について

生体歯科補綴学分野 秋 葉 陽 介

当分野は平成29年度に5年次の学生担任を受け持ちました。本学5年生は、それまでより臨床を意識する実践的な学習が始まる時期で、後期からは臨床実習が始まります。6年間の学生生活の中でもとりわけ学習環境の変化が大きく、かつ意識改革が必要な時期でもあります。したがって、学生との懇談会を前期が始まって間もない時期の5月、臨床実習が始まって間もない12月、および臨床実習に慣れる3月の3回行うこととしました。5月には担任制度導入の経緯とその概要を説明し、12月には再度クラス担任の役割を詳細に説明した上で、意見交換を行いました。この日には、その後に本教室員全員を交えて、リフレッシュルームにて懇親会を催しました。3月の懇談会は事前に学生に無記名のアンケートを実施し、学生生活、学習などに関する悩み事、相談、質問等を受け付け、その内容に教室員が答えるという形で実施しました。

歯学部学年担任制について－6年生：歯学教育研究開発学分野・臨床実習ヘッド担当－

歯学教育研究開発分野 藤 井 規 孝

この歯学部ニュースに毎年学生からの報告が掲載されておりますように、歯学科のカリキュラム

では5年生の10月から6年生の10月まで臨床実習が組まれており、学生は医歯学総合病院歯科において実地に歯科医療を学んでいます。近年、文部科学省の指導の下、全国的に診療参加型すなわち学生が現場で診療に加わる臨床実習の整備が進められていますが、本学の臨床実習は担当医として診療に参加する学生を教員が指導する形で伝統的に行われており、大いに注目を集めています。このような臨床実習を運営するために指導教員同士あるいは教員と学生の連絡や情報交換は必要不可欠ですが、歯学部では以前より毎月臨床実習実施委員会を組織し、毎年のヘッドインストラクターと歯学教育研究開発学（病院歯科総合診療部）がとりまとめを担当してきました。この委員会では臨床実習に関するあらゆる事項が報告・検討され、学生との連絡会を開催して臨床実習を履修する学生のサポートを行っています。



教授に就任して



口腔病理学分野教授の就任の挨拶

口腔病理学分野教授 田 沼 順 一

新潟が記録的な豪雪の中、平成30年2月1日付で口腔病理学分野の教授に就任いたしました、田沼順一（たぬま じゅんいち）と申します。私は埼玉県加須市の生まれで、日本一暑い街熊谷市や映画や小説の“のぼうの城”の行田市と隣接しているところです。加須市は五家宝や天皇陛下も召し上がる冷汁うどんが有名な郷土料理であり、うどん屋の数が人口10万人ほどなのに100軒以上もあるうどん王国です。

出身高校は今話題の日本大学豊山高校で、作家で新潟出身の坂口安吾、俳優の伊勢谷友介などの卒業生がいます。高卒後は日本列島の南端にある鹿児島大学歯学部に進学しました。鹿児島市は、桜島の火口からわずか4 kmしか離れていないため、年間1000回の噴火のたびに灰が襲って来ますので、大学でも自宅でも窓を開けて空気の交換をする習慣がないのが、鹿児島の暗黙のルールです。しかし、“鹿児島の黒”と言われる黒牛、黒豚、黒さつま鶏、黒酢、黒糖焼酎、うなぎなどの黒と名の付いた名物が多くあり、海産物などは大変美味しいところです。

私は歯学部の3年時より、口腔病理学の北野元生教授（埼玉県立がんセンター病理部長、小倉記念病院や中津市民病院病理部長を歴任）の研究室にてラットを用いた動物実験を手伝い、舌癌の発がん研究の基礎を学びました。教授の名言で“ねずみに盆も正月もない”と365日努力することが大切であることを痛感したことから、歯科医師国家試験の前日もラットの床変えやケージ交換100

箱以上終えてから試験場に向かったことも懐かしいエピソードです。

卒業後大学院歯学研究科（口腔病理学）に進学した4月には、実家に近い埼玉県立がんセンター病理部・研究所病理部で3年間研修医として、病理解剖（解剖体70体以上）と学位研究（舌癌感受性遺伝子の検索）に研鑽しました。その当時の病理部長は高校の先輩である岸紀代三先生（弘前大学）で、新潟大学出身の黒住昌史先生（現病理部長）に熱心なご指導をして頂き死体解剖資格を取得できました。また研究所病理部では副部長の志佐湍先生（動物実験施設長・三重大学）に動物実験のイロハを学び、分子生物学的手法は京都大学日合弘教授（第一病理学）の研究室で、賀本俊行助手（現宮崎大学泌尿器科学教授）および豊國伸哉講師（現名古屋大学病理病態学教授）のご指導を受けることができたので、学位論文はがん研究のリーディングジャーナルCancer Res (IF:9.13)に掲載されたことから学位取得後の1998年に歯学部助手に任命されました。

その後助手の期間は教育・研究・診断を三位一体のごとく毎日午前様の帰宅で頑張っていたお陰で、日合教授の紹介で英国ケンブリッジのMRC分子生物学研究所に留学の推薦を頂きましたが、実父の急死の理由で、急遽ミラノ市のイタリア国立がん研究センター研究所実験腫瘍学部長のDragani氏のラボに留学するになりました。このラボは肺がん研究ではNature Geneticsに何本も掲載されるなどレベルは極めて高いもので、

ラボメンバーはポスドクを含め12名を超える大所帯でありましたが、私とボス以外はモデル並みのイタリア美人で、毎日が浦島太郎状態でした。また全くイタリア語が話せなかった私は、1年もするとラボの電話番、研究品の発注などの日常会話は不自由なくできるようになったことも、研究成果の1つになるのでしょうか？ 留学中は、あのニューヨークの9.11事件や貨幣がイタリアリラ（私の月給700万リラ）からユーロに変更するなど欧米世界が激動の時代に入っていた時でした。帰国後は鹿児島大学では、現口腔病理学教授の仙波伊知郎先生のもと、准教授として5年間教育と診断を中心に大学院生の学位の指導を行っていました。そして2010年からは岐阜県の朝日大学口腔病理学の主任教授として赴任しましたが、病理診断はもちろん研究・教育が全く機能しておらず、ゼロから機材や人材を集めることに奔走する毎日でした。ただその時に現在のがん研究のブレイクスルーとなる液状化検体細胞診（LBC）に出会い、細胞診専門医を取得するなど、新たな研究のきっかけとなったことには感謝しております。

さて、新潟大学に着任して早半年、日々口腔病理学分野で教育・研究・診断（病理検査室長）に従事しているわけですが、まず新潟に来て鹿児島大学時代にCBTやOSCEで大変お世話になった

小児歯科の早崎治明教授、斎藤一誠准教授、岩瀬陽子助教がいることは心強く感じました。さらに前田健康学部長には歯学部の場合だけでなく様々なご指導・鞭撻を詳細にしてくださることにいつも感謝申し上げます。また歯科放射線の林孝文教授、口腔外科学の高木正治教授と小林正治教授には毎週の口腔がんカンファレンスなどで常日頃からとても良くしてくださるので、ほとんど苦労することなく病理診断ができています。病理医は直接、患者様を診察することはありませんが、病理診断を通して臨床医に適切なアドバイスをすることから、欧米諸国では、医者コンサルタントdoctor of doctors (doctor's doctor) と呼ばれているように、臨床研究と基礎研究の橋渡しをすべく、様々な研究を行っていく予定です。

最後に、口腔病理学分野では歴代の教授が口腔がんの研究を行ってきました。このような講座の後任を担当させて頂くことは、大変光栄なことですが、今後は新潟大学病院のがんゲノム医療中核拠点病院への承認に向けて病理診断室のISO取得など様々な問題への取り組み、口腔がん検診や液状化検体細胞診など地域貢献できるように精いっぱい努めさせていただく所存です。どうぞ宜しくお願い致します。

准教授に就任して



准教授に就任して

歯科麻酔学分野准教授 岸本直隆

はじめまして。2018年2月1日付で歯科麻酔学分野の准教授を拝命いたしました岸本直隆（きしもと なおたか）と申します。この場をお借りしてご挨拶させていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は兵庫県東部に位置する丹波市の出身で、高校卒業までそこで過ごしました。その後、大阪歯科大学に入学し、大阪で一人暮らしを始めました。学生の間はヨット部に所属し、週末になると西宮のヨットハーバーにて泊まり込み、スナイプと呼ばれる2人乗りヨットの練習に明け暮れました。また家庭教師、カラオケ店、居酒屋など様々なアルバイトも経験し、大学以外の場所でも多くの友人をつくることができました。

大学卒業後は臨床研修歯科医として大阪府寝屋川市の小松病院 歯科・口腔外科に勤務しました。小松病院には歯科麻酔科医が在籍しており、口腔外科手術や小児・障がい者の歯科治療時の全身麻酔を行っています。そこで患者全身管理の重要性を強く感じ、歯科麻酔学に興味が出てきたことから、研修終了後、小谷順一郎教授（現 大阪歯科大学 名誉教授）が主宰されていた大阪歯科大学・歯科麻酔学講座に大学院生（大学院歯学研究科・博士課程）として入局いたしました。大阪歯科大学附属病院は大阪市中央区にあり、交通の便も良いことから多くの患者が来られており歯科治療および口腔外科手術時の全身麻酔、静脈内鎮静法など多くの症例を担当させていただきました。また入局2年目からは医科麻酔研修として、

大阪厚生年金病院（現 JCHO大阪病院）・麻酔科に1年間勤務し、様々な医科症例の全身麻酔を経験させていただきました。歯科では普段なかなか見ることができない全身の臓器に対する手術の麻酔管理を通して、麻酔学の基礎を学ぶことができました。大学院終了後は大阪歯科大学・歯科麻酔学講座の教員として2017年10月まで勤務し、臨床、研究、学生教育と本当に多くの経験をさせていただきました。

研究面では大学院入学後から、百田義弘先生（現 大阪歯科大学・歯科麻酔学講座 主任教授）の指導の下、脱分化脂肪細胞を用いた再生医療の研究に取り組んで参りました。脱分化脂肪細胞は皮下脂肪から天井培養法を用いて樹立可能な細胞であり、純度が高く、骨・軟骨・脂肪といった様々な組織の細胞へ分化する多分化能を有しております。われわれは脱分化脂肪細胞を自己組織化ペプチドやチタンファイバーメッシュなど様々なバイオマテリアルと組み合わせ、骨組織再生における有用性を評価してきました。また口腔外科手術時に採取した頬脂肪体より脱分化脂肪細胞を樹立し、同じく脂肪組織から樹立された脂肪組織由来幹細胞と比較して骨芽細胞分化能が高いことを報告しました。さらに脱分化脂肪細胞は骨髄間質細胞と比較して骨芽細胞分化能が高いこと、脂肪組織由来幹細胞と比較して軟骨細胞分化能が高いことなどを発表し、純度や多分化能の他に脱分化脂肪細胞の優れた細胞分化能に関して報告してきました。

研究活動の一環としてIADRなどいくつか国際学会に参加しました。また身近な先輩がアメリカに留学されていたこともあり、私自身も留学に対するあこがれが強くなってきました。当時唾液腺再生に興味を持っており、文献検索でMcGill UniversityのDr. Simon D Tranのグループから多くの唾液腺再生に関する論文が出版されていたこと、また2015年3月にボストンで開催されたIADRの抄録に彼らのグループの名前があったことから、思い切ってIADRの会場でお会いできないかという内容のメールを送りました。数日後Simonより丁寧な返信があり、IADRにはいかないが研究室に興味があるならSkypeで話をしようと言われてありました。英語には自信がなかったので正直びびっていましたが、せっかくの機会でしたので時間を合わせてSkypeで初のミーティングを行いました。かなり緊張していましたが、自分が今まで研究してきた脱分化脂肪細胞に関すること、McGill Universityの研究室に興味があり留学したいことをなんとか伝え、2015年9月に訪問することが決まりました。訪問した際に研究室を見学し、ボスであるSimonに直接会う機会を得ることができました。また研究室のメンバーに対しこれまでの研究内容を講演する機会をいただき、新たなcell sourceとして脱分化脂肪細胞にも興味を持ってもらえたことから留学を許可していただきました。そして2017年4月より1年間McGill University, Laboratory of Craniofacial Tissue Engineering and Stem Cellsへ留学するため、カナダ・モントリオールへ移住しました。モントリオールはカナダ第二の都市と言われる大都市ですが冬の寒さが厳しく、-20~-30度くらいになることもしばしばです。しかしながら、自然も多く特に夏場は気候に恵まれ、毎週末イベントが開かれています。特にモントリオール世界映画祭やモントリオール国際ジャズフェスティバルは有名で、世界中から多く

の観光客が集まります。慣れない海外での生活は苦勞も多かったですが、仕事面では唾液腺再生の専門家から直接研究の指導を受けることができ、プライベートでは家族・友人と旅行やスポーツ観戦など様々なレジャーを満喫し、人生において非常に貴重な経験となりました。

臨床、研究以外の活動としまして歯科麻酔学教育の普及活動をしております。2012年にAneStem（アネステム）というスタディグループを設立し、歯科医師、歯科衛生士、歯学部学生など歯科医療従事者に対する歯科麻酔学に関する教育を行っております。歯科臨床に携わる人々の全身管理、バイタルサイン、偶発症対応などに対する知識と技能を向上させ、安全・安心な歯科医療の普及を目指すことがAneStemのミッションです。これまで大学附属病院、地域歯科医師会、企業、開業歯科医院において80回以上歯科麻酔学に関するセミナーを開催し、受講者はのべ800人以上となっております。超高齢社会を迎え、歯科患者の多くが有病高齢者であるわが国の現状を踏まえ、今後も歯科麻酔学教育のさらなる普及を目指し活動を継続していきたくと思います。AneStemの活動に興味がある方がおられましたら、いつでもお声がけください。活動の詳細はwebに掲載しております (<https://www.facebook.com/anestem2012/>)。

兵庫→大阪→モントリオールと移り住み、新潟に来て約2カ月が経過しました。まだまだわからないこと、戸惑うことも多いですが、前田健康歯学部長、瀬尾憲司教授、歯科麻酔学分野の先生方をはじめとして、多くの方々のサポートを受けて楽しく仕事をさせていただいております。この場をお借りして感謝申し上げます。まだまだ未熟者ではありますが、日々研鑽を積み、歯学部の発展に貢献したいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

素顔拝見

研究推進機構 超域学術院(口腔生化学分野所属)
特任助教

岸川 咲 吏

みなさま、初めまして。

私は、2017年2月から新潟大学口腔生化学分野の特任助教として赴任いたしました。

出身は福岡県ですが、大学院からは福岡→東京→新潟(現在)と北上しつつあります。

私は九州大学歯学部卒業後、研修医を経た後どの道に進もうかと悩みましたが、歯科医師として拔牙はできたほうがいいよね!という気持ちと、昔から免疫学・細菌学に興味があったため研究をしてみたいという思いがあり、そのどちらも叶えたいという邪な考えから九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面病態学講座顎顔面腫瘍制御学分野(顎口腔外科:中村誠司教授)に進学いたしました。口腔外科の朝は早く、夜は遅くというとてもハードかつ人生を濃縮したような日々でした。同期は私を含め6人(内5人は女性!)もいて、拔牙を含めた術技も診療後に先生たちに教えてもらったり、同期たちと練習したりと必要な技術や知識を得るためにみんなで切磋琢磨し、楽しく過ごすことができました。今では毎週木曜日の夜中2時過ぎに九大近くの花山(知る人ぞ知る某屋台)に先生に連れられて飲んだ事はいい思い出です…。

一年間がっつり臨床したあとは、かねてより興味があった免疫学、なかでも特に粘膜免疫(口腔外科では粘膜疾患は多いので)に興味を持っていた私は、当時に一度九大に講義にいらしていた東京大学医科学研究所の清野宏教授(現:UCSD)のもとに出向いたしました。清野先生の下で、腸上皮の一部であり抗原の取り込みと抗原認識を行うM細胞について研究を始めました。研究室に赴いてびっくりしたことは、研究室には医学部出身の方だけではなく、歯学部(清野先生

も)、農学部、工学部、また薬品会社からの出向の方など色々な分野出身のひとがいて、グローバルかつ多彩な意見の交換が行われていたことです。歯学部・歯学研究院の中にただけではきっと体験できなかったような経験をいたしました。

大学院を卒業後、粘膜免疫の研究を進めるうちに、免疫は様々な組織と関与していることがわかってきましたが、なかでも神経と免疫のクロストークに興味をもちました。神経を学びたいという考えから、現在、照沼美穂教授のもとで脳細胞の一種であるアストロサイトについて研究を行っております。アストロサイトは痛みの認識や神経毒性の除去など多彩な能力を備えていることが明らかになってきていますが、いまだ不明な部分も多い魅力的な細胞です。

10年ぶりに訪れた新潟の土地ですが、赴任翌年(今年)の大雪には連日驚かされ、童心のようにはしゃぎました。ここ新潟での研究と、酒と、季節の移ろいを楽しみつつ過ごすことができたいなと思っております。

みなさま、今後ともよろしく願いいたします。



歯科矯正学分野
助教

大竹 正 紀

初めまして。平成29年10月1日より助教を拝命いたしました、矯正学分野の大竹正紀(おおたけまさのり)です。「素顔拝見」の原稿依頼をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきますと思います。

出身は新潟県長岡市です。厳密に言うと長野の

赤十字病院生まれの新潟・長岡育ちです。長岡といえばやはり長岡花火です。皆さんも見に行かれた方が多いと思いますが、私は幼い頃から欠かさず見えています。見たことがない人は是非見に行ってください。ちなみに、フェニックスは間近で見るといいのですが、視野に入りきりません。少し離れたところから見るのもなかなかいいです。迫力は劣りますが、全体が視野に入りますし、車で見に行っても混む前に帰れるのがメリットです。

高校卒業後は昭和大学歯学部に入りました。大学の1年目は富士吉田キャンパスに医・歯・薬学部の1年生が全員集まって寮生活をしていました。医療系の他学部の友人ができ、予想外に楽しめました。ただ、綺麗な富士山と富士急ハイランド以外何もない大自然のなかなのでだいぶヒマでした。部活は高校の時からやっていた硬式テニス部に入部しました。今では問題になりそうなくらい体育会系な部活で、当時は地獄でした。テニス部の方ならご理解いただけると思いますが、夏は日焼け止めを塗っても手足がポッキー。黒い服を着れば闇に紛れ、白いハーフパンツを履けばパンツが浮かんでいる、などなど。最近運動不足なのでテニスができたらなあと思っています。昔の感覚で動いたら怪我するんだろうな、と思いつつもやっけてしまっそうです。

昭和大学を卒業し母校の保存科の方で研修したのち、審美と機能を兼ね備えたな咬み合わせを創ることに憧れ、地元である新潟大学の矯正学分野に大学院生として入局させていただき、現在に至ります。入局して今年度で9年目になりますがまだまだ学ばなければならないことがあり日々悶絶しています。

新潟出身なので基本コメ。日本酒も大好きですが、ちょっと二日酔いになりがちなので注意しています。最近のマイブームは新潟県以外の日本酒を探ることです。石川や富山のお酒にはまっています。私生活に支障をきたさないように楽しめればと思っています。

さて、ここまで私の拙い文章を読んでいただきありがとうございます。これからも歯科矯正学分野の助教として、日々努力していく所存です。まだまだ未熟者ではございますが皆様、ご指導、ご

鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



う蝕学分野
助教

枝 並 直 樹

こんにちは。2017年12月より、う蝕学分野の助教を拝命いたしました枝並直樹と申します。この度、「素顔拝見」を書かせていただく機会を頂きましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

私は新潟市江南区(旧亀田町)に生まれました。江南区は今でこそ、大型ショッピングセンターが立ち、店舗や住宅も増えましたが、以前は田んぼに囲まれ、夏には一晩中カエルが鳴きやまないような地域でした。私も小さい時にはザリガニ、オタマジャクシをよく捕まえて遊びましたし、ヘビが出た記憶もあります。そんな、のびのびとした環境で小・中学校、高校、大学と生活したせいか、身長が185cmになりました。よくバスケ部orバレエ部と聞かれますが、残念ながら俊敏な動きはできず、身長を生かしたスポーツはやっていませんでした。

小さい時にチェロを習わされた習わせてもらったことから、大学時代はオーケストラ部(新潟大学管弦楽団)に所属しておりました。この部活は、歯学部の部員が少ないこともあって、あまり皆様の印象にないかもしれませんが、創部九十年以上で、部員も百数十人いる大きな部活です。また、毎年、入学式の演奏を行っている部活です。実は聞いたことがあるという方が多いのではないかと思います。

ここ数年は歯学部や日本歯科大学の学生がコンサートマスター(リーダー的存在)を担うなど、歯科の存在感が大きくなっている?ようです。演奏会を聴きに行ったことがない方は若さ溢れる演奏が聴けますので、ぜひ一度足を運んでみてくだ

さい。

そのほかの趣味としては、最近、野菜のプランター栽培を始めました。NHKの“植物男子ベランダー”という番組に影響されたのですが、不規則になりがちな生活の癒し+栄養源の確保として重宝しています。新潟市出身の園芸王子こと三上真史さんが出演の“趣味の園芸”も毎週欠かさず見えています。去年はゴーヤが豊作になりましたので、今年はトマトに挑戦しています。どなたか栽培に詳しい方がおりましたら、ぜひ教えてください。

趣味の話ばかりでは、仕事をしていないように思われるかもしれないので、研究の紹介もさせてください。私は現在、ラットの臼歯で歯髄再生療法的一种であるパルプリバスクラリゼーションを起こし、反応を観察できないか試みています。う蝕学分野教授の野村先生のグループは、大阪大学

時代にラットの歯に根管治療を行うという離れ業を編み出していましたので、その秘技を伝授していただきまして実験を行っています。この研究では、ラットの臼歯にラバーダムをして、顕微鏡視野下で根管拡大・洗浄・貼薬等を行うのですが、何せ近遠心径が4mm、根管長も4mm程度しかありませんので、難易度が高く苦勞をしています。残念ながら、ラット根管治療専門医と呼ばれるほど上達するまでにはもう少し時間がかかりそうですが、皆様の目にとまるような結果を早く出せるように頑張りたいと思います。

以上、最後まで拙い文章にお付き合いいただき、ありがとうございました。まだまだ経験不足の自分ではありますが、若さを力として、う蝕学分野と歯学部に貢献できるよう日々研鑽してまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



ウィスコンシン大学留学報告

包括歯科補綴学分野 堀 一 浩

2017年5月より2018年2月まで、アメリカ合衆国のウィスコンシン大学マディソン校へ留学する機会を頂きました。場所はウィスコンシン州のマディソン市にあり、州都ではありますが小さな大学町です（「マディソン郡の橋」という映画がありました。別のところですが）。アメリカの中北部にあり、シカゴから300kmぐらい北に位置しています。とても落ち着いた治安のよい街でみんなフレンドリーでしたし、 -20°C になってしまう冬の寒さを別にすればとても過ごしやすいところでした（といっても新潟の80年ぶり？という大雪の写真を見せたらみんなにクレージーだって言われたのですが）。

妻と小学生の子供2人とともに大学のアパートメントに滞在していました。1000戸を超えるアパートメントがあり、大学のスタッフの他、各国からの研究者、留学生も住んでいました。小学校も近くにあり、様々な国から親とともにやってきた子供たちが通っている学校で、ESLも充実していました。子供たちにとっては私とともに突然アメリカに連れてこられ、いい迷惑だったかわかりませんが様々な文化を知ること、個性を大事にするアメリカの雰囲気に触れることはとても良い経験だったと思います。教育システムが小学校のうちから日本とはずいぶん異なっており、ディスカッションやプレゼンテーションなどの表現能力をどんどんトレーニングしたり、生徒一人一人にPCを貸し出して学習や提出物、評価においてもコンピューター上で行っているところには驚きました。

日本人はあまり多く在住しているわけではありませんでしたが、それでも日本の大学や企業から

来られた研究者が何人かおられ、家族ぐるみで仲良くさせていただきました。夏場に庭でバーベキュー（夏が短い分、夏場をできるだけ楽しむのがアメリカ流でした）で大きな肉をほおぼったり、ハロウィンで農場へパンプキンを取りに行ったり、自分たちで切ってきた生ツリーをデコレーションするクリスマスなど、いくつもの楽しい思い出ができました。40万キロも走った中古のトヨタの車を購入したので、休みの日には近隣の都市へドライブに出かけました。どこまでもトウモロコシ畑と牧場が広がっていて、アメリカの広大さを体感できました。夏休みには家族でセントルイスまで行って皆既日食をみたり、冬場にはカチコチに凍った湖の上でしこたま転んだりしたことは良い思い出です（だってねえ、捕まるところはないし、湖の氷って意外と凸凹してるんですよ...）。

ウィスコンシン大学には歯学部はなく、私の留学していたのは医学部の耳鼻科の研究室でした。お世話になったティモシー・マッカロー教授は、ハイレゾリューションマンOMETRYを用いた嚙下時の咽頭圧解析に関する研究を長年行っておられます。私は、以前より咀嚼嚙下時における口腔内での舌圧に関する研究を行っており、咀嚼嚙下時における口腔から咽頭への機能的な圧伝搬に興味を持っておりました。口腔内と咽頭内と、部位は違うけれども同じように独自の装置を用いて機能時の圧分布の測定を行っているマッカロー教授の研究には以前より興味を持っており、今回留学したいと打診したところこころよく引き受けていただきました。私は我々の舌圧研究で用いているセンサシートシステムを持ち込んで、ハイレゾリューションマンOMETRYとの同期計測を行いました。我々の装置は独自のものであり、IRBの審

査など実験開始までに少し時間はかかりましたが、ラボのメンバーの協力のもと、口腔から咽頭までの一連の嚥下過程を理解するための興味深いデータを集めることができました。ラボ自体はあまり大きくありませんが、非常にアットホームな雰囲気があり、こころよく私を迎え入れてくれてありがたかったです。メンバーはみんなアクティビティが高く、摂食嚥下リハビリテーションの分野では世界的にも進んだ研究を行っていました。

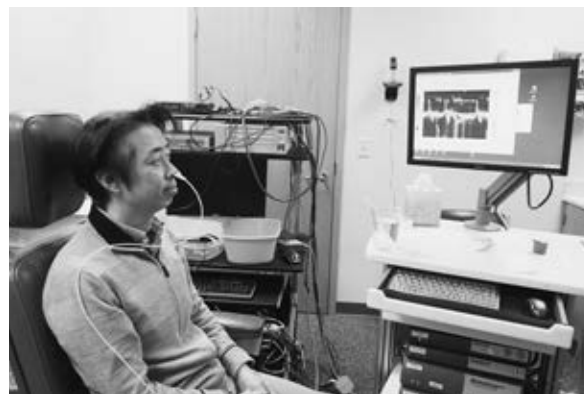
また、摂食嚥下障害に対する研究を行っているラボが他にもいくつかありました。訪問前から何人か知っている研究者もおられました。大学自体が大きく、行ってから知り合った先生もたくさんいて、そういったメンバーの研究をみせて

もらいながら、ディスカッションを行うことはとても貴重な体験でした。

9か月間という短い滞在期間でしたが、非常に良い体験をさせていただきました。私はなかなか長期留学の機会に恵まれなかったのですがあきらめずにチャンスをうかがっていてよかったと思っています。ぜひ、若い研究者にもこういった機会をつかんでもらって海外での研究生活を経験してもらいたいと思います。最後になりましたが、私に貴重な機会を与えていただいた当分野小野高裕教授、摂食嚥下リハビリテーション学分野井上誠教授、こころよく送り出してくれた当科医局のスタッフに感謝いたします。



Timothy McCulloch教授（右端）とラボのメンバー



実験中の筆者



ウィスコンシン大学マディソン校の大学病院

留学報告

生体歯科補綴分野 加 来 賢

昨年2017年6月から2018年3月までの10ヶ月間、米国テキサス州にあるThe University of Texas Health Science Center at Houston, McGovern Medical School, Department of Pediatricsの小松研究室に留学の機会をいただきましたので御報告致します。

今回の留学は、2015年に新設された日本学術振興会の科学研究費助成事業、国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）の助成を受けたものです。この基金はすでに科研費に採択されている36歳から45歳までの若手(?)研究者が、現在実施している研究計画について国際共同研究による発展を目的として交付されるもので、幸運にも初年度に採択していただくことが出来ました。新潟に赴任する前にも5年間ほど米国のThe University of North Carolina at Chapel Hillでポスドクをしていましたので、今回は2度目の留学になります。大学院を卒業したばかりで何もわからず渡米した最初の留学とは違い、今回はスムーズに留学生活をスタートさせることが出来ました。受入先も以前から懇意にさせていただいている先生の研究室でしたので、有り難いことに研究環境も早々に整えていただくことが出来ました。

今回の留学先である小松研究室は、マウスジェネティックスの技法を使って、主に頭部神経堤に由来する幹細胞群の機能解析を得意としています。小松先生は、先の留学中にお互いポスドクとして知り合った縁で、これまでも幾つかの研究プロジェクトでお世話になっていましたが、2011年に独立され、今ではご自身の研究室を主宰されています。小松研究室のプロジェクトの一つは、我々歯科医師が対象とする顎顔面領域の先天性疾患を再現することが可能な動物モデルを使い、その分子的な病因を明らかにしようとするものです。今回の留学期間中にも自分のプロジェクトの準備を進める傍ら、頭蓋癒合不全症や唇顎口蓋裂、顎関節の形成不全を呈するマウスモデルの解析についても携わる機会をいただきました。自分

で実験をできる時間は非常に貴重で、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。その反面、如何にして説得力のあるデータを出すかについては、改めてその厳しさを教えられました。実験に失敗はつきもので、これまでに私自身もたくさんの失敗をしてきました。成功は多くの失敗の上に成り立つことは言うまでもありませんが、ただ失敗を積み重ねればよいわけではなく、失敗にも仕方があるということを、今更ではありますが、改めて痛感させられました。そういう意味では、今回の留学中は良い失敗をたくさん出来たのではないかと思います。

研究室のあるThe University of Texas Health Science Center at Houstonは世界最大級の医療研究機関が集積するTexas Medical Centerの中核を成しており、周囲には約50もの研究機関が林立しています。したがって共同研究や学外施設の相互利用も極めて盛んであり、著名な研究者のセミナーがいたるところで頻繁に開催されています。研究の遂行だけでなく、人的交流においても非常に恵まれた環境です。またTexas Medical Centerは研究機関だけではなく、多くの専門病院を有することから、全米から多くの患者が集まっています。長期間を有する治療の場合、近くのホテルに滞在しながら通院する患者も多く、バスやトラムでは点滴をしながら乗ってくる乗客をよく見かけました。通勤時や昼食時には、施設外でもスクラブや白衣を着た医療関係者をよく見かけましたが、感染管理的には問題ないのでしょうか。。。Texas Medical Centerの周辺は研究機関と病院で成り立っている地域でしたので、感覚が麻痺してしまっているのかもしれません。

新潟に赴任する前にも留学していたこともあり、留学ってどうですか？留学したほうが良いですか？と聞かれることがよくあります。留学の目的として優れた研究機関で優秀な研究者に囲まれて研究を行う環境を手に入れる、ということ言うまでもありませんが、それだけであれば日本国内でも多くの優れた研究機関があります。実際に最近では海外留学する日本人が極端に減少しているという話もよく聞きます。しかし私が感じた留

学の意義の一つは、“自分がこれまで生活してきた大きな枠組みから一度外れてみる”ことなのではないかと思っています。例えばある休日、朝起きて、電車に乗って外出して、本屋に行って、コンビニに行って帰ってきたとします。日本ならそれほど難しいことではありません。しかし一旦海外に行くと、バスの乗り方がわからない、コンビニで買い物の仕方がわからない、誰かに聞こうにも言葉がわからない。そして途方に暮れます。。。これは言葉だけの問題でしょうか。日本でも、電車に乗って、本屋に行って、コンビニに行っても、場合によっては誰ともしゃべらないかもしれません。しかし、きっぷの買い方もわかるし、コンビニではポイントカード持っていますかと絶対聞かれるので最初から準備しています。つまり、海外で戸惑うのは言葉がわからないからというよりも、その国で通用しているシステムがわからないからなのだと思います。もちろん語学が堪能であれば人に聞いて解決することは出来ますが、最初は戸惑います。実際に今回の留学中も思いもしないことや、自分が当然と思っていたことが当然ではなかったりすることに数多く遭遇しました。車を買に行ったらサインするだけで当日乗って帰

ることが出来たり、レジに並んでいると前後の人達が支払い前のジュースを普通に飲んでいたり、電車に乗るのに改札はないけど無賃乗車が見つかったときの罰金が法外に高かったり。なるほど合理的だと思うこともありますが、なんで???と思うことも少なくありません。そのような想定外のことに数多く遭遇すると、そもそもの想定する範囲が自然と広がるような気がしています。そのために留学に行くわけではありませんが、そのような経験が人格形成に大きな影響を与えることは間違いないと思います。もちろんこれだけで留学したほうが良いと結論付けるつもりもありませんが、留学にはそのような副次的効果もあるのではないかと思っています。そしてそんなどちらかということトラブルの多い環境を楽しめるのであれば、留学には向いていると思います。保証はしませんが、きっと良い経験ができると思います。

最後になりますが、長期の留学をサポートしていただいた魚島勝美教授、多くの業務を肩代わりしていただいた生体歯科補綴学分野医局員の皆様、また留学中にお世話になりました小松義広先生と小松研究室の皆様に深く感謝致します。



研究室のあるMcGovern Medical School



Texas Medical Center

SSSV報告

Bom dia. Japão.

歯学科6年 金子 和 幸

2018年2月17日10:50AM NH174便に搭乗して私たちのSSSV (Short Stay Short Visit) は始まりました。

私たちはどこへ向かったかと申しますとブラジルはピアウイ州テレジーナというところへ同じく歯学科6年の飯島翼、清水優太とともに行って参りました。

2018年2月といえば、日本（新潟）では日々豪雪と格闘していた毎日でしたが、景色は一変し夏真っ盛りで日中には40℃にも達する場所でした。

はじめに現地大学でどのようなことを行なっていたかを簡単に説明いたします。

到着早々に夕食会場に招待され、私たちが訪れたユニヴァーファピ（ノヴァファピ大学）の学部長や教授陣らと共に時間を過ごしました。

そこで前田学部長からアグレッシブに楽しんでくるように、三人で日本語を話すよりも英語でブラジル人とコミュニケーションをとるようにと、ありがたい激励をいただいたのを鮮明に記憶しています。

翌日から留学プログラムがスタートし、オリエンテーション（地元テレビ局の取材付き）を経て学生が行う臨床実習を見学、一部実施致しました。

現地で学生が行なっている歯科治療は日本と比較してと大きな差異はないものの学生の診療介入度はブラジルの学生の方が深い印象を受けました。

実際に見学した診療内容は補綴、歯内、口腔外科、矯正、歯周、小児が主体で、滞在期間中にそれぞれ2度見学することができました。一週目は主に見学主体で、二週目から基礎的な治療をやらせていただきました。

私たちが実施したのは、PMTC、手用スケーリング、抜歯後縫合などでした。

次にブラジルでの休日の過ごし方、大学が終わってからの過ごし方について触れていこうと思います。

休日（土日）は現地学生とともに昼食（シュハスコ）を食べ、ショッピングモールに行き、夕ご飯にピザやシュハスコを食べるという生活をしていました。

出発前はお腹を下すことを心配していましたが、実際は便秘で三人ともかなり苦しんだのも良い思い出です。

初日に頂いた前田学部長からのアドバイスも実践したことが功を奏したのか、かなり多くの友人ができました。

さらにコミュニケーションをとることで判明したことがあります。現地学生は意外と英語が話せない。HelloやGoodなども通じない学生がいたのは驚愕しましたが…結局Google翻訳にあやかり、言語が通じない環境でも身振り、手振りなどでうにか意思疎通できた時の喜びは大きく、言語というツールを用いなくても人と人は繋がっていきけるということを身を以て体験した非常に有意義なSVであったのではないかと振り返ります。

また、このような貴重な経験を与えてくださった、新潟大学の先生方、渡航前にお世話になった石田先生、ブラジルまでの遠い道りを引率して頂いた前田学部長、ブラジルでお世話になったDr.Fabricio,Dr.Thiagoに深く感謝いたします。

最後になりますが、日本からブラジルへのSVやブラジルから日本へのSSが途切れることなく永きに亘り続いていくことを願い、ブラジルSV体験記とさせていただきます。

Obrigado!!



筆者真ん中



現地学生との写真



シュハスコ（有名な部位であるセブ牛のコブ）



チェンマイ大学を訪問して

歯学科5年 小林 由奈

「微笑みの国」という言葉がこれほどぴったりだなんて。タイを訪れた初日からそう実感した。タイの学生は、いや、タイに住んでいる人はみなと言うべきだろうか、非常に親切で、道行く人も目があえば笑顔になってくれた。タイ語を覚えたことが嬉しくて誰にでも挨拶をする私たちに、必ず挨拶を返してくれた。毎日が新しい発見ばかりで、刺激的で、貴重な体験ができた10日間だった。英語力や歯学の知識への不安はあったが、もっと様々な国を見てみたい、自分の可能性を広げたいという気持ちが勝り、昨年度短期留学への参加を希望した。留学を終えた今、このプログラムに参加してよかったと心から思っている。

今回のプログラムでは、大学病院の見学だけでなく幼稚園や施設へ行き、タイと日本の文化を教えあったり、歯科検診や歯磨き指導を行ったりする機会も多かった。治療現場の衛生面が良いとは言えない場面や、自分の歯ブラシを友達の中に入れて床を磨いてしまったりという子供を目の当たりにしたことは事実だ。両親が共働きといった家庭環境などが原因で、ほぼ全てが残根状態という子供もいた。日本ではあまりみかけないケースがその国の環境、生活、食事などにより表れていることを感じた。もちろん日本もタイを見習うべきという点はあったが、日本の環境の良さや恵まれている国なのだとすることを改めて実感した。

現地の学生は積極性や向上心が強く、歯科について多くを知っているだけでなく日本について多くを知っていたり、知りたがっていたり、日本語を話せる学生もいた。早いうちから臨床実習を行える環境があり、経験が積めるということに自分の置かれている環境との違いを感じた。そのような学生と毎日コミュニケーションをとる中で、自分の無知さを実感するとともに、日本について私は何を知っているのか、まずは自国についてもっと知る必要があるのではないかと痛感した。

三大学合同だったこともあり、国内の学生とも交流ができた。他大学のことを知り、良い刺激を

受けられるのもこのプログラムの醍醐味だと思う。“〇日後までに日本の歌とダンスを覚えて披露してね！”と言われた時にはさすがに驚いたが、現地で練習したかきがあり、タイの方々と一緒に踊ったり歌ったりした瞬間は一生忘れない思い出となった。また、タイでお世話になった学生が新潟大学へ短期留学をしに来たため、再会できるという喜びを感じた。もし留学に対し少しでも興味があったり悩んだりしている人はぜひ参加すべきだと強く勧めたい。他国の歯科医療について知るだけでなく、日本のことや自分自身を見つめ直すきっかけになるはずだ。

最後に、このプログラムへ参加させてくださった先生方、両親、そして一緒に学んだ仲間、タイで出会った方々に心から感謝している。タイでの経験を活かし、広い視野を持った歯科医師になれるよう、これからも勉学に励みたい。



タイの学生と共に



新潟大学の学生と終了証

ベトナム・ハノイ医科大学訪問記

歯学科3年 草 塩 奈 央

今年の3月に、日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度（短期派遣）プログラムの参加学生として、ベトナムのハノイ医科大学へ短期留学をさせていただきました。私は国際交流が充実していることを決め手に新潟大学を受験し、低学年のうちから海外留学に行きたいと考えていました。口腔外科に少し興味があり、ハノイ医科大学では口腔外科の手術を見学できると聞いていたので、ハノイ医科大学に派遣希望を出しました。

ハノイはベトナム北部に位置する首都で、古い寺院やフランス統治時代の建造物が多く残っている、政治と文化の都市であると同時に中国とフランスが融合している都市でした。ハノイ中心部では、オートバイや自動車で混雑しており、接触事故をよく見かけました。

ハノイ医科大学は1961年に設立された国立大学で、歯学部は日本と同じく卒業まで6年間です。歯学部校舎では、4年生以上が技工実習や臨床実習を行っていました。大学の隣にはハノイ医科大学病院があり、歯科としては口腔外科と総合診療科があり、いつも患者さんでいっぱいでした。

滞在中のプログラムとしては、4年生以上の技工実習や臨床実習の見学や、大学病院での口腔外科の手術や総合診療科の見学などをさせていただきました。口腔外科の手術で、私は初めて手術着を着てバキュームなどの手術の介助という貴重な経験もさせていただきました。1つの部屋に性別関係なしに多くの患者さんが入院しておられて、やはり交通事故外傷の患者さんが多く、舌癌や嚢胞、顎関節症の手術患者さんや、一度に4本の親知らずの抜歯をする患者さんもいました。

留学前の私は、ベトナムの交通事故外傷が多いのは、オートバイや自動車の交通量が多いためであると考えていましたが、留学中にほとんどの事故の原因は、アルコール摂取による飲酒運転で、自分自身が怪我をするか、道路に横断中の歩行者をひいてしまうことで引き起こしていることがわ

かりました。また、オートバイで、2人乗りは当たり前前で、ヘルメットを着用していない人も見かけました。ヘルメットも日本では考えられないくらい軽くて薄いので、特に顔面の複雑な骨折が目立つのだと思いました。

現地の学生はみんなとても優しく、お昼寝タイムを含めた2時間のお昼休みに、オートバイに乗ってハノイで有名なお店に連れて行ってもらいました。毎日の放課後や休日にホアンキエム湖やナイトマーケットなどハノイの有名な観光スポットも案内してくれました。ベトナム料理はどれも美味しく、麺の種類が豊富で驚きました。

今回の留学では、2年生であまり歯科の知識がない状態でしたが、同行して頂いた先輩に多くのことを教わり、歯科の知識を少しでも身につけられたと思います。また、自分の英語力のなさを痛感し、歯学の勉強だけでなく、英語もしっかり勉強したいと思いました。このような貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。



ハノイ医科大学の学生との写真



farewell partyでの写真

大学院に行こう

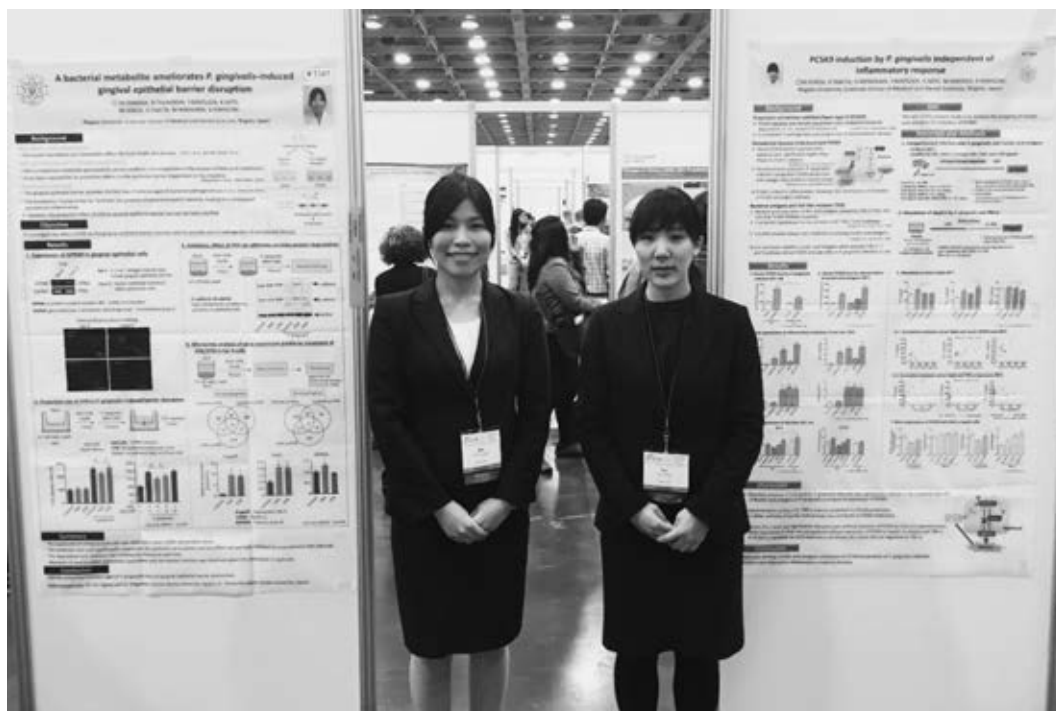
歯周診断・再建学分野 山田実生

はじめまして、歯周診断・再建学分野大学院4年生の山田実生です。今回原稿執筆依頼をいただきましたので、私が大学院進学を決めたきっかけや、これまでの大学院生活を振り返っていきたいと思います。将来のことを考え始めた学生さんが大学院を選択してくれる一助になれば嬉しく思います。

私は新潟市出身ですが、北海道大学歯学部に進学しました。学部生時代に大学院進学を勧められたこともありましたが、学部と合わせて10年間を大学生として過ごすことは考えられず、漠然と開業医で働く未来を想像して地元新潟大学医歯学総合病院のAコースで臨床研修を行いました。

研修中はやはり臨床指向が強くなり、はやく経済的にも独立したいという思いも手伝って、開業

医に勤務するつもりでいました。しかし大学で県外に出ていたこともあり知り合いの先生はおらず、もしここで決めてもその先生と合わなかったらきちんと学ぶことができないのではないか、と思い悩みなかなか勤務先を決めることができませんでした。次第に、歯科医師としての基盤となる考え方や、人間関係をしっかりと築きたいと思うようになり、大学院進学を考え始め、各科の説明会に参加して歯周科へ入局する道を選びました。歯周治療は歯科治療のスタートに位置し歯科治療の基盤であるのみならず、歯周疾患の管理が生活習慣病の予防に寄与できること、歯周一全身プロジェクトの研究成果が新聞に取り上げられていたこと、大学ならではの手術症例に多く触れられること、そして経済的に独立することも可能と伺っ



アメリカで行われた国際学会にて同期と。筆者は左

たことが大きな決断の理由になりました。

さて、大学院に進学するとまず臨床に関して心配する方も多いと思いますが、歯周科の場合は、多くの症例に触れることができます。自身では認定医取得に向けた患者を担当しますし、指導医や先輩方の外来診療・手術のアシストをしながら間近で見せていただき勉強することができます。さらに毎週の医局会では学生症例や、先生方の症例報告があり、治療方針や実際の経過などを見ることができ、根拠を持った治療計画立案をしっかりと学ぶことができます。

次に研究って何をしたらいいのかわからない、と躊躇っている方も多いと思います。私自身もその一人でした。しかし、研究テーマをいただき、疑問点を挙げそれを明らかにする手技の一つ一つから解析方法、学会発表に至るまで、指導医の先生をはじめ先輩方に懇切丁寧に指導いただきました。そして、これまでに国内外の学会で4回発

表させていただき、第65回国際歯科研究学会日本部会（JADR）総会・学術大会においては2017年度JADR/GC学術奨励賞をいただくこともできました。ご指導いただいた先生方には心より感謝申し上げます。

自分は教授になりたいとか海外に留学したいとか、はっきりとした目標がなくても大学院に入ってみると様々な場面で各分野の優秀な先生方から学ぶことができたり、留学生と交流できたり、海外の学会に参加したりすることができ、自分の力だけでは成しえない、素晴らしい経験をすることができます。卒業後、また進路について迷う日が来ると思います。しかし今振り返ってみると、どの道に進むことになるとしても大学院で過ごした日々は何物にも代えがたく、進学してよかったと思います。進学を迷っているという方は是非大学院の扉を開いてみてください。



大学院に行こう

摂食嚥下リハビリテーション学分野 吉原 翠

摂食嚥下リハビリテーション学分野大学院3年生の吉原翠と申します。

「大学院に行こう」というテーマを頂きましたので、大学院での勉強や生活についてご紹介します。大学院への進学を考えている学生・研修医の皆さんの参考になれば幸いです。

私はもともと摂食嚥下に興味がありましたが、学生の頃は大学院への進学についてはあまり考えていませんでした。大学院での生活がどのようなものかも分からず、4年間学生として過ごすことに不安もありました。そのため、まず大学卒業後の研修先として新潟大学のAコースを選択し、歯科総合診療部で1年間の臨床研修を行わせていただきました。

総合診療部で研修させていただきながら将来について考えたとき、折角興味のある分野が新潟大学の講座にあるのだから、そこで摂食嚥下についてより深く学びたいという思いが強くなりました。また、先生方のお話を伺って研究に興味を持ったこともあり、大学院への進学を決めました。

大学院に入学してからは、まず病棟での患者さんの診療に参加させていただきました。

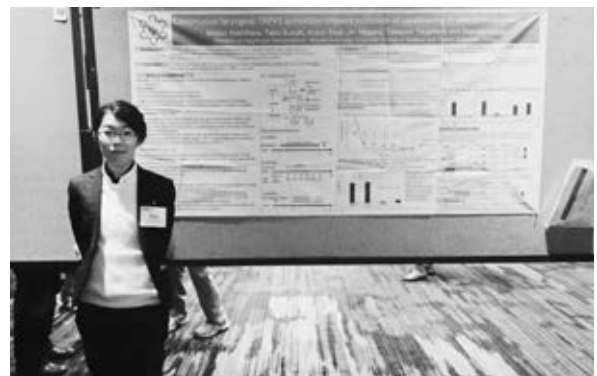
摂食嚥下リハビリテーション学分野では、複数の診療チームに分かれて嚥下障害のある患者さんを診療します。主に介入するのは入院中の患者さんですが、退院後も当院へ通院される方であれば、外来でのフォローを行う場合もあります。

嚥下障害の背景となる病態はさまざま、疾患について、またその疾患から嚥下障害が生じる原因についてなど、勉強することは非常に多くあります。摂食嚥下に関わることになった直後はもちろんのこと、3年生になった今もまだまだ勉強することばかりですが、先生方にはいつも丁寧にご

指導いただいています。

臨床の他、大学院生の重要な仕事として研究があります。先生方から与えられたテーマを通して、少しずつ研究の手順や思考の方法を学んでいきます。

私は動物実験を行っていますが、研究を始めたばかりの頃は動物の扱い方も器具の使い方も全くわかりませんでした。ですが、先生方や先輩がーから全て教えてくださり、徐々に一人で実験を行うことができるようになりました。学生の頃は基礎研究と臨床とは直接関係しないように思っていました。ですが、実際に自分で実験を行うように



国際嚥下医学会 (Dysphagia Research Society, DRS) (米国、ボルチモア) でのポスター発表



国際シンポジウム (タイ、サムイ島) での発表、筆者左。

なると、一つの事柄を説明するためにいくつもの仮説を立て、その証明のために多くの実験が行われているのだと知りました。

大学院への進学に関しては学費や期間の面から、躊躇することもあると思います。ですが、自

分の興味のある分野を深く学び、また学ぶ方法について習得できるこの時間はとても有意義なものであると思います。

もし大学院や研究について興味がありましたら、様々なハードルがあるかと思いますが、前向きに考えていただければ嬉しく思います。



大学院へ行こう

口腔生命福祉学専攻博士前期課程2年 渋木 瞳

口腔生命福祉学専攻博士前期課程2年の渋木瞳と申します。今回、「大学院へ行こう」というテーマを頂きましたので、大学院へ進学したきっかけや大学院生活についてご紹介したいと思います。拙い文章ですが、お許しください。

私は2017年3月に新潟大学歯学部口腔生命福祉学科を卒業し、その後、口腔生命福祉学専攻へ進学しました。現在は、摂食嚥下リハビリテーション学分野の諸先生方のお世話になりながら、病院で嚥下障害を持った入院患者さんの臨床に携わりながら大学院生活を送っています。

大学院というと研究をするところ、頭がいい人が行くところというイメージがありましたので正直、こんな私が行っていいものかと最初は躊躇しました。しかし、学部時代には摂食嚥下リハビリテーションについて勉強する機会があまりなく、この分野を勉強してみたいという考えがあり、お世話になっている先生方に背中を押され、大学院へ行くことを決意しました。

私の所属する口腔生命福祉学専攻は歯科分野だけでなく、社会福祉学分野についても広く学ぶことができるのが魅力であり、福祉分野の知識は臨床でとても役に立っています。同期には社会福祉士として働く仲間もおり、一緒に授業を受ける中で日々、刺激をもらっています。

さて、大学院生活で大きな割合を占めるのは研究だと思います。私の場合は入学してすぐに研究

テーマが与えられ、データ採取が始まりました。最初は右も左もわからない私に丁寧にご指導くださった先生方にはとても感謝しています。現在は、「身体的フレイル患者に対する歩行機能訓練は口腔・嚥下機能を改善するか？」というテーマで研究を進めています。データ採取の中で高齢者に関わる時間も大学院生活の中で楽しい時間があります。正直、研究といったものに最初はそこまで興味がなかった私ですが、研究を進めくうちに新しい知見を得ることができ、喜びを感じています。また、毎回ドキドキの学会発表ですが、他大学の先生の興味深いお話を聞くことができ、知識を深めることができます。そして何よりも自分の研究を客観的に見てもらえるので新たな目標を持つことができます。

早いもので大学院に進学して1年と3か月が経ってしまいました。私自身、大学院へ進学して自分の持つ世界が広がったと感じており、普通に就職したらできなかったことをたくさん経験させていただきました。このような素晴らしい環境で学べることに感謝しながら残りの大学院生活に励んで参りたいと思います。

最後になりましたが、大学院進学はお金も時間もかかるのでいいことばかりではありませんが、とても価値のある経験になると思います。進学について少しでも興味があるようでしたら、前向きに考えてみることをおすすめします。

研修医プログラムを修了して

研修医プログラムAを経験して

予防歯科学分野 市川 優

予防歯科学分野大学院1年の市川優と申します。昨年度はAコースにて臨床研修をしておりました。今回、「研修医プログラムを経験して」というテーマで執筆する機会をいただきましたので、1年間の臨床研修について振り返り、ご紹介いたします。

Aコースは歯科総合診療部で行う研修で、患者さんの主治医として治療計画の立案から実際の治療、その後の定期管理を行うという内容です。一般的な歯科治療はもちろん、やる気次第で応用的な処置についても何でも経験することが出来ます。私は学生の時から予防歯科学分野の大学院に進学するつもりでいました。他の専門診療科と比較して臨床からは離れがちな分野ですが、臨床の広い知識や経験は必要になるという思いで研修先はAコースを選択しました。

研修中は治療計画立案の相談や診療前のプレチェック、診療中のアドバイス、診療後のフィードバックなど、指導医の先生方からご指導いただける機会が多くあり、医局や大学院、レジデントの先生方にも多く相談に乗っていただきました。その度に新しい知識や、技術、考え方に触れることができ、当初の狙い以上に臨床についての技能を修得できていたと思います。日々、自身の成長を実感する一方で、学ぶことには終わりが見えず、自分の未熟さについても常に身に染みて感じていました。

Aコースには研修医の同期が多くいて、昨年度は21人で研修を行っていました。研修医控室では、研修医同士ではなかなか答えの出ない臨床的

な話し合いをしたり、歯科とは一切関係ない話題で大盛り上がりしたりしてとても楽しい時間を過ごしていました。

大変充実し、知的好奇心をくすぐられ、研鑽に励む毎日でしたが、それでもたった1年間の研修期間では総診で会得できることの幾分も自分のものに出来ていないと思います。それほど総診は得られるものが広く深く、望めば望むだけステップアップできる素晴らしい環境でした。

総診で学んだ臨床スキルは早速この4月から大学病院や出張先の診療で大いに役立っています。総診の先生方や同期の研修医から受けた数多くの刺激は今後の研究や臨床に生きることと思います。昨年度の全ての経験を糧に自分の進んだ道で精進を重ねていく所存です。

実りある研修生活を送ることが出来たのは研修医の指導に多大な時間を割いてくださった先生方と研修の環境を整えて下さった方々のおかげだと思っております。最後になりますが、素晴らしい臨床研修を提供して下さいましたすべての方々に心より感謝申し上げます。



筆者前列真ん中

研修医プログラムを経験して

歯科麻酔学分野 今井有蔵

初めまして、歯科麻酔科大学院1年の今井有蔵です。私は、2017年3月に本学を卒業後、4月より1年間新潟大学医歯学総合病院で研修をさせていただきました。ここでは、私が新潟大学医歯学総合病院歯科医師臨床研修プログラムB（以下Bコース）での研修経験を通して、学んだことを書かせていただきたいと思います。

まずBコースとは、半年が協力型診療研修施設で、残り半年が新潟大学医歯学総合病院専門診療科で研修を行うコースです。私は、新潟大学だけではなく、外部病院でも研修をしたいと考え、Bコースを選択しました。私の場合は、4-9月は富山県立中央病院で、10-3月は新潟大学歯科麻酔科で研修を行いました。

前半の富山県立中央病院では歯科口腔外科での研修でした。もともと外科処置に恐怖感を感じていた私は、病院歯科での研修を通して、外科処置に少しでも自信を持てればと考え、富山県立中央病院で研修を行わせていただきました。そこでは、外科処置や病棟管理が大半の仕事でしたが、入院患者の一般治療なども経験することができました。また、経験した症例のケースレポート執筆投稿や、周囲の開業歯科医との症例検討会などにも参加し、多くを学ばせていただきました。その中でも特に記憶に残っているのが、転落による外傷で救急搬送されてきた患者さんの外科処置です。歯科医師になりたての私にとっては、とてもショッキングな現場ではありましたが、4月に経

験したことで、外科処置に対する恐怖感をなくすことができた貴重な経験だったと思います。今後の歯科医師人生でも、この経験を忘れずにしっかり活かしていきたいと思っています。

後半は歯科麻酔科での研修でした。学部学生のころから、ずっと歯科麻酔に興味があったので、後半は歯科麻酔科で研修を行わせていただきました。学生のときは見学がメインでしたが、研修では実際に麻酔導入・維持・覚醒などを経験させていただくことができました。ライン確保や挿管操作、全身的疾患や薬剤など、慣れないことばかりでしたが、多くを学ばせていただきました。しかし、まだまだ勉強不足なことばかりだと思います。今年から歯科麻酔科に入局し、臨床や研究を通してしっかりと勉強してきたいと思っています。

最後に、ご指導してくださった先生方や、歯科衛生士、看護師の方々、同期の研修医に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。そして今後ともよろしく願いいたします。



写真（下段中央）

学会受賞報告

第60回日本顎口腔機能学会学術大会優秀賞

第60回 日本顎口腔機能学会学術大会 優秀賞を受賞して

摂食嚥下リハビリテーション学分野 竹井 絵理

この度、平成30年4月21、22日に鶴見大学で開催されました第60回日本顎口腔機能学会学術大会において、優秀賞を受賞しましたのでご報告致します。今回、『米飯摂取時の食塊物性と筋活動特性』という演題にて、米飯摂取時の食塊物性と生体記録を並行して行い、嚥下時の食塊物性に絶対閾値が存在するか否か、これらの記録に世代間の差があるか否かについての実験結果を発表しました。

私は、学部学生時代には農学部で天然物有機化学を学び、企業では介護食品のテクスチャーについて研究開発をするなど、これまでヒトを対象とした研究の経験は皆無でした。摂食嚥下リハビリ

テーション学分野に在籍して以降、口腔内に入った後の食品のテクスチャーの変化や、健常者でさえも個人間で大きく異なる咀嚼嚥下機能について知ることがどれほど大事かを痛感し、新たな気持ちで学んでいるところです。

今回の受賞を励みに、今後の実験に精進いたします。データ採取から解析・発表に至るまで分かり易くご指導下さいました井上誠教授をはじめ、若年者データをまとめられた前田留美子先生、また医局先生方、ご協力いただいた被験者の皆様に心より御礼申し上げます。また、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願いいたします。



日本顎変形症学会学会賞受賞講演を終えて

歯科矯正学分野 高橋 功次朗

こんにちは。矯正歯科の高橋と申します。この度、今年の春に驚くべき連絡（メール）が私の元に届きましたことをご報告いたします。事務局からのメールは私が以前投稿し、掲載された論文が学会賞を受賞したので、6月に開催される第28回日本顎変形症学会学術大会にて招待講演として、受賞記念講演を是非お願いしますとのことでした。場所は大阪であり馴染みがない場所なので、参加させていただく分にはありがたいなと思いました。しかし、私は昔から人前に出て何かプレゼンするのが苦手というか、あまりそういった機会もなかったので、数ヶ月後の発表のことを思い、早くも緊張感マックスの状態となりました。また、私の学位研究は基礎系でしたので、ほぼ初めての臨床研究がこのような譽れに預かることになろうとは夢にも思いませんでした。論文タイトルは「骨格性下顎前突症例における下顎単独後退術の下顎後退量の左右差と正中部移動量との関係」というなかなかマニアックなものです。再度緊張してきました。というのも、通常、論文を読んでもくださる方は興味があって検索し、読んでくださるといった流れなのでしょうが、本番当日は色々な先生方がいらっしゃる中でわかりやすく伝えなければならないミッションだなと思ったからです。さて困りました。しかし、一番初めにこの研究を始めるきっかけとなったエピソードから思い出し、プレゼンテーションを作るしかないなと腹をくくりました。以下回想です。

ある日の深夜。技工室にて、私は顎変形症の患者さんの診断に関していつものように頭を悩ませておりました。そこにふらっと先輩である丹原先生が現れました。そこで私はありったけの疑問をぶつけました。その中で一番分からなかったのが、外科的矯正治療において、下顎単独後退術に

て下顎を後方に下げる量に左右差のある症例の場合、下顎骨はどのような移動様相を示すのか？と。丹原先生も経験的にはこのくらいかなとアドバイスをくれましたが、なかなか納得していない私を見るに見かねて言いました。「はっきりとしたことはわからないから一緒に研究してみる？」と。しめたものです。この瞬間一人の研究協力者かつ共著者を獲得しました。

以上ざっくりとしたエピソードでした。そこからは、試行錯誤の連続でたくさんの先生方のお力をお借りし、何とか論文を投稿し、受理されました。本番当日までプレゼン内容をブラッシュアップし、講演の日を迎えました。当日は予想してい



たよりもはるかに多くの方が会場にきていて、自分の出番前にもかかわらず早くも口腔内の水分がゼロになりました。緊張しいの私ですが、どうせやるなら聞いてくださる方に分かりやすく飽きずに聞いてもらえるようゆっくり、はっきりと聞き直って講演を行いました。最後に今回の講演は私

にとって非常に貴重なものとなりました。講演を終えてみて自分の臨床研究が大きな学会で認めていただいたことにより、今後の研究に対するモチベーションの向上につながりそのことが一番の財産ではないかなと感じております。



平成29年度新潟歯学会奨励賞を受賞して

歯科矯正学分野 中 田 樹 里

この度、平成29年度新潟歯学会において、奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。今回受賞した演題名は「ROCK阻害剤の骨代謝および矯正学的歯の移動への影響」です。

全身の骨組織は破骨細胞と骨芽細胞が常に均衡を保ちながら働いており、絶えずリモデリングが行われています。一方矯正歯科治療による歯の移動では、歯に矯正力を加えることで歯根膜に圧迫側と牽引側を人為的に生じさせ、圧迫側では破骨細胞による骨吸収が、牽引側では骨芽細胞による骨添加が引き起こされます。このため矯正歯科治療には円滑で効率的な骨代謝が極めて重要であり、薬剤により活発な骨代謝が引き起こされれば、効率的な歯の移動に応用することが期待できます。骨代謝に影響を与える薬剤を探索するために行いました化合物スクリーニングでは、破骨細胞分化を促進する有効な薬剤をいくつか見出しました。その中で分化促進効果の高かったROCK阻害剤は骨芽細胞分化の促進効果もありました。ROCK阻害剤は細胞の運動や収縮に関わる様々な機能をもつリン酸化酵素であり、現在循環器疾患治療薬として使用されているものもあります。ラット頭蓋骨正中欠損修復モデルを作製し、本薬剤の骨形成への影響を解析したところ、骨欠損部の骨形成促進が観察された。また、本薬剤の歯の移動への影響を評価するため、ラット矯正学的歯の移動モデルを作製したところ、局所投与下では

歯の移動促進傾向が観察された。これらの結果から、ROCK阻害剤は破骨細胞および骨芽細胞の分化を促進することで骨代謝回転を高め、骨形成の促進、局所投与による歯の移動促進効果の可能性も示唆された。本研究成果は全身の骨疾患や矯正歯科治療での局所投与において、今後の新たな治療薬の開発につながると期待されます。

本研究では骨組織に関する知識や実験の手技など、一から学ぶことばかりでしたが、いつも丁寧にご指導をいただきました先生方には大変感謝しております。最後になりましたが、歯科薬理学分野の佐伯万騎男教授、柿原嘉人先生、齋藤功教授をはじめとする歯科矯正学分野の先生方ならびにご協力をいただきましたすべての先生方に心より厚く御礼申し上げます。



平成29年度 公益社団法人 日本小児歯科学会 町田賞“優秀論文賞” および平成29年度PEDIATRIC DENTAL JOURNAL優秀論文賞を受賞して

小児歯科学分野 齊 藤 一 誠

論文課題名：

Unilateral open-bite caused by an impacted primary molar with ankylosis: A case report

共著者名：

Issei Saitoh, Satoshi Fukumoto, Yoko Iwase, Haruaki Hayasaki, Youichi Yamasaki

この度、第56回日本小児歯科学会大会および総会におきまして、平成29年度 公益社団法人 日本小児歯科学会 町田賞“優秀論文賞” および平成29年度PEDIATRIC DENTAL JOURNAL優秀論文賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

まずは本賞の趣旨について少し説明させていただきますと、町田賞とは、第5代日本小児歯科学会会長町田幸雄先生からのご寄付を原資とした賞です。小児歯科における特に咬合誘導に関する臨床研究を推奨することで、小児歯科学の研究を盛り上げていきたいとの町田先生のご意志が込められた賞で、今回我々の論文が受賞できたことは大変名誉なことだと感じております。さらに本論文は、日本小児歯科学会の英文機関誌Pediatric Dental Journalより、平成29年に掲載された論文の中で最も優秀な論文として評価をいただき、幸いにも両賞をダブル受賞させていただきました。

小児期の咬合誘導（咬合育成）では、適切な時

期に不正咬合および口腔機能発達不全を診査・診断し、成長発育を考慮しながら治療・対応することで、早期に健常かつ最適な口腔環境へ導くことが重要となります。我々は、骨性癒着のある低位乳歯によって惹起されたと考えられる臼歯部開咬症例について、動的咬合誘導と静的咬合誘導を併用し、悪習癖をコントロールしながら、且つ側方歯の交換時の萌出力を利用し、健全な永久歯列を導きました。本論文は咬合誘導の概念に正に合致し、小児歯科臨床に携わる多くの先生方に参考にしていただけないのではないかと考えております。

末筆になりましたが、本症例の診断・治療・論文作成に多大なご指導・ご尽力を賜りました鹿児島大学山崎要一教授をはじめ東北大学福本敏教授、当分野岩瀬陽子先生、そして平素より大変お世話になっております早崎治明教授にこの場をお借りして感謝申し上げます。



右から早崎治明教授、本人

日本小児歯科学会 平成29年度町田賞 研究奨励賞を受賞して

小児歯科学分野 岩瀬 陽子

この度、第56回日本小児歯科学会大会および総会におきまして、公益社団法人 日本小児歯科学会 平成29年度町田賞 研究奨励賞を受賞致しましたので、ご報告させていただきます。

この賞は、我が国の小児歯科において咬合誘導のパイオニアである、元東京歯科大学教授町田幸雄先生の学会へのご寄付を原資に平成26年度に新設された賞です。小児歯科の臨床研究、とくに咬合誘導に関する研究がその対象となっています。小児の咬合誘導に関しては、パイオニアである町田先生も多くの著書で臨床的知見を述べられていますし、もちろん小児歯科学の教科書にも載っている事項ではありますが、昨今、evidence-based dentistryの概念が広がり、それと共にこの分野の臨床的研究はやや縮小傾向にあると思われます。この賞の創設には、このような現状を憂い、切り開いた道を後進に引き継いで欲しいという願いが込められていると私は解釈しております。私が受賞させて頂いた研究奨励賞は、既に結果が出て発表に至っている町田賞・優秀論文賞や優秀学会発表賞と異なり、研究申請書によって評価される賞であり、今から進める研究に対して与えられるという、他の賞とは少し毛色の異なった賞です。

今回私は「小児における過剰歯の有無が歯列形態に与える影響」という課題名で受賞させて頂きました。今まで過剰歯に関連する基礎的研究も行ってきましたが、その理由として、小児歯科の

日常臨床において遭遇する機会が多く、廃棄される運命にありながらも比較的簡単に健全な歯髓細胞が採取できるというメリットが挙げられます。そして、同じ素材を用いて臨床的な研究へと広がりを持たせる研究が今回の受賞課題です。

基礎から臨床まで幅広く紐解いていくことで、咬合誘導だけでなく広く小児歯科臨床に貢献できるよう、本研究を遂行したいと思います。最後になりましたが、平素より多大なるご指導・サポート下さいます当科早崎教授ならびに医局員の皆様に深謝いたします。



第15回日本歯科医学教育学会優秀論文賞

歯学教育研究開発学分野 佐藤 拓実

この度、日本歯科医学教育学会雑誌に投稿した論文「研修歯科医の臨床技術修得における力のコントロールに関する研究」が第15回日本歯科医学教育学会優秀論文賞を受賞し、第36回日本歯科医学教育学会総会および学術大会にて表彰を受けましたのでご報告申し上げます。本論文では、歯科治療時に術者が患歯、あるいは患部に加える力の大きさを計測、解析することで、研修歯科医が臨床研修を通じて力のコントロールを学ぶことを検証しました。内容は、実習用ファントムに連結した計測デバイスを用いて、ポケット検査、歯肉圧排、SRP、抜歯、FMC装着、義歯印象を行う際に研修歯科医がマネキンに加える力の大きさを記録し、研修初期（6月）、研修後期（2月）の変化を調査したものです。結果として、抜歯や義歯印象など比較的大きな力を要する処置について変化が認められ、研修初期と後期では後期の方が扱う力の幅が大きくなり、各処置に対して明確に力を使い分けるようになったことが示されました。

歯科治療は長らく経験の上に成り立つものでした。しかしながらEBMが提唱されて以来、歯科界においても治療の科学的裏付けが叫ばれるようになりました。また、他方では「腕のいい歯科医師に診てもらいたい」という患者のニーズも高まっているように感じられます。このような状況にあって、歯科治療の成否、また治療技術の巧拙

について客観的評価、また量的評価を行う方法は確立されておらず、多くは主観的、あるいは質的評価に留まっているのが現状です。当分野では上記のような評価法や手技、またそれらの教育方法について研究を行っています。

昨年度の第14回日本歯科医学教育学会優秀論文賞も当分野の奥村暢旦講師が受賞しており、2年連続の同大学・同分野からの受賞ということで、大変誉れ高く感じるとともに今後の大きな励みになっています。

最後に本論文をまとめるにあたり、指導教員である藤井規孝教授を始め、歯学教育研究開発学分野の先生方に多大なご指導を賜りましたことにつきまして、心よりお礼申し上げます。



平成29年度 新潟歯学会学術賞 受賞報告

う蝕学分野 枝 並 直 樹

この度、「ラット臼歯断髄後におけるMyofibroblastの動態解析」の演題において平成29年度の新潟歯学会学術賞を頂くことができましたので、ご報告をさせていただきます。

今回私たちは、Myofibroblastと呼ばれる細胞に着目して歯髄創傷治癒過程での動態を検索しました。この細胞は1970年代より皮膚の創傷治癒時または心臓、肝臓、腎臓、肺等の病的線維化時に細胞外基質の産生に関与する細胞として知られてきました。歯髄の創傷治癒すなわち修復象牙質形成時も、細胞外基質産生は、その主体をなす反応でありますので、同様にMyofibroblastが関与しているのではないかと仮説を立てました。

幸いう蝕学分野には、ヒトはもちろんのことラットの歯科処置も名医である吉羽邦彦先生がおりましたので、先生からのご指導により、小さなラットの臼歯でもヒトと同様の処置が可能となり、多角的に研究を行うことができました。

その結果、免疫組織学的解析からはMyofibroblastに特徴的な α -SMAと呼ばれるタンパク質の陽性細胞が修復象牙質形成の直前に増加していることが確認されました。また経時的な遺伝子発現解析から α -SMA陽性細胞の出現に先立ち、Myofibroblastの分化誘導因子として知られるTGF- β 1およびEDA-fibronectinの発現が一過性に上昇していることがわかりました。これらは、歯髄創傷治癒においてもMyofibroblast様の細胞が関与していることを示唆しています。

近年では、より有効な歯髄保存療法開発のため成長因子を応用する等の生物学的アプローチが多数検討されています。今回明らかになったMyofibroblast様の細胞は生物学的アプローチを検討する上で標的となりうると考えられ、新たな治療法開発への発展が期待されます。

私事になりますが、今回、高校生の時からの同級生である中田樹里先生と同時に賞を頂けましたことをとても嬉しく思っています。今後も協力でき、刺激となる関係を続けさせていただきたいと思っておりますので、中田先生、どうぞよろしく願いいたします。

最後になりましたが、厚いご指導をいただきました野杵由一郎教授ならびに吉羽邦彦・永子先生を始めとしたう蝕学分野の先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。



第30回日本顎関節学会総会・学術大会 最優秀ポスター賞

顎顔面口腔外科学分野 大学院4年 中谷暢佑

第30回日本顎関節学会総会・学術大会（2017年7月29-30日、横浜市）で、最優秀ポスター賞をいただきました。演題名は「セロトニン再取り込み阻害薬は繰り返しストレスにより咬筋の侵害受容反応の増強を抑制する」です。

私たちは、日々さまざまなストレスにさらされています。そんな時、頭が痛い、肩が痛い、顎が痛い、歯が痛いなどを感じたことのある方は少なくないと思います。これまでの研究により、ストレスは痛みを引き起こすことがわかっています。そして痛みのメカニズムは、痛みを処理する脳機能の変調が考えられています。私は、縁あって一昨年より口腔生理学分野で岡本准教授に師事し、心理ストレスが顎関節部の痛み反応に影響を与える脳メカニズムを研究しています。具体的には顎顔面領域での痛みの伝達処理に関与する三叉神経脊髄路核尾側亜核（通称Vc）を対象に、痛みに対するストレス効果を形態学的、行動学的手法を用いて検討しています。今回の発表では、ストレスはVc領域の興奮性を増大させることで、咬筋の侵害応答を増強すること、増大した咬筋侵害応答は、抗うつ薬（セロトニン再取り込み阻害薬）

によって改善されることを解明しました。これらの所見は、ストレスが脳内セロトニン機構を変調させ、顎顔面部の痛みを増強させることを示唆します。私たちは本研究成果の一部をExperimental Brain Researchに発表しました。今後もこれらの実験をより発展させることで、治療が困難な慢性疼痛に対する有効な治療法の開発につながればよいと思っています。

最後になりましたが日々多大なるご指導をいただいております口腔生理学講座 岡本圭一郎准教授、黒瀬雅之先生、山村健介教授、そして顎顔面口腔外科学分野 高木律男教授にはこの場をお借りしまして深く感謝申し上げます。



日本口蓋裂学会 優秀ポスター賞受賞報告

歯科矯正学分野 市川 佳 弥

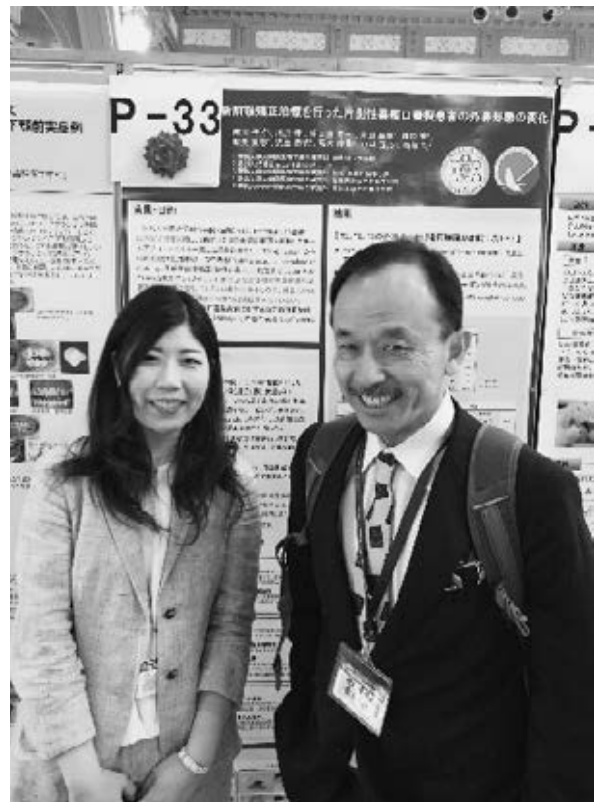
2018年5月に大阪で開催されました、第42回日本口蓋裂学会総会・学術集会にて優秀ポスター賞を受賞致しましたので、ご報告させていただきます。演題は「術前顎矯正治療を行った片側性唇顎口蓋裂患者の外鼻形態の変化」です。

当院では、1973年より口唇裂・口蓋裂治療を開始し、1991年には口蓋裂診療班を組織してチームアプローチによる総合診療を行っています。2008年からは術前顎矯正治療のひとつであるPNAM (presurgical nasoalveolar molding : 術前鼻歯槽矯正) 治療を導入し、現在までに52症例のPNAM治療を行ってきました。これまでもPNAM治療が外鼻形態や歯槽形態の改善に有効であるとの報告はあるものの、外鼻形態に対する治療効果を裏付ける科学的根拠は報告されていません。そこで今回、術前顎矯正治療を行った片側性唇顎口蓋裂症例の初診時から口唇形成後までの外鼻形態の経時的変化について、顔貌写真を用いて術前顎矯正治療を行っていない症例と比較・検討することで、PNAM治療の有効性を明らかにすることとしました。

分析を行った結果、術前顎矯正治療は口唇形成前までに鼻柱および鼻翼の偏位を改善することで口唇形成時の組織移動量を軽減できること、また口唇形成後の鼻翼基部の偏位の改善に有効であることが示唆されました。今回の結果からPNAM治療は外鼻形態の改善に有効であると言えますが、それだけではなく治療に通っていただくこと

で保護者の方の心のケアにもなると実感しています。まだまだ課題は沢山ありますが、今回の受賞を励みに今後の臨床、研究に従事していきたいと思えます。

本研究にあたりご指導を賜りました齋藤功教授、丹原惇先生、臨床を支えていただいております口唇口蓋裂診療チームの先生方、衛生士・看護師のみなさまにこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。



Receiving the “Poster Excellence Award” in the Japan Prosthodontic Society Conference 2018

Division of Bio-Prosthodontic, Graduate School of Medical and
Dental Science, Faculty of Dentistry, Niigata University.

Farah Ali Al-Omari

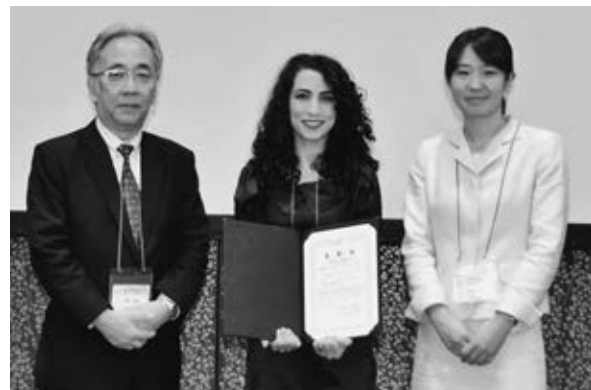
It’s a honor to announce that I have received the “Poster Excellence Award” for the research theme under the title of “The Influence of abutment Screw tightening on Marginal Bone of Dental Implant” in the 127th scientific conference of the Japan Prosthodontic Society which held in Okayama city, June 15th-17th, 2018.

The research investigates the effect of abutment screw high tightening torque and preload stresses on marginal bone around osseointegrated implants over long-term in an animal model. While marginal bone resorption around implants by the occlusal loading force has been investigated in-vivo and in-vitro, the effect of abutment installation itself without the application of occlusal loading forces has not been studied yet. Recently, we are planning to expand the research by include more groups in order to explain and answers multiple clinical questions.

It was a great opportunity to participate in prosthodontic society conference this

year. I had the chance to encounter many researchers to discuss and receive many questions regarding my research, which gave me an insight toward future plans and researches. So, it’s worth to mention that I was so surprised almost shocked that I received the excellence award for my research work which has been presented by a poster. The ambition and energy which felt after receiving the award was a great drive to work harder and to achieve more through my career years.

During the preparation for the conference, I have received support and guidance from our professor Katsumi Uoshima, my supervisor doctor Masako Nagasawa, my team, my department members, and my professor back in Jordan Ameen Khraisat, whom I owe my sincere appreciation and gratitude to all of them. I am honored to work and to have many chances to learn from the researchers and members who belong to our department. It will always be one of the greatest steps in my career as researcher and dentist.



日本補綴歯科学会第127回学術大会 優秀ポスター賞（デンツプライシロナ賞） 受賞報告

摂食嚥下リハビリテーション学分野 真柄 仁

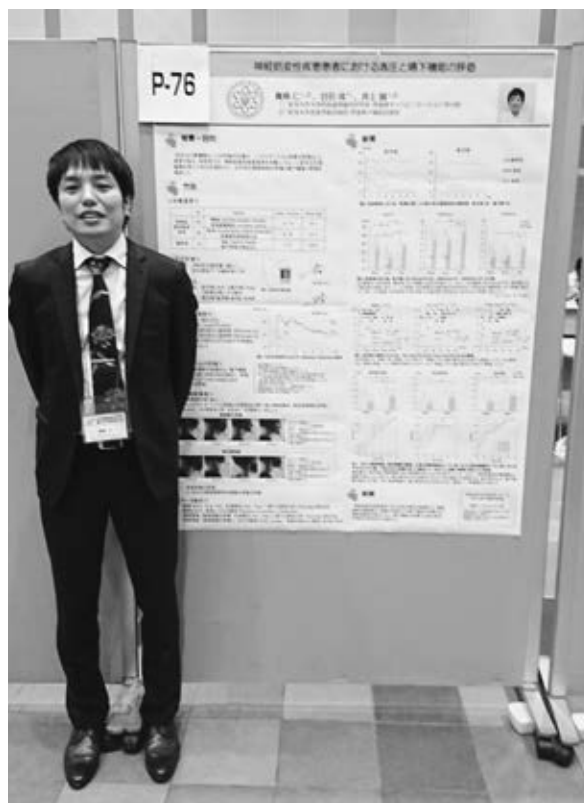
日本補綴歯科学会第127回学術大会（平成30年6月15-17日、岡山にて開催）において、優秀ポスター賞（デンツプライシロナ賞）に選出いただきました。今回の受賞演題名は、「神経筋変性疾患患者における舌圧と嚥下機能の評価」と題し発表したもので、少し内容を紹介させていただきます。

神経筋変性疾患では、主に中枢神経系の特定領域が疾患特異的かつ進行性に侵され、その症状は疾患ごとに異なります。今回、錐体路の変性が生じる筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者、小脳変性や自律神経系の変性が生じる多系統萎縮症（MSA）患者を対象に、嚥下造影検査結果を評価した嚥下機能と、舌圧を評価した口腔機能の関連についての観察研究を行いました。舌圧計測は、通法に加えて後方部（硬口蓋後方部）においても行いました。結果、ALS患者では、健常者やMSA患者に比べ舌圧が有意に低いこと、ALS、MSA患者は健常者に比べ舌圧発揮の持続が困難であることが明らかとなり、さらに後方部の舌圧から食塊の咽頭残留や、液体誤嚥を予測できる可能性があることを示しました。

嚥下障害の臨床は、医師をはじめ、看護師、療法士、社会福祉士、介護士、歯科医師、歯科衛生士など多種職によるアプローチが求められます。その中で、口腔機能を評価し、常に考慮をすることが嚥下障害の臨床に関わる歯科医師としての重要な責務であると感じております。本受賞に際し

では、そのような一側面も評価頂いたものとも感じております。

最後に、本研究の遂行にあたり、御指導を賜りました新潟大学大学院摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授、新潟大学脳研究所神経内科の先生方をはじめ、データ収集に御尽力頂きました同医局スタッフの先生方、御協力に御理解を頂きました患者様にこの場をお借りして感謝申し上げます。



2018年度 日本病院薬剤師会学術奨励賞 新潟県病院薬剤師会学術奨励賞

新潟大学医歯学総合病院薬剤部 顎顔面口腔外科学分野 吉田 謙 介

はじめまして。新潟大学医歯学総合病院薬剤部に所属しております、吉田謙介と申します。現在、東3階病棟専任薬剤師として歯科医師の先生方と一緒に仕事をさせて頂きながら、社会人大学院生として顎顔面口腔外科学分野で臨床研究を学ばせて頂いております。

この度、2018年度日本病院薬剤師会学術奨励賞および新潟県病院薬剤師会学術奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。演題名は「ICT介入による予防的抗菌薬の変更が口腔外科手術におけるSSI発生率と医療費に与える影響」です。

これまで新潟大学医歯学総合病院歯科領域の口腔外科手術では予防的抗菌薬として、経験的にセフトリアム（CTM）が使用されておりましたが、院内感染制御チーム（ICT）が2011年7月に介入し、セファゾリン（CEZ）へ変更となりました。今回、予防的抗菌薬変更による手術部位感染（SSI）発生率と医療費への影響を評価することを目的に調査を行いました。その結果、対象患者1,081名中で、SSI発生率に差はなく、一人当たりの平均投与費用は9,946円から2,169円へと減少し、SSI発生阻止率から算出した費用対効果比は

10,016.3から2,204.5に改善されておりました。

今回の受賞は、薬学の領域において未だ報告の少ない歯科領域において、歯科医師の先生方と協同することで抗菌薬適正使用化に繋がったことを発信する良い機会になったと考えております。また、こうした研究を薬剤師の視点から継続し、医療の現場へ貢献できるように尽力したいと思っております。

最後になりましたが、本研究遂行にあたりご指導を頂きました顎顔面口腔外科学分野の高木律男教授、児玉泰光先生、西川敦先生ならびにご協力頂きました全ての先生方に心より感謝申し上げます。



【お詫び】

2018年4月発行「歯学部ニュース平成29年度第2号（通算132号）」の学会受賞の栗原加奈子様の記事にて、タイトル記載の誤りがございました。

誤 …………… 日本感染症学会東日本地方会奨励賞受賞報告

正 …………… 第76回（公社）日本矯正歯科学会学術大会優秀発表賞を受賞して

修正させていただいたものを次頁に掲載させていただき、大変恐縮ではございますが、著者の方、読者の方ならびに関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

第76回（公社）日本矯正歯科学会学術大会優秀発表賞を受賞して

歯科矯正学分野 栗原 加奈子

この度、2017年10月に札幌で開催された第76回日本矯正歯科学会学術大会にて優秀発表賞を受賞致しましたので、ご報告致します。

演題名は『成人前歯部開咬症の嚥下時舌突出が舌圧発現様相に与える影響』で、口演発表をさせていただきました。研究内容の概略は、前歯部開咬症は、上下顎骨や上下顎歯列弓の垂直的な異常として認められ、嚥下時に上下顎歯列による口腔前方部の閉鎖を行うことができず、健常者と異なる舌動態を呈することが推測されます。さらに嚥下時舌突出を伴う場合があり、その習癖も舌動態に影響すると考えられます。そこで、厚さ0.1mmの舌圧センサシートを用いて、前歯部開咬症の嚥下時における舌突出が舌圧発現様相に与える影響を検討しました。その結果、嚥下時舌突出を認める前歯部開咬症の舌圧は、口蓋正中中央部から後方部で弱く、舌圧波形は多様性に富み、健常群と異なることが示唆されました。今後は舌圧のみならず、口唇や頬部の動きも探索し、それらの協調性を評価することで、さらに深い考察ができると考えております。

さて、札幌には7年間住んでおりましたので、10月の札幌の寒さは承知していたつもりでしたが、飛行機から降り立った途端、肌に突き刺さるような寒さに発表前の緊張がより一層高まりました。ですが

同時に、見慣れた風景に後押しされている感じもありました。発表前には、たくさんの方から激励の言葉をかけていただき、また当日も、壇上から医局員の先生をはじめ、同門の先生が聴衆席にいらっしゃるのがわかり、大変心強く発表に臨むことができました。

このような大変貴重な機会を与えてくださり、またご多忙にも関わらずご指導を賜りました齋藤 功教授、福井忠雄先生、坂上 馨先生をはじめとする歯科矯正学分野の先生、包括歯科補綴学分野の小野高裕教授、堀 一浩先生、ならびにご支援いただきました同門の先生には、心よりお礼申し上げます。

今後日々精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



新潟歯学会報告

平成30年度 第51回新潟歯学会総会報告

平成30年度新潟歯学会集会幹事

顎顔面口腔外科学分野

永田昌毅

平成30年度新潟歯学会の集会係は本年度より顎顔面口腔外科学分野が担当させていただいております。

平成30年4月21日（土）に第51回新潟歯学会総会を例年通り歯学部講堂にて開催いたしました。10時20分からの総会議事では、平成29年度の会計決算報告および会計監査報告が行われ、続いて今年度（平成30年度）の事業計画案ならびに予算案が承認されました。宮崎秀夫先生と吉江弘正先生が名誉会員として承認され、同会員証が授与されました。新潟歯学会賞はう蝕学分野の枝並直樹先生に、新潟歯学会奨励賞が歯科矯正学分野の中田樹里先生にそれぞれ授与されました。総会議事に続き11時から5題の一般演題の発表が行われ、活発に討論がなされました。午後に行われた特別講演は包括歯科補綴学分野の小野高裕教授のご推薦により、広島大学 大学院医歯薬保健学研究科

先端歯科補綴学 津賀一弘教授を講師にお迎えし、「超高齢社会で舌圧検査と舌トレーニング用具を活用する」と題する基礎的、臨床的ならびに社会的背景に根差した興味深いご講演をいただきました。

本年度の参加総数は90人を超え、座長をしていただいた先生方をはじめ演者の方々、学内外から参加をいただいた会員の皆様のご協力により、第51回新潟歯学会総会を無事に終了できましたこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

新潟歯学会に関する詳しい情報は新潟歯学会ホームページをご覧ください (<http://www.dent.niigata-u.ac.jp/nds/index-j.html>)。平成30年度第2回例会は11月10日（土）に同じく歯学部講堂で開催予定です。平成31年度の新潟歯学会賞の応募締め切りは平成31年3月29日（金）の予定ですので奮ってご応募ください。

第五十一回 新潟歯学会総会 次第	
平成三十一年四月二十一日 午後十時二十分より	
一、議長選出	会 員
二、開会の辞および会旗掲揚	会 員
三、報告事項	会 員
会務報告	庶務幹事
平成二十九年度会計決算報告	会計幹事
平成二十九年度会計監査報告	会計監事
四、議 事	庶務幹事
平成三十年事業計画案	庶務幹事
平成三十年度予算案	会計幹事
五、名譽会員の承認	庶務幹事
六、名譽会員証授与	会 員
七、新潟歯学会員の授与	会 員
八、新潟歯学会奨励賞の授与	准奨励幹事
九、閉会の辞	

写真1 第51回新潟歯学会総会 次第



写真2 宮崎秀夫先生、吉江弘正先生 名譽会員証授与



写真3 枝並直樹先生 新潟歯学会賞授与



写真4



写真5 広島大学 津賀一弘教授 特別講演





同窓会だより

同窓会のエトセトラ

副会長 野内 昭宏
専務理事 内藤 義隆

1. 慶事

前回の歯学部ニュース以降、お二人の教授就任がありましたのでご紹介します。

平賀 徹 先生（歯学科22期生） 松本歯科大学 教授就任 平成29年12月。

田中 みか子 先生（歯学科20期生） 明倫短期大学 教授就任 平成30年4月。

また、歯学科48期生の熊田茉彩さんにおかれましては、在学期間を通じて極めて優秀な学業成績を修めたとのことで学長による学生表彰を受けられました。

当同窓会からも、皆様方に祝意をお伝えしました。益々のご発展をお祈りしています。



田中教授（左）にお祝いを渡す有松会長



熊田さんにお祝いを渡す有松会長

2. 歯学科48期生、口腔生命福祉学科11期生の ネームプレートを掲示

歯学部のご厚意の下、歴代の卒業生のネームプ



平賀教授（右）にお祝いを渡す横林長野県支部長





プレートを歯学部4階の渡り廊下に設置しております。

この春に卒業した歯学科48期生、口腔生命福祉学科11期生のネームプレートも卒業式直前に設置しました。ご卒業をお祝い申し上げるとともに、同窓会のメンバーとして歓迎いたします。

3. 同窓会説明会開催（平成30年4月5日）

歯学科6年生、口腔生命福祉学科4年生の皆さんを対象として、同窓会説明会を開催し、同窓会活動について役員が説明をしてきました。

その後の懇親会では、同窓会に対する質問や、卒業後・研修修了後の就職などへの疑問などにお答えしながら、親睦を深めました。



4. 第9回研修歯科医支援塾が開催されました。（平成30年5月17日）

新大病院で研修されている研修歯科医を対象として、研修修了後の進路決定に資するようにと、若手の先生の話聞く会を設けています。

今回の講師は高野遼平先生（歯学科38期、新潟市西蒲区開業）と山田ひとみ先生（歯学科40期、新潟市秋葉区 病院勤務）のお二人。参加された約30名の研修歯科医の先生方に向けて、お二人の講師の先生から熱く語っていただきました。

この会も、過去に研修歯科医として支援塾を受講して道を開いていかれた方々が、今度は講師となって新研修歯科医へアドバイスをしてくれます。歯科医師としてどのように歩いていくかを定める大事な時期ですので、良い出会いをして頂きたいと願うと同時に、このように、新潟大学歯学部並びに歯学部同窓会の新しい伝統が形成されてきていることは大変喜ばしいことと思っております。





新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅢ「地域活動歯科衛生士としての取り組み」を受講して

口腔生命福祉学科7期生 山口 洋 美

平成30年2月18日に開催された新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅢ「地域活動歯科衛生士としての取り組み」を受講させていただきました。



今回のセミナーは、新潟県歯科衛生士会柏崎ブロック長 船岡陽子先生による「地域活動歯科衛生士としての取り組み」というテーマでした。

地域活動歯科衛生士の活動、震災時の避難所・福祉避難所における歯科衛生士の活動等を様々な事例を通して学ぶことができました。

「地域活動歯科衛生士」とは、地域における保健・医療・福祉の各分野の歯科関連事業に携わり、地域の方々の健康づくりを支援する活動を行っている歯科衛生士です。



具体的には、保健分野では母子検診等、医療・福祉分野では退院時カンファレンスやサービス担当者会議への参加、在宅・病院・施設への訪問口腔ケアやそれに伴う加算の算定に携わっているそうです。

様々な活動の事例として、在宅における重度要介護・障がい者を対象とした多職種連携による訪問口腔ケアと口腔機能維持管理加算カンファレンスへの参加、柏崎市における自立支援のためのケア会議への出席、柏崎市健康推進員協議会における介護予防事業の事例を紹介していただきました。



先生が地域で活動する原点となった出来事が中越地震・中越沖地震だったそうです。震災時の避難所・福祉避難所における歯科衛生士の活動として、中越地震・中越沖地震の際の歯科支援活動についてのお話がありました。

震災時に歯科的介入が必要とされた方に対し、避難所・福祉避難所での口腔ケア等の支援の後も中長期的歯科保健支援活動として継続された支援が行われたそうです。その後、居宅療養管理指導



へと継続される方もいらっしゃるそうです。震災時のみの支援活動ではなく、継続的に支援が行われる体制があるのだとわかりました。

病院から在宅へ移行される際の退院時カンファレンス参加や自立支援のためのケア会議出席のお話から、常に介入した方の状態・状況の変化があってもそれに応じて継続された歯科支援を行うことができる体制づくりを行っているのだと感じました。それを行うにあたり、様々な機関・職種と連携が必要であり、多職種連携で活動を行うためには保健・医療・福祉の知識はもちろん、行政のサービス等、実に様々な知識が必要だと感じました。

今回のセミナーを通して、自分が歯科衛生士として業務を行う上で大変参考になるお話を伺うことができました。今回学んだ事を日々の業務に活かす事ができるよう努めていきたいです。

最後に、船岡先生、同窓会関係者の先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。



同窓会総会講演会を聴講して

歯学科25期生 小田 陽平

4月22日、4月にしてはやけに暑い日に同窓会総会が開催され、同時に開催された講演会で歯科薬理学の佐伯万騎男教授より「慢性疼痛に効く新しい鎮痛剤プレガバリンの知識」との演題の講演を聴講した。プレガバリン（商品名リリカ）で、自分も処方する機会がそれなりにあり、薬理学的立場から、かつ、臨床の現場に即した講義は非常にわかりやすく明日からの診療にとても有用だった。

神経障害性疼痛、とは最近ではテレビのコマーシャルでも聞く言葉で、耳に入ればまあそんなものか、と理解したような気になれる（うまい言葉を考えたものだと思います）言葉だが、奥は非常に深い。歯科医師が最もよく出すクスリはNSAIDsに代表される鎮痛薬だと思うが、その一方でNSAIDsが奏功しない痛み、というのも確実に経験する。そんな痛みに対しても有効かもしれないプレガバリンについて、その誕生秘話は偶然と努力の賜物の重なりである、というエピソードは大変興味深く、また、佐伯先生ご自身の「痛みの経験」を交えたユーモラスな語り口で、大変わかりやすくこの薬剤の詳細を解説していただいた。講演の後半では実際の臨床ガイドラインも引用しながら、実臨床で使える知識を丁寧に解説していただいた。特に興味深かったのは「リリカは急に効く薬ではない、1週間くらいかかる」ということである。とかく「痛み止め」はすぐに効いてもらいたい種類の薬であり、患者さんもすぐに痛みを何とかしたいと思っている人が多いが、この講演を聞いて基礎的なところから、それがなぜなのか、作用機序もよく納得して理解することができた。

以前から、がん患者のペインコントロールにおいて（もちろんメインはオピオイドとなるが）、「上手な補助薬の使い方」は自分にとっていつも気になっているテーマであった。癌性疼痛にと



なっしてしばしば「(オピオイドで解決しない) 鈍い違和感」や「締め付けられるような、しびれるような感覚」の訴えを受けるが、プレガバリンはそれらの対策にも有効と思われる。実際に講演聴講後に早速自分の患者さんにも処方したが、「しびれ感」の改善を得ることができ、患者さんにも喜んでいただいた。

医歯薬学は日進月歩でレベルアップしており、常にトピックにアンテナを張り、取捨選択して自分の日常臨床に生かしていくことが求められる。今回の講演後の質疑応答も非常に活発で、同窓会総会に出席したことで、自分の中のそのようなマインドが刺激されたことに感謝した一日であった。



新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅠ「最期まで美味しく食べられることー義歯治療から嚥下障害治療までー」に参加して

歯学科37期生 歯周診断・再建学分野
野中(青木)由香莉



今回、37期の同期が上記の講演をすると聞き、参加させていただきました。

訪問歯科に特化した医院を札幌で開業したという彼女は、学生の頃に受けた特別講義の1枚のスライドを原点に、ここまで歩んできたとのことでした。確かに、その特別講義は興味深かったこと





を私も覚えているものの、私にとってはもはや10年以上前の記憶、印象のみの思い出に過ぎず、「なぜコロッケが食べられないのだろう」という、その時の疑問を、その時の情熱を、忘れずに進んできたという彼女の姿勢は、まさに「初志貫徹」そのものでした。そしてまた、そのスライドを、落ち込んだ時、悩んだ時の糧としている、という言葉が、同期だからこそわかる、ここまでのそれぞれの挫折と苦悩と努力を思わせ、一人感慨に耽ったのでした。学生実習でも、彼女が年配の方に対して温かく接していたことを思い出し、現在も、一人ひとりの患者様の人生に寄り添いながら真摯に向き合う姿が、症例の一つ一つからあふれる情熱からも容易に想像できました。

学生の頃から常に何事にも一生懸命だった彼女らしさに溢れる、非常に熱意に満ちた素晴らしい講義でした。吸着義歯の理論を、訪問歯科に適するように独自にアレンジした点、そしてまた食べ

ることを義歯から嚥下まで総合的に診ている点が、評価されているのだと思います。大学で歯周病学を専門としている自身としても、義歯製作のポイントや、嚥下の評価の実際は、日常の臨床の際の疑問に答える内容で、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。エッセンスに凝縮された90分の講義はとても短く感じ、地元北海道への愛、そして人生の先輩方である患者様への愛情をもって、これからも地域医療に貢献する彼女の講義を、また是非とも聞きたい、と思いました。

同期の講演を、歯学部の講堂で聞くということ自体が、非常に感慨深く、また誇らしく思いました。同じ講義室からスタートし、仕事や子育てなどそれぞれの道を歩む同期の面々と講義の後に話しながら、少し落ち込んだり、反省したり、そして何よりまた明日から頑張ろうという活力を頂けた、貴重な機会となりました。



歯科衛生部門の紹介

診療支援部 歯科衛生部門 後藤早苗

はじめに

こんにちは。平成29年12月1日付で歯科衛生士長を拝命いたしました後藤早苗と申します。歯学部ニュースには9年前にも登場させていただきましたが、その当時、15名だった歯科衛生士も26名に増え、少しずつ歯科衛生士を取り巻く状況も変わりましたので、改めて診療支援部 歯科衛生部門の業務内容や取り組みについて紹介させていただきます。

診療支援部とは

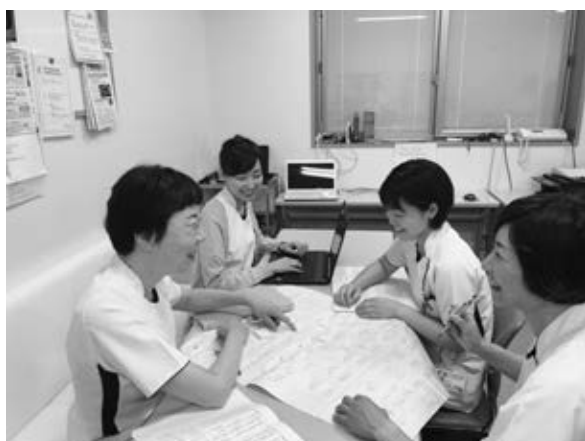
放射線部門・臨床検査部門・リハビリ部門・臨床工学部門・歯科技工部門・歯科衛生部門の6部門で構成されており、チーム医療の中で専門的知識と確かな技術を提供することを使命としています。他職種との相互理解と連携を図るため定期的に広報誌の発行や研修会を開催している他、今年度からは診療支援部としての共通した能力評価・開発、新人教育プログラムの策定を行っています。歯科衛生部門では昨年度からWGを立ち上げ、歯科衛生士に特化したキャリア開発ラダーの

作成に取り組んでいます。

歯科衛生士の業務

歯科衛生士は歯科疾患の予防および口腔衛生の向上を図る（歯科衛生士法第1条）ことを目的としています。患者さんの全身状態を把握し、ライフステージ（小児・成人・高齢者）やニーズを考慮した歯科保健指導、予防処置、診療補助を診療科の専門性を踏まえ実施しています。近年、口の健康と全身の健康状態との関連が注目されるようになり、口腔ケアの重要性が認識され、歯科衛生士への期待がさらに高まっています。歯科外来での業務だけでなく、病棟往診による入院患者さんへの口腔ケア介入なども数多く行っており、大病院の歯科衛生士として高度な専門性が求められています。エビデンスに基づいた知識と確かな技術をもって、チーム医療の一員として期待に応えられる歯科衛生士であるために、部門内で研修会を企画し、研鑽を積んでいます。

他にも、病院のアメニティーモール内で定期的に行われている糖尿病教室や口唇口蓋裂療育サ



WGメンバー



療育サポートミーティングの様子

ポートミーティングにおいて、歯科衛生士の立場から保健指導を行っています。

チーム医療

歯科外来には有病者や介助が必要な患者さんが毎日多く受診されますので、必要な情報を看護師、歯科医師と共有し、安全で安心な歯科医療を提供できるよう配慮しています。また、歯科外来では定期的にカンファレンスが開催され、多職種がチームとなり患者さん1人に対して様々な立場から情報をアセスメントし、よりよい歯科保健医療の提供や支援ができるよう活発な意見交換が行われています。



外来カンファレンス

おわりに

4月から高野衛生士、近藤衛生士が主任となり、歯科衛生部門は新たな体制でのスタートとなりました。人材育成、能力評価、認定取得、臨床研究、教育への取り組みなど課題は多くありますが、目標を定めキャリアアップを支援し、組織として成長したいと考えています。これからも一致団結して皆様の期待に沿えるよう努力をして参ります。田代看護師長はじめ看護師の皆さま、先生方にはご指導いただいております。この場をお借りしてお礼を申し上げます。今後も歯科衛生部門を何卒よろしくお願い致します。



歯学部を支える事務職員

歯学部総務係長 小林 江里

私は、平成28年4月1日付けにて歯学部総務係長として異動して参りました。歯学部への異動が決まった際には、周りから「歯学部なの？羨ましいな」の声しか聞こえてこず、逆に、『本当は、歯学部は大変なところで、私を安心させるためにそう言っているのでは』と疑心暗鬼になっていました。ところが、やはり評判通り、歯学部の先生方は教育・研究に熱心でかつ事務職員に非常に協力的であり、学生さんも「おはようございます。」「お疲れ様です。」と積極的に声を掛けてくれるなど素直だということから、とても仕事をやりや

すい環境だなとすぐに実感しました。

歯学部事務室の紹介ですが、室長を筆頭に総務係と学務係の合計13名からなっています。総務係は、主に先生方の予算及び人事にかかる仕事を行い、学務係は、主にカリキュラム編成及び学生の修学支援等を行っています。私達事務職員は、教員がスムーズに教育及び研究を実施できるよう、並びに、学生が安心・安全に学修に取り組めるよう、日々心がけて仕事を行っています。



新人職員として

歯学部総務係 山下 啓 太

新潟大学の職員として採用後、歯学部総務係に配属になり早2年が経ちました。

現在は旅費計算や契約業務等、会計に関わる業務を行っています。

昨今の国立大学を取り巻く状況は厳しいものがあり、財務的にシビアにならざるを得ない中で、先生方にはいろいろとご面倒なお願いをしておりますが、嫌な顔をせず協力して下さる先生方には感謝の念に堪えません。

また会計業務のみならず、外国にてシンポジウムの補助業務をさせていただくなど、貴重な体験

もさせていただいております。今年の6月に前田学部長に帯同しタイへ行った際には、チェンマイ大学とのMOU更新の立会いや、先方との会食を通じて、新潟大学歯学部が東アジアにおいて重要な位置付けにあることを改めて認識することができました。

最後になりましたが、前述にもあるとおり財務的にシビアな中で、事務手続きは日々煩雑になっております。不明点がありましたら、ぜひぜひご相談いただきたいと思いますので、気軽に声を掛けください。



若手職員の飲み会にて、筆者左

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	30. 4. 1	山 田 友里恵	高度口腔機能教育研究センター助教	高度口腔機能教育研究センター特任助教
採用	30. 4. 1	飯 田 和 泉	口腔生化学分野特任助教	
採用	30. 4. 1	阿 部 遼	歯科矯正学分野教務補佐員	
採用	30. 4. 1	河 村 智 子	歯科矯正学分野教務補佐員	
採用	30. 4. 1	平 原 三貴子	小児歯科学分野教務補佐員	
昇任	30. 5. 1	奥 村 暢 旦	歯学教育研究開発学分野講師	医歯学総合病院歯科総合診療部助教
採用	30. 5. 1	加 来 咲 子	歯学教育開発室特任助教	
配置換	30. 6. 1	北 見 恩 美	高度口腔機能教育研究センター特任助教	歯科薬理学分野産学官連携研究員
配置換	30. 6. 1	平 原 三貴子	小児歯科学分野特任助教	小児歯科学分野教務補佐員
配置換	30. 6. 1	石 田 陽 子	歯学教育開発室特任助教	歯学教育研究開発学分野特任助教
配置換	30. 6. 30	塩 見 晶	医歯学総合病院歯科総合診療部助教	歯学教育研究開発学分野特任助教
採用	30. 7. 1	長谷川 真 奈	歯学教育研究開発学分野特任助教	医歯学総合病院歯科総合診療部医員
採用	30. 7. 7	小 林 太 一	顎顔面放射線学分野助教	医歯学総合病院歯科放射線科医員
配置換	30. 7. 31	高 橋 直 紀	医歯学総合病院歯周病科助教	高度口腔機能教育研究センター特任講師
配置換	30. 8. 1	前 田 健 康	歯学教育開発室教授	高度口腔機能教育研究センター教授

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
採用	30. 4. 1	佐 藤 純 奈	医歯学系歯学部事務室学務係	
採用	30. 4. 1	木 下 優 奈	包括歯科補綴学分野科学技術振興技術者	
配置換	30. 4. 1	山 中 麻 美	医歯学系歯学部事務室総務係	総務部人事課福利・共済係
配置換	30. 4. 1	神 林 祐 代	学務部留学交流推進課留学生支援係長	医歯学系歯学部事務室学務係主任
昇任	30. 4. 1	林 尚 人	医歯学系歯学部事務室総務係主任	医歯学系歯学部事務室総務係係員

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	30. 4. 1	金丸 祥平	口腔再建外科医員	継続
採用	30. 4. 1	佐久間 英伸	口腔再建外科医員	継続
採用	30. 4. 1	竹内 涼子	口腔再建外科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	荻野 奈保子	口腔再建外科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	遠藤 諭	口腔再建外科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	羽賀 健太	口腔再建外科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	上野山 敦士	顎顔面口腔外科医員	継続
採用	30. 4. 1	中谷 暢佑	顎顔面口腔外科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	木口 哲郎	顎顔面口腔外科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	清水 志保	顎顔面口腔外科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	山田 茜	顎顔面口腔外科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	曾我 麻里恵	歯科放射線科医員	継続
採用	30. 4. 1	高村 真貴	歯科放射線科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	金丸 博子	歯科麻酔科医員	継続
採用	30. 4. 1	小玉 由記	歯科麻酔科医員	継続
採用	30. 4. 1	大塚 有紀子	歯科麻酔科医員	継続
採用	30. 4. 1	山崎 麻衣子	歯科麻酔科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	西田 洋平	歯科麻酔科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	小野寺 早紀	小児歯科・障がい者歯科レジデント	継続
採用	30. 4. 1	鈴木 絢子	小児歯科・障がい者歯科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	坂上 馨	矯正歯科医員	継続
採用	30. 4. 1	大倉 麻里子	矯正歯科医員	継続
採用	30. 4. 1	北見 公平	矯正歯科医員	継続
採用	30. 4. 1	大森 裕子	矯正歯科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	網谷 季莉子	矯正歯科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	市川 佳弥	矯正歯科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	藤田 瑛	矯正歯科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	阿部 遼	矯正歯科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	本多 綾子	矯正歯科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	河村 智子	矯正歯科医員(パート)	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	30. 4. 1	中 田 樹 里	矯正歯科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	栗 原 加奈子	矯正歯科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	大 澤 知 朗	矯正歯科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	深 町 直 哉	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	水 越 優	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	長 崎 司	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	工 藤 武 久	矯正歯科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	皆 川 久美子	予防歯科医員	継続
採用	30. 4. 1	宮 本 茜	予防歯科医員	継続
採用	30. 4. 1	野々村 絢 子	予防歯科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	渡 辺 真 光	予防歯科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	宮 澤 春 菜	歯周病科医員	継続
採用	30. 4. 1	松 川 由 実	歯周病科医員	継続
採用	30. 4. 1	佐 藤 圭 祐	歯周病科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	黒 木 歩	歯周病科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	山 田 実 生	歯周病科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	竹 内 麻 衣	歯周病科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	山 崎 恭 子	歯周病科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	金 子 千 尋	歯周病科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	高見澤 圭	歯周病科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	日 吉 巧	歯周病科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	干 川 絵 美	歯周病科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	目 黒 史 也	歯周病科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	田 村 光	歯周病科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	都 野 隆 博	歯周病科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	松 岸 葵	歯周病科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	竹 内 亮 祐	歯の診療科医員	継続
採用	30. 4. 1	長谷川 泰 輔	歯の診療科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	遠 間 愛 子	歯の診療科医員 (パート)	継続
採用	30. 4. 1	鈴 木 裕 希	歯の診療科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	永 田 量 子	歯の診療科レジデント (パート)	継続
採用	30. 4. 1	高 昇 将	冠・ブリッジ診療科レジデント (パート)	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	30. 4. 1	高岡 由梨那	冠・ブリッジ診療科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	小飯塚 仁美	義歯診療科医員	継続
採用	30. 4. 1	吉村 将悟	義歯診療科レジデント	継続
採用	30. 4. 1	大川 純平	義歯診療科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	設楽 仁子	義歯診療科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	上原文子	義歯診療科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	兒玉 匠平	義歯診療科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	船山 さおり	口腔リハビリテーション科医員	継続
採用	30. 4. 1	鈴木 拓	口腔リハビリテーション科医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	吉原 翠	口腔リハビリテーション科レジデント(パート)	継続
採用	30. 4. 1	長谷川 真奈	歯科総合診療部医員	継続
採用	30. 4. 1	日吉 梨乃	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	30. 4. 1	小松 万記	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	30. 4. 1	佐藤 拓実	歯科総合診療部医員(パート)	継続
採用	30. 4. 1	高嶋 真樹子	顎関節治療部医員	継続
採用	30. 4. 1	河村 篤志	顎関節治療部医員	継続
採用	30. 4. 1	山崎 裕太	顎関節治療部医員	継続
採用	30. 4. 1	上松 晃也	インプラント治療部医員	継続
採用	30. 4. 1	今井 秀明	インプラント治療部医員	継続
採用	30. 4. 1	永井 康介	インプラント治療部医員	継続

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	29. 7. 31	木下 優奈		歯科衛生部門歯科衛生士
退職	29. 9. 30	稲野辺 紫巳		歯科衛生部門歯科衛生士
採用	29. 10. 1	佐藤 友佳	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	29. 10. 1	堀川 奈穂美	歯科衛生部門歯科衛生士	
所属換	29. 10. 1	井浦 裕子	高次救命災害治療センター看護師	東3階病棟
昇任	29. 12. 1	後藤 早苗	歯科衛生部門歯科衛生士長	歯科衛生士
退職	30. 1. 31	佐藤 友佳		歯科衛生部門歯科衛生士
採用	30. 2. 1	上村 由紀子	摂食嚥下機能回復部言語聴覚士	

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	30. 2. 28	若 月 彩 貴		東3階病棟看護師
任期満了(再雇用)	30. 3. 31	熊 倉 喜久夫		歯科技工部門歯科技工士
任期満了(特別再雇用)	30. 3. 31	榎 並 美智子		外来4・5階副看護師長
定年退職	30. 3. 31	富 井 優 子		東3階病棟看護師長
定年退職	30. 3. 31	丸 谷 恭 子		東3階病棟看護師
退職	30. 3. 31	阿 部 陽 子		東3階病棟看護師
退職	30. 3. 31	中 野 佑 香		東3階病棟看護師
退職	30. 3. 31	遠 藤 可奈子		東3階病棟看護師
採用	30. 4. 1	沖 津 佳 子	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	30. 4. 1	田 巻 麻帆子	歯科衛生部門歯科衛生士	
採用	30. 4. 1	大 島 唯 太	歯科技工部門歯科技工士	
採用	30. 4. 1	小 川 愛 恵	東3階病棟看護師	
採用	30. 4. 1	後 藤 ひかる	東3階病棟看護師	
採用	30. 4. 1	佐 藤 夕 夏	東3階病棟看護師	
所属換	30. 4. 1	大 貫 倫 子	患者総合サ-ポ-トセンター看護師	東3階病棟
所属換	30. 4. 1	野 村 愛	看護部看護師	外来4・5階
所属換	30. 4. 1	石 井 絵 美	光学医療診療部看護師	外来4・5階
所属換	30. 4. 1	能 瀬 美 鈴	外来エントランス・1階看護師	外来4・5階
所属換	30. 4. 1	本 間 美 貴	西6階病棟看護師	東3階病棟
所属換	30. 4. 1	稲 川 さゆり	東3階病棟看護師長	西11階病棟
所属換	30. 4. 1	石 川 陽 子	東3階病棟看護師	外来エントランス・1階
所属換	30. 4. 1	梅 嶋 渚	東3階病棟看護師	患者総合サポートセンター
所属換	30. 4. 1	尾 瀧 真 未	東3階病棟看護師	外来2・3階
所属換	30. 4. 16	稲 田 綾 子	外来4・5階看護師	西7階病棟

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	29. 10. 1	小林 孝夫	研究企画推進部研究推進課研究資金係長	管理運営課管理係長
配置換	29. 10. 1	及川 俊哉	管理運営課管理係長	研究企画推進部研究推進課研究資金係長
退職	30. 3. 31	泉 井 文 男		総務課副課長
昇任	30. 4. 1	島 田 彰	医事課医事課長	医事課副課長
昇任	30. 4. 1	宇 田 稔 樹	経営企画課医療情報係長	経営企画課主任
配置換	30. 4. 1	江 口 正 樹	自然科学系事務部長	総務課総務課長
配置換	30. 4. 1	小 林 晴 男	医歯学系総務課長	医事課医事課長
配置換	30. 4. 1	小 海 松 男	総務課総務課長	総務部人事課長
配置換	30. 4. 1	佐 藤 千 秋	総務課副課長	人文社会・教育科学系学務課副課長
配置換	30. 4. 1	山 崎 利 弘	医事課副課長	自然科学系総務課副課長（農学部事務室長）
配置換	30. 4. 1	土 田 啓 子	総務部総務課副課長	医事課専門員（安全管理）
配置換	30. 4. 1	野 口 竜 介	医事課専門員（安全管理）	財務部財務管理課本部契約係長
配置換	30. 4. 1	清 野 暁	財務部財務企画課予算係長	経営企画課財務企画係長
配置換	30. 4. 1	木 津 孝 明	総務部労務福利課福利・共済係長	経営企画課医療情報係長
配置換	30. 4. 1	星 野 智 裕	総務部人事企画課人件費・給与計算係長	管理運営課薬品材料係長
配置換	30. 4. 1	福 井 努	医歯学系総務課会計係長	医事課収入係長
配置換	30. 4. 1	小 出 忠 弘	総務課職員係長	総務部人事課専門職員（労務企画）
配置換	30. 4. 1	櫻 井 毅	経営企画課財務企画係長	自然科学系総務課会計係長
配置換	30. 4. 1	波多野 祐二	管理運営課薬品材料係長	総務部人事課福利・共済係長
配置換	30. 4. 1	平 瀬 亮 輔	医事課審査係長	総務部総務課主任
配置換	30. 4. 1	吉 田 淳 一	医事課収入係長	研究企画推進部研究推進課研究資金係長

平成30年度歯学部内委員会

平成30年 4月 1日

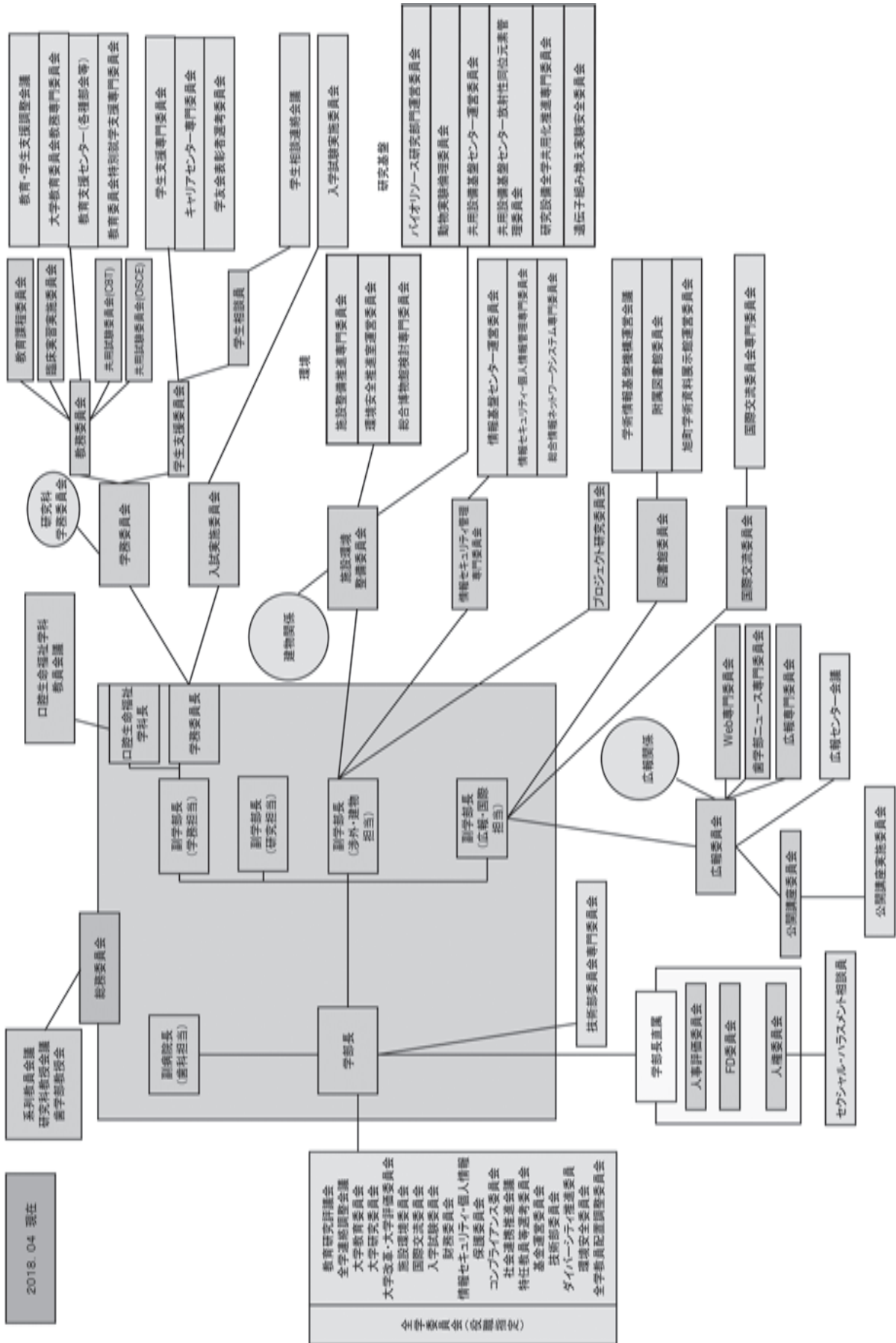
委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
—	前田 健康	系列長		任期 28.4.1~31.3.31
総務委員会	前田 健康	歯学部部長		総括
	小林 正治	副病院長		歯科担当
	大内 章嗣	副学部長・評議員		学務
	魚島 勝美	副学部長・歯学科長		広報・国際
	寺尾 豊	副学部長		研究
	小野 高裕	副学部長		渉外・建物
	葎原 明弘	口腔生命福祉学科学科長		
	小野 和宏	学務委員会委員長		
学務委員会	小野 和宏	学務委員会委員長		総括
	齋藤 功	教務委員長		教務
	高橋 英樹	入試委員会委員長	入試実施委	入試
	山村 健介	学生支援委員会委員長		学生支援
	藤井 規孝	臨床実習委員会委員長		臨床実習
	葎原 明弘	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
	大内 章嗣	副学部長・評議員		学務
教務委員会	齋藤 功	教務委員会委員長		総括
	片桐 涉			
	大内 章嗣			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	ステガロク・ロクサーナ			教育課程(口腔生命福祉学科系)
	大峽 淳			◎共用試験(CBT)
	石崎 裕子			◎共用試験(OSCE)
	小野 和宏	オブザーバー		
教育課程委員会	齋藤 功			
	小野 和宏			
	井上 誠			
臨床実習実施委員会	藤井 規孝	委員長		
	大島 邦子	49期ヘッドインストラクター		
	竹中 彰治	歯の診療科		
	大墨 竜也	歯の診療科		
	杉田 典子	歯周病科		
	多部田 康一	歯周病科		
	五十嵐 直子	義歯診療科		
	藤原 茂弘	義歯診療科		
	秋葉 奈美	冠・ブリッジ診療科		
	小田 陽平	口腔再建外科		
	勝見 祐二	顎顔面口腔外科		
	小山 貴寛	顎顔面口腔外科		
	丸山 智	口腔病理検査室		
	池 真樹子	歯科放射線科		
	勝 良剛 詞	歯科放射線科		
	伊藤 晴江	歯科総合診療部		
	奥村 暢旦	歯科総合診療部		
	遠藤 千佳	看護部門		
	高野 綾子	歯科衛生部門		
	倉田 行伸	歯科麻酔科		
	久保田 悠	予防歯科		
	山賀 孝之	予防歯科		
	渡邊 賢礼	口腔リハビリテーション科		
	伊藤 加代子	口腔リハビリテーション科		
	岩瀬 陽子	小児・障がい者歯科		
	中島 努	小児・障がい者歯科		
	竹山 雅規	矯正歯科		
	丹原 惇	矯正歯科		
	高橋 功次朗	矯正歯科		
	稲川 さゆり	看護部門		
	田代 美佐子	看護部門		
大 湊 麗	言語治療室			
羽田野 政義	歯科撮影室			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
	荒井良明	顎関節治療部		
	星名秀行	インプラント治療部		
	真柄仁	摂食嚥下機能回復部		
	黒川孝一	お口の健康室		
	坂本富美子	歯科外来手術室		
	後藤早苗	歯科衛生部門		
	米澤大輔	口腔生命福祉学科		
	小川友里奈	口腔生命福祉学科		
	柴田佐都子	口腔生命福祉学科		
	小田島あゆ子	口腔生命福祉学科		
	諏訪間加奈	口腔生命福祉学科		
	江川広子	明倫短期大学		
	平澤明美	明倫短期大学		
天池千嘉子	明倫短期大学			
共用試験委員会 (CBT)	大峽淳			必要な都度委員を指名
共用試験委員会 (OSCE)	石崎裕子			必要な都度委員を指名
学生支援委員会	山村健介	学生支援委員会委員長	学生相談室相談員・学生相談連絡会議	総括
	依田浩子			歯学科
	小松康高			歯学科
	秋葉奈美			歯学科
	小田島あゆ子			口腔生命福祉学科
	佐伯万騎男		学生相談室相談員・学生相談連絡会議	歯学部
	伊藤晴江			研究科
学生相談員	山村健介			
	依田浩子			
入試実施委員会	高橋英樹	入試委員会委員長	入試委・入試実施委	総括
	瀬尾憲司	前入試委員会委員長		補佐
	野杵由一郎			
	佐伯万騎男	オブザーバー		
研究科学務委員会	齋藤功			総括
	葭原明弘			教務
	井上誠			学生支援
施設環境整備委員会	小野高裕	副学部長		総括
	佐伯万騎男		施設整備専門委	
	齋藤一誠		総合博物館検討専門委	
	大峽淳		動物実験倫理委員会	
	寺尾豊		遺伝子組換え実験安全委	
	岸本直隆			
共通施設専門委員会	小野高裕	副学部長		
部局環境安全衛生管理室	前田健康			役職指定
	永田昌毅			環境安全管理担当者
	井部達也			事務室長
	林尚人			衛生管理者
情報IT管理専門委員会	西山秀昌		情報基盤センター運営委	総括
	鈴木一郎			IT一般
	中島俊一			
	小田陽平			
図書館委員会	田沼順一			
	寺尾豊	副学部長	医歯学図書館長、附属図書館委員会	
	吉羽邦彦			
国際交流委員会	魚島勝美	副学部長		
	泉健次			
	齋藤功			
	依田浩子			
	大峽淳			
	長澤麻沙子			
	柿原嘉人			
石田陽子	オブザーバー			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
広報委員会	魚島勝美	副学部長	歯学部ニュース専門委	総括
	大島勇人		研究科広報委web担当	◎
	小田陽平		学部広報web専門委	◎
	ステガロク・ロクサーナ		広報委員会(学部)	◎
	吉羽邦彦		広報委員会(研究科)	◎
	黒川孝一		口腔生命福祉学科	◎
研究科広報委員会 (Web担当)	大島勇人			◎
	鈴木一郎			◎
歯学部広報委員会 Web専門委員会	黒川孝一			◎
	小田陽平			
	丹原惇			
歯学部ニュース専門委員会	魚島勝美			他の委員は准講員、助教層からローテーションで選出
広報専門委員会	ステガロク・ロクサーナ		学部	
	吉羽邦彦		研究科	
歯学部公開講座委員会	堀一浩		公開講座実施委員会	
プロジェクト研究委員会	寺尾豊	副学部長		
	小野高裕			
	大峽淳			
	泉健次			
	片桐涉			
	前川知樹			
臨床系実習室管理委員会	小野高裕	共同技工室、実習準備室		
	吉羽永子	臨床基礎実習室、臨床技能評価室、臨床示説室		
	小林哲夫	臨床基礎実習室		
	魚島勝美	臨床基礎技能実習室		
	秋葉奈美	臨床技能自習室		
	藤井規孝	臨床実習技工室		
	黒川孝一	歯科行動科学相互実習室		
人事評価委員会	前田健康	系列長		
	山村健介	任期制教員で基礎系の教授		任期 30.4.1~32.3.31
	林孝文	任期制教員で臨床系の教授		任期 30.4.1~32.3.31
	小田陽平	任期制教員である准教授、講師及び助教のうちから2人		任期 30.4.1~32.3.31
	竹中彰治			任期 30.4.1~32.3.31
FD委員会	秋葉陽介	委員長		
	佐伯万騎男			
	寺尾豊			
	真柄仁			
	伊藤晴江			
	吉羽永子			
	新美奏恵			
	藤原茂弘			
	前田健康	顧問		
	小野和宏	オブザーバー		
	井上誠	オブザーバー		

臨床実習実施委員会以外で任期の記載のない委員会委員の任期は、平成30年4月1日から平成32年3月31日まで
◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員

《歯学部各種委員会》



編集後記

この度、初めて歯学部ニュースの編集委員を務めさせていただきました。作業を行う中で、歯学部ニュースが毎回テーマの選定から始まり、原稿を書いてくださる皆様のご尽力によって成り立っていることを実感いたしました。陣頭指揮を執ってくださった編集長の真柄先生に感謝いたします。新入生への原稿依頼が多かったのですが、学生さんたちの活気のある様子が伝わってきて、私も刺激を受けました。最後になりますが、原稿執筆に快くご協力いただきました先生方および学生さんに厚く御礼申し上げます。

微生物感染症学分野 土門 久哲

これまで歯学部ニュースには寄稿する側として何度か参画させていただいておりましたが、今回は初めて依頼するという立場から発刊に携わせていただきました。真柄編集長の類稀なるリーダーシップのおかげで、編集委員としてだいぶ楽をさせていただいたと思っております。歯学部ニュースは、在学生の保護者の皆様へも発送されますし、オンライン上でも公開されておりますので、私たちの日常をステークホルダーの皆様へ発信する素晴らしい取り組みだということを改めて感じました。ご寄稿いただいた皆様、本当にありがとうございました。

歯科矯正学分野 丹原 惇

This is the first time I participate in the editorial committee of the "Shigakubu Nyu-su" (Dental Faculty News) magazine. As a foreigner, it has been an interesting and challenging task. At the beginning, I was concerned about how to manage the assignments. However, thanks the wonderful work of the organizers and in particular to Dr. Magara it was manageable and easy to understand. I would like to thank all the professors, doctors and students that contribute with their manuscripts and made this edition of the magazine possible. I truly hope that all readers enjoy the stories, thoughts, and comments of all the people that are part of our beloved Niigata Dental Faculty.

Division of Bio-Prosthodontics Rosales Marcelo

この度、歯学部ニュース編集委員を担当させて頂きまずはお忙しい中ご執筆して頂きました皆様に御礼申し上げます。歯学部ニュースは青い猫のポケットの中からメガネの少年のために完成品が取り出されるという便利なものではなく、原稿内容の決定、執筆者の皆様へ依頼・快諾・執筆、校正を行い読者の皆様の手元に届くようになっております。編集後記にまで目を通される方がどの程度いらっしゃるかは分かりませんが執筆者および編集者の血と汗と涙の結晶が詰まった一つの読み物として最後まで読破して頂ければ幸甚です。編集長はじめ編集員の先生方お疲れさまでした。また、ここまで目を通して下さいました読者の方、大変ありがとうございました。次号もご期待下さい。

摂食嚥下リハビリテーション学分野 渡邊 賢礼

初めての歯学部ニュース133号の編集、取りまとめの担当に際し、コンテンツを検討すべく他大学歯学部HPで公開されている広報誌や、歯学部ニュースの過去のバックナンバーを眺めてみました。そこで感じたことは、今皆様をご覧いただいている歯学部ニュースという広報誌は、他大学歯学部広報誌に類をみない重厚さがあることです。また、デジタル化された過去のバックナンバーからは20年以上の新潟大学歯学部の活動を垣間見ることができ、教育、臨床、研究の環境設備の充実化が絶えず図られてきた新潟大学歯学部の歴史と、学生から教職員までの高いアクティビティーの変遷を伺い知ることができます。ご多忙の中、そのページを綴る寄稿に御協力を頂きました教職員、大学院生、学生の皆様には心より感謝申し上げます。

摂食嚥下リハビリテーション学分野 真柄 仁

歯学部ニュース

平成30年度第1号（通算133号）

発行日 平成30年9月30日
発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 真柄 仁、魚島 勝美
編集委員 土門 久哲、丹原 惇
Rosales Marcelo、渡邊 賢礼
印刷所 (株)ウイザップ

表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮 影 地：龍ヶ窪（中魚沼郡津南町）

撮 影 日：2018年8月

使用機材：OLYMPUS E-M5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／絞り：F4.5・シャッター速度：80分の1秒

裏表紙の撮影データ

撮 影 地：東蒲原郡阿賀町日出谷

撮 影 日：2018年8月

使用機材：OLYMPUS E-M5 Mark II/M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO／絞り：F16・シャッター速度：BULB（約14秒）

コメント：今回は新潟県内の地域撮影スポットを題材にしてみました。表紙は津南町の龍ヶ窪ですが、環境省による昭和の全国名水百選に選定されており、水が1日に入れ替わるほどの豊富な湧水で、濁ることもなく、地域一帯の生活を支えているとのこと。透明感のある陰影深い緑を再現するのは難しいのですが、ここではあえてカメラ内の画像処理エンジンで「JPEG撮って出し」としてみました。裏表紙は奥阿賀かのせふるさとまつり花火大会で撮影しました。打ち上げ花火はシャッターを開いたまま維持して光跡を残すのが常道とされ、この写真も作法どおりレンズの広角端でバルブ撮影をおこなっていますが、オートフォーカスのデジタルカメラはピント位置を無限遠にするのが難しく、ライブビューで民家の明かりを頼りに微調整しました。背景が漆黒の花火は大きさが実感しにくいですが、左下の方にわずかに写っている電柱との比較で認識できると思います。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：OLYMPUS E-M5 Mark II, E-P5

レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0

撮 影 者：林 孝文



リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。